秋田県文化財調査報告書第433集

布田谷地遺跡

―一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―

２００７・１１

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992 年 8 月発見、高さ 7 ㎝、凝灰岩。

布田谷地遺跡

ぬ の た や ち い せ き

―一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―

２００７・１１

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に先だって、平成18年度に実施した布田谷地遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では縄文時代後期の土器や平安時代の竪穴住居跡等が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年11月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の２冊目である。
2　本書は、平成18年度（2006年度）に調査した、秋田県大仙市北楢岡字布田谷地に所在する布田谷地遺跡の調査成果を収めたものである。
3　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。
4　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1『大曲』・『刈羽野』、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1,000分の１工事路線計画図である。
5　遺跡基本層位と遺構土層中の土色、遺物の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2004年版によった。
6　空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
7　第５章「自然科学的分析」は、パリノ・サーヴェイ株式会社、（株）東都文化財保存研究所に委託した分析報告書を収載した。
8　本書の草稿執筆は、吉川寿朗、深沢恵里子、長岐有扶子が行った。
9　本書の編集は、栗澤光男が行った。

凡　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＫＴ・・・陥し穴	ＳＩ・・・竪穴住居跡	ＳＢ・・・掘立柱建物跡
ＳＥ・・・井戸跡	ＳＫ・・・土坑	ＳＤ・・・溝跡
ＳＮ・・・焼土遺構	ＳＫＰ・・・柱穴様ピット	

2　土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
3　挿図中の須恵器片拓影は、断面の左側に内面、右側に外面を配置している。縄文土器片については、断面の左側に外面を配置した。

目　次

序
例言・凡例
目次
第１章　はじめに・・1
　第１節　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第１節　遺跡の位置と立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第１節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　１　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　２　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第２節　平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　　１　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　　２　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　第３節　中世の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第５章　自然科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　第１節　布田谷地遺跡の自然科学分析調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　第２節　布田谷地遺跡出土木製品の樹種・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第６章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２図　布田谷地遺跡（★）と周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３図　調査対象範囲図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第４図　グリッド設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第５図　Ａ区・Ｂ区基本土層実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第６図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11・12
第７図　ＳＫＴ44・ＳＫＴ45陥し穴実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第８図　遺構外出土縄文土器実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第９図　遺構外出土縄文土器実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第10図　遺構外出土縄文土器実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第11図　遺構外出土縄文土器実測図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第12図　遺構外出土縄文土器実測図（5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第13図　遺構外出土縄文土器実測図（6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第14図　遺構外出土縄文土器実測図（7）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第15図　遺構外出土縄文土器実測図（8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第16図　遺構外出土縄文土器実測図（9）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第17図　遺構外出土石器実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第18図　遺構外出土石器実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第19図　ＳＩ05竪穴住居跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第20図　ＳＩ05竪穴住居跡カマド実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第21図　ＳＩ05竪穴住居跡遺物出土分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第22図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第23図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第24図　ＳＢ40掘立柱建物跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第25図　ＳＢ41掘立柱建物跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第26図　ＳＥ03・09・21・22・31・38・43井戸跡実測図・・・・・・・・・・・・・・35
第27図　ＳＥ03・09・43井戸跡及びＳＤ08溝跡出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・37
第28図　ＳＫ02・04・07・12・16・20土坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第29図　ＳＫ02 土坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第30図　ＳＫ04・07・12土坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第31図　ＳＫ23～30・32・33土坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第32図　ＳＫ16・29・30土坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第33図　ＳＫ32・33 土坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第34図　ＳＫ34・36土坑、ＳＤ08・42溝跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第35図　ＳＮ10・13～15、17～19、35・39焼土遺構実測図・・・・・・・・・・・・・49
第36図　ＳＮ13～15、19・39焼土遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・51
第37図　ＳＫＰ029・111・122・126柱穴様ピット出土遺物実測図・・・・・・・・・・52
第38図　遺構外出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第39図　遺構外出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第40図　遺構外出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第41図　中世の出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

表 目 次

第１表　布田谷地遺跡周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第２表　柱穴様ピット観察表（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第３表　柱穴様ピット観察表（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

図版目次

図版１　ＳＫＴ44・45陥し穴、遺構外出土縄文土器
図版２　ＳＩ05竪穴住居跡、ＳＢ40・ＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＥ03井戸跡
図版３　ＳＥ21・22・31・38・43井戸跡、ＳＫ07・12土坑
図版４　ＳＫ29・30・32・33・34・36土坑、ＳＤ08・42溝跡

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

一般国道13号神宮寺バイパス建設事業は、大仙市花館から大仙市北楢岡に至る全長9.6㎞を自動車専用道路として整備する事業である。

神宮寺バイパスが整備されることにより、交通混雑の解消と冬期における道路交通の安全性の向上が図られるとともに、平成13年度に完成した刈和野バイパス及び大曲バイパスと一体的に機能することで、大曲都市圏の産業・経済・文化のいっそうの発展が期待される。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

布田谷地遺跡の確認調査は平成17（2005）年度に行われ、平安時代の遺構と遺物が確認されたことから、翌18（2006）年度に発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査要項

遺　跡　名　　布田谷地遺跡（ぬのたやちいせき）遺跡略記号：7ＮＴＹＴ
所　在　地　　秋田県大仙市北楢岡字布田谷地112番地外
調 査 期 間　　平成18年６月13日～10月２日
調 査 目 的　　一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前調査
調 査 面 積　　5,750㎡
調査主体者　　秋 田県教育委員会
調査担当者　　柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　副主幹兼調査班長）
　　吉川　寿朗（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事）
　　深沢恵里子（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査研究員）
　　長岐有扶子（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査研究員）
総務担当者　　柴田　卓也（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任）
　　佐々木和幸（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
　　（担当者・職名は調査時のものである）
調査協力機関　　国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所・大仙市教育委員会

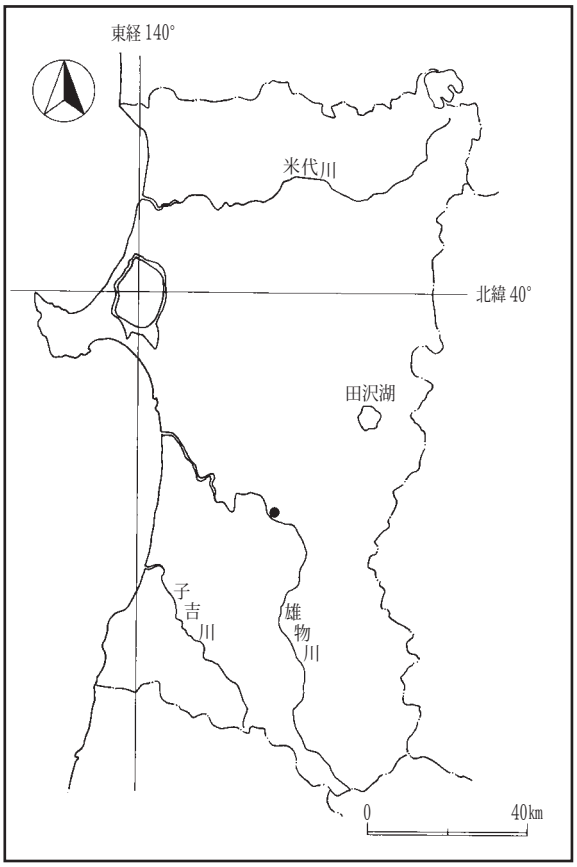
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

布田谷地遺跡のある大仙市は、秋田県の南東部に位置する。平成17（2005）年３月、大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の一市六町一村が合併し、現在の大仙市が誕生した。東は仙北市・岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市と、南は横手市・美郷町と、北は仙北市と接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道などの陸路・鉄路の結節点として拠点機能の強化が進んでいる。

本遺跡は旧神岡町、ＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西約3.5㎞の北緯39度30分03秒、東経140度24分32秒に位置する（第１図）。遺跡の南約1.7㎞を、横手盆地南端の山地を源流にする雄物川が西流しており、出羽山地を先行的に横断し、秋田平野に出て日本海に注いでいる。遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地（段丘地）、低地によって構成される。遺跡の北側一帯は、高野台地が広がっている。高野台地の段丘面は、かつては草地として重視された歴史もあるが、近年は田地や畑地の耕地化が進み、また段丘崖とともに杉の人工林が目立っている。一方、雄物川を挟んだ南東側には出羽山地に属する姫神山山地があり、姫神山（387.6ｍ）や神宮寺嶽（277ｍ）がそびえ、その側辺は段丘や低地になっている。遺跡の東西および南側の低地(中央低台地)は雄物川によって形成された先行谷の中にあり、独特の幅狭い狭窄部低地といった峡谷の景観ではなく、広々とした氾濫平野の感じを強く印象づける眺望である。現在は水田地帯として整備されているが、先行谷最下位の低地には、河原、氾濫平野、砂堆地、旧河道などが散在する。先行谷の広がりは、雄物川下流の刈和野地区や強首地区まで続き、特に強首地区の左岸一帯は、曲流部の緩やかな滑走斜面で、そこには広大な七段の砂礫段丘が、反対の攻撃的斜面には河触崖がみられる。

遺跡は、西流する雄物川右岸に形成された標高21～23mの河岸段丘上に立地している。地質は、第四紀洪積世に形成された礫・砂および泥層である。



第１図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

布田谷地遺跡は平安時代を主体とする遺跡である。このほか、縄文時代後期や近世以降の遺物も確認した。ここでは縄文時代から近世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の（ ）内の数字

は、第１表と第２図の表示番号に対応している。

縄文時代の遺跡では、中期から晩期までの計12遺跡が確認されており、晩期の遺跡が多い。中期の高野Ⅰ遺跡（6）・笹倉遺跡（9）、中期～後期の愛宕下遺跡（12）、後期～晩期の薬師遺跡（24）、晩期の萩の台遺跡（3）・上高野遺跡（5）・小沢遺跡（13）・落貝遺跡（14）・茨野遺跡（23）、時期不詳の八石遺跡（4）・北田遺跡（20）・山王台遺跡（22）がある。高野Ⅰ遺跡、笹倉遺跡は、昭和28・29（1953・1954）年に武藤鉄城氏によって発掘調査が行われ、前者からは中期の大木式土器が出土し、後者からは７基の組石遺構が検出された。薬師遺跡は平成15（2003）に発掘調査が行われ、後期と晩期の土器、石鏃・石匙・磨製石斧などが出土した。小沢遺跡は昭和60（1985）年に確認調査、平成元（1988）年に発掘調査が行われ、晩期の大洞Ｂ～Ａ式の土器が出土し、時期不明のカマド跡が検出されている。落貝遺跡は、昭和40（1965）年に豊島昴氏によって発掘調査が行われ、２基の組石棺が検出され、晩期の粗製土器が出土した。茨野遺跡は、平成14・15（2002・2003）年に神岡町教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代後期と中世の集落跡が発見された。愛宕下遺跡からは、青龍刀形石器、石鏃、石棒が出土している。

弥生時代の遺跡は、本遺跡周辺では確認されていない。

古代の遺跡では、高野Ⅱ遺跡（7）・坊ヶ沢遺跡（8）の計２遺跡が確認されている。坊ヶ沢遺跡では須恵器の大甕が出土した。また、図幅外であるが布田谷地遺跡から東南東に約12.5㎞の位置に、国指定史跡払田柵跡がある。

中世の遺跡では、昭和50年代に行われた分布調査などにより、丘陵上または平地に立地する多数の中世城館が確認されており、松山城（1）・龍蔵寺館（2）・富樫館（10）・神宮寺掃部館（11）・朝夷奈古柵（15）・平形館（16）・木直沢館（17）・猿倉沢館（18）・楢岡城（19）・壇ノ平館（21）が知られている。出羽山地の北東に突出した丘陵端に位置する松山城は、北東方向に並列する２つの嶺上にあり、大体２つの郭からなる城跡で、前九年の役の頃、阿部貞任・宗任が居城していたと言われている。馬場跡や湧水の存在も指摘されており、須恵器が出土している。龍蔵寺館は、比高およそ5mの単郭の館で、郭はほぼ台形である。北東隅に大山祇神社が祭られ、その近くに井戸跡がある。郭の北縁に、土塁が築かれており、土塁の下には空掘がある。郭の西麓には長沼があって内濠の役目を果たしたものと推定される。この館には、長禄の頃（1457～60）、雄勝松岡城主柴田平九郎の老臣龍蔵寺伯耆守が移り住み、永禄８（1565）年落城したという。昭和50（1975）年、付近で直径30～40㎝、長さ3mの、下部が削られ上部が朽ちた杉丸太がほぼ5m間隔で出土した。富樫館は、かつて四方を川や沼沢で囲まれた天然の要塞であったと伝えられる。館を築いたのは富樫佐衛門佐誠白で、文和３（1254）年には氏神白山権現を勧請し、永徳２（1382）年に宝蔵寺を建立している。館跡の東側には蓮沼、北から西へ栗谷田に字名があり、栗谷田は厨田の宛字とも言われる。栗谷田との境には濠跡といわれる用水路があり、また、駅前を東西に横切る水濠があったといわれ、台地の両側にはその跡と思われる幅約30mのくびれが見られる。神宮寺掃部館は長方形の単郭で、周囲の水田より3mほど高くなっている。北西の隅に土塁らしき土盛り、東側に犬走り状の低地がある。四周水濠によって囲まれていたと伝えられるが、水田となって痕跡不明である。館は正慶の頃（1332～34）築かれたという。また、平成15（2003）年に発掘調査が行われた薬師遺跡では、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡、道路跡などからなる集落跡が検出され、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土した。

近世の遺跡では、三本杉経塚・三本塚一里塚・龍蔵台経塚・小豆沢一里塚がある。三本塚一里塚は県指定史跡になっている。

引用・参考文献

神宮寺公民館　『笹倉・東高野遺跡発掘調査報告書』　1955（昭和30）年

秋田県　『土地分類基本調査刈和野』　1979（昭和54）年

秋田県　『土地分類基本調査大曲』　1977（昭和52）年

秋田県文化財保護協会　『秋田県の中世城館』　1981（昭和56）年

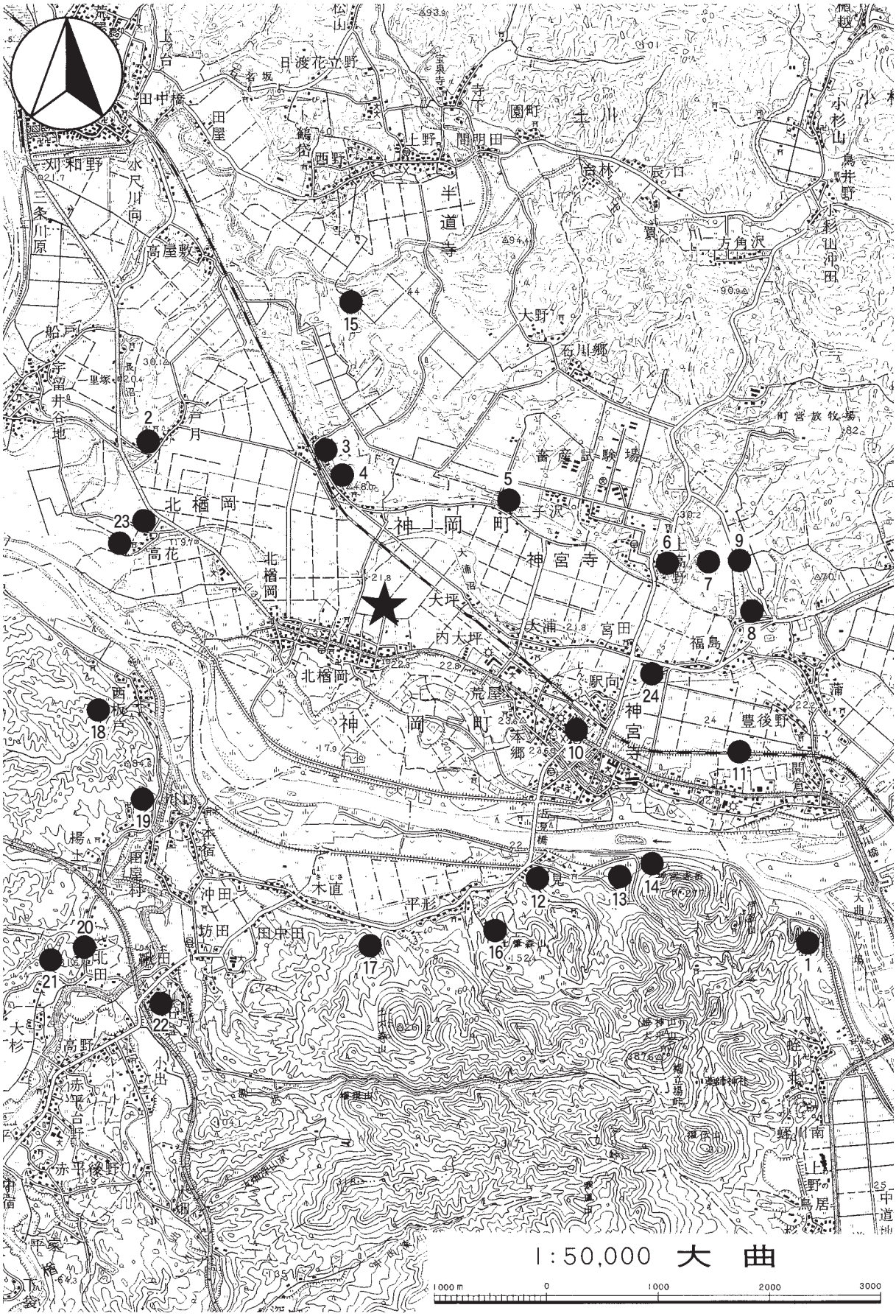
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県南版）』　1987（昭和62）年

秋田県神岡町教育委員会　『小沢遺跡発掘調査報告書』　神岡町文化財調査報告書　2004（平成16）年

秋田県教育委員会　『薬師遺跡』　秋田県文化財調査報告書第388集　2005（平成17）年

第１表　布田谷地遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	種別	主な遺構・遺物
1	松山城	212－8－30	館跡	須恵器
2	龍蔵寺館	212－45－3	館跡	土塁・空堀・井戸跡（陥没）
3	萩の台	212－45－5	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石鏃・石棒
4	八石	212－45－6	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石鏃・石匙・石斧
5	上高野	212－45－7	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石斧
6	高野Ⅰ	212－45－9	遺物包含地	縄文土器（後期・晩期）・土版・石匙・石錐・石錘・石斧
7	高野Ⅱ	212－45－10	遺物包含地	須恵器
8	坊ヶ沢	212－45－11	遺物包含地	須恵器完形甕
9	笹倉	212－45－12	遺物包含地	縄文土器（後期・晩期）・凹石
10	富樫館	212－45－13	館跡	
11	神宮寺掃部館	212－45－14	館跡	
12	愛宕下	212－45－15	遺物包含地	青竜刀型石器・石鏃・石棒
13	小沢	212－45－16	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石匙・石棒
14	落貝	212－45－18	遺物包含地	石棺、縄文土器・石鏃
15	朝夷奈古柵	212－46－35	館跡	
16	平形館	212－55－1	館跡	主郭・竪掘
17	木直沢館	212－55－2	館跡	空堀
18	猿倉沢館	212－55－3	館跡	
19	楢岡城	212－55－4	館跡	主郭・腰郭・馬場跡・井戸跡、青磁
20	北田	212－55－5	遺物包含地	縄文土器・有柄石鏃・石匙・石錘・磨製石斧
21	壇ノ平館	212－55－6	館跡	主郭
22	山王台	212－55－7	遺物包含地	竪穴住居跡、縄文土器・石匙・石なた・石棒
23	薬師	212－45－19	遺物包含地	掘立柱建物跡・土坑、縄文土器・須恵器系中世陶器・瓷器系中世陶器
24	茨野	212－45－20	遺物包含地	竪穴住居跡・掘立柱建物跡、縄文土器・石器・青磁・青白磁・須恵器系中世陶器・フイゴ羽口・銭貨



第２図　布田谷地遺跡（★）と周辺遺跡位置図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

布田谷地遺跡は、ＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西約3.5㎞にあり、西流する雄物川右岸に形成された標高約21～23mの河岸段丘上に位置している。雄物川は古来幾度となく氾濫を繰り返し、遺跡周辺には旧河道や砂堆地、河原、氾濫平野などが散在する。遺跡の北側一帯には丘陵地が広がり、北東には雄物川の残存湖である大浦沼がある。また、南東には姫神山や神宮寺嶽の連なる姫神山山地を望む。

遺跡の現況は休耕田であり、ほぼ平坦である。なお、調査区内を南北に走る市道北楢岡沼尻線により調査区が二分されており、便宜的に市道より東側の調査区をＡ区、西側をＢ区と呼称した。

今回実施した発掘調査により、遺跡は平安時代の集落跡であることがわかった。また、調査区の基本土層は、Ａ・Ｂ区に設けた土層観察用トレンチで４層に分層できた（第６図参照）。

第２節　調査の方法

発掘調査は、グリッド法を採用し行った。調査区内の任意の点を原点（ＭＡ 50）とし、この原点から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してグリッドを設定した。グリッド杭には、北に行くに従い51、52、53、・・・・・・という２桁の算用数字と、西に行くに従いＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・・・・というアルファベット２文字を組み合わせた記号を記入した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

調査は確認調査の結果に基づき、調査区の東側と西側の一部を除き、バックホーにより表土除去を行い、包含層の掘り下げや遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行ったが、柱穴様ピット（ＳＫＰ）に関しては別に遺構番号を付した。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

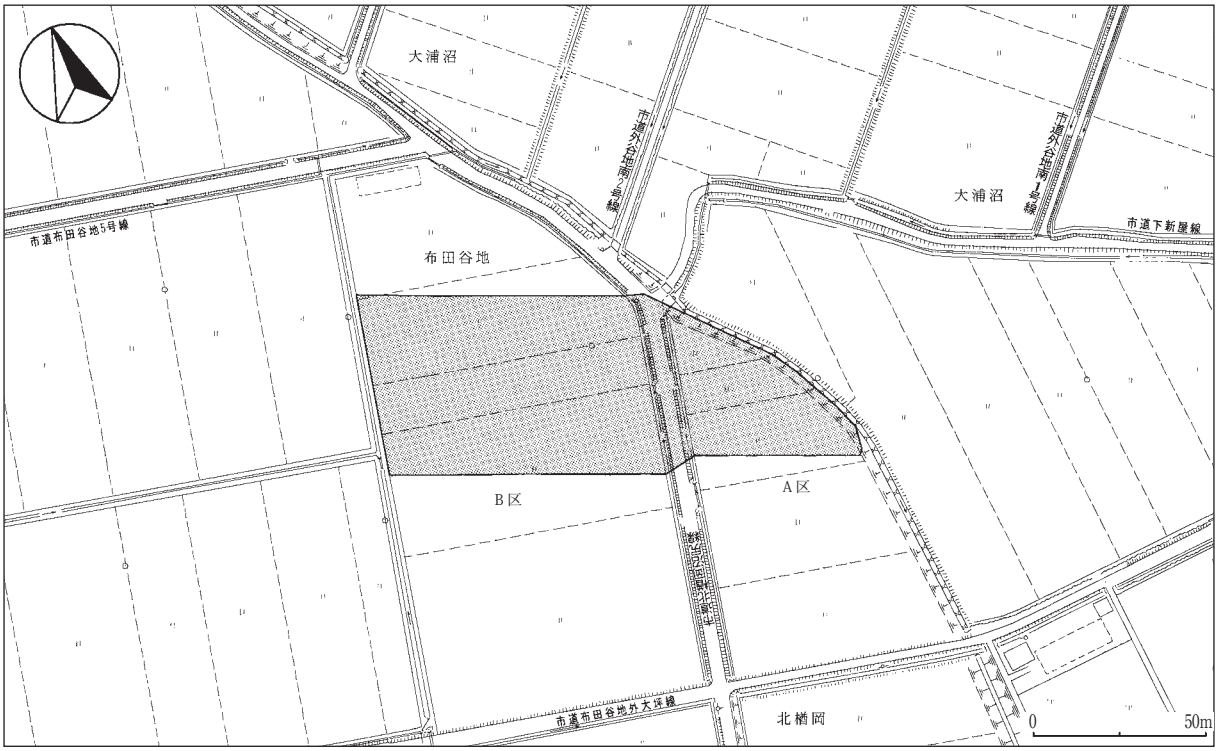
調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35㎜モノクロ・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを使用した。

第３節　調査の経過

布田谷地遺跡の発掘調査は、平成18年６月13日から10月２日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第１週】６月13日～６月16日

13日、発掘機材の搬入と環境整備を行う。翌日から人力でＡ区の表土除去作業・確認調査時のトレンチ掘削作業・排水溝掘削作業を開始する。ベルトコンベアーの搬入・設置作業も行った。16日から



第３図　調査対象範囲図

は、Ａ区基本土層観察ベルトの設定作業を開始した。

【第２週】６月19日～６月23日

Ａ区の精査を進めたところ、ＬＬ 41・42グリッド周辺で竪穴住居跡を検出。土層観察用の十字ベルトを設定し、精査を開始した。柱穴様ピットも20基ほど検出したが、掘立柱建物跡になるような配列にはなっていない。遺構を精査する際、湧水の影響を大きく受けるので、Ａ区南側の排水溝をさらに深く掘削する作業を始める。

【第３週】６月26日～６月30日

竪穴住居跡周辺の遺構確認作業を丁寧に行ったところ、土坑（後に井戸跡）や柱穴様ピットを検出した。また、竪穴住居跡においてカマドを確認し、精査を始める。カマド北東側に隣接する土坑からは完形の土師器が伏せた状態で出土した。Ａ区東端では溝跡を検出し、北西方向に延びていくことを確認した。遺物は、Ⅱ・Ⅲ層で土師器片や須恵器片、縄文土器が出土するが、散発的でその量はごく僅かである。29日から、重機によるＢ区の表土除去作業を開始する（宮原組）。

【第４週】７月３日～７月７日

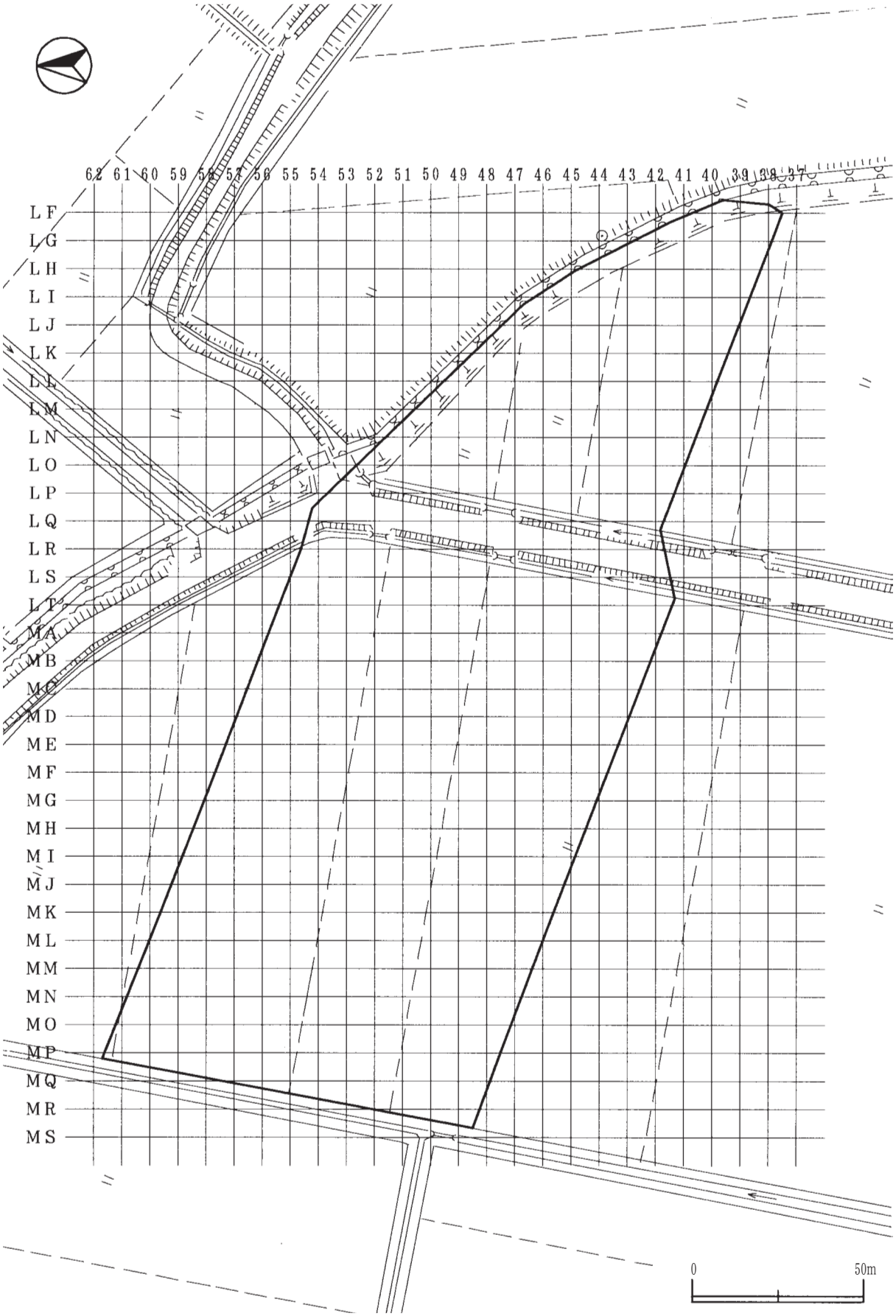
Ａ区では、引き続き遺構確認作業、遺構精査を進める。竪穴住居跡のカマド南西側に隣接する土坑から、Ｕ字型の鋤先状鉄製品が出土。Ｂ区では、人力による表土除去作業とＢ区周縁に排水溝を設ける掘削作業を開始する。また、グリッド杭打設作業が始まる（ミズホ測量）。

【第５週】７月10日～７月14日

Ａ区に設置していたベルトコンベアーをＢ区へ移動し、市道に隣接するＢ区東側から遺構検出作業を開始する。週末の二日間は雨のため調査活動ができず、進入路の補修作業やＢ区の排水作業を行う。

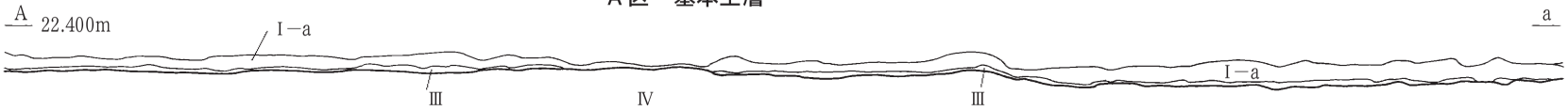
【第６週】７月18日～７月21日

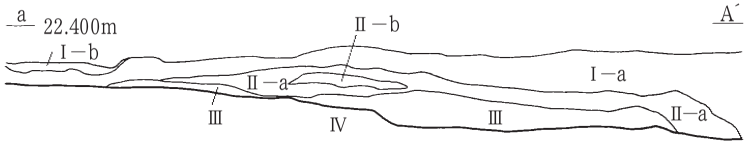
Ａ区で検出した溝跡周辺の原地形を確認するために、溝跡に隣接するように深掘りトレンチを２か


62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37
LF
LG
LH
LI
LJ
LK
LL
LM
LN
LO
LP
LQ
LR
LS
LT
MA
MB
MC
MD
ME
MF
MG
MH
MI
MJ
MK
ML
MM
MN
MO
MP
MQ
MR
MS
0
50m

第４図　グリッド設定図

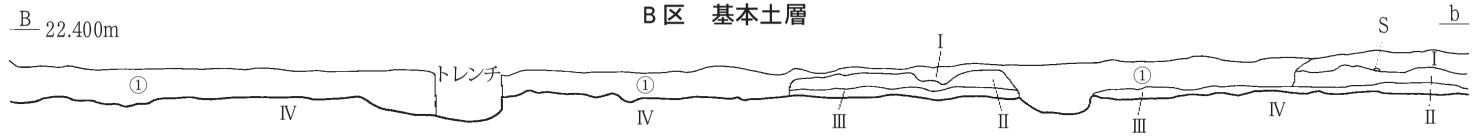
Ａ区　基本土層



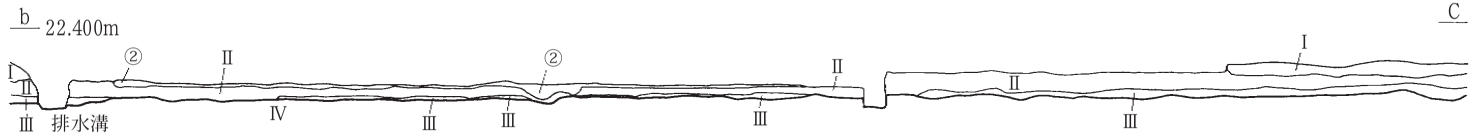


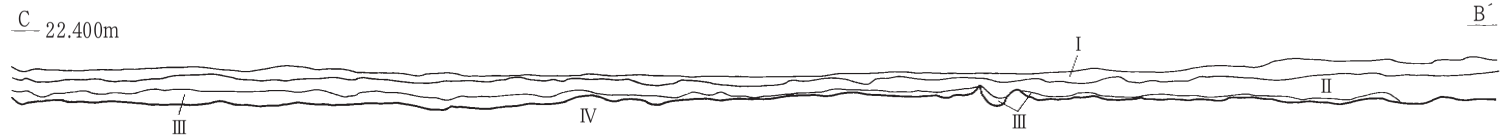
Ａ区　基本土層
Ⅰ-a　表土黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性弱　酸化土粒少量　植物根少量含む
Ⅰ-b　盛土黒褐色土（10YR3/2）しまり強　粘性強　酸化土粒少量　地山土粒少量
植物根多量含む
Ⅰ-c　盛土黒褐色土（10YR3/2）しまり弱　粘性中　酸化土粒多量　地山土粒少量含む
Ⅱ-a　遺物包含層黒色土（7.5YR2/1）しまり中　粘性中　酸化土粒少量　炭化物微量含む
Ⅱ-b　遺物包含層にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり弱　粘性中　酸化土粒少量
地山土粒多量含む
Ⅲ　漸移層黒色土（10YR2/1）しまり中　粘性強　酸化土粒少量　地山土塊少量含む
Ⅳ　地山（青粘土部分）オリーブ灰色土（2.5GY5/1）しまり強　粘性強　酸化土粒少量含む
Ⅳ　地山黄褐色土(2.5Y5/3) しまり強　粘性弱　酸化土粒少量含む

Ｂ区　基本土層



①はトレンチの埋め戻し土
②は工事の盛土
Ｓは礫





Ｂ区　基本土層
Ⅰ　表土耕作土黒褐色土（10YR3/2）
Ⅱ　遺物包含層黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性中　酸化土粒多量含む
Ⅲ　漸移層縄文時代の遺物包含層黒褐色土（10YR3/2）しまり中　粘性強　酸化土粒多量含む
Ⅳ　地山暗灰黄色土（2.5Y4/2）しまり中　粘性中　酸化土粒多量含む

第５図　Ａ区・Ｂ区基本土層実測図

所に設定した。Ａ区の全景写真を撮り、Ａ区の調査を全て終える。Ｂ区では、人力による表土除去作業と遺構検出作業を並行する。確認調査においてカマド状遺構と判断された焼土が集中するＬＴ52グリッド周辺の精査を開始する。

【第７週】７月24日～７月28日

Ｂ区北東隅で、焼土遺構を２基検出。その覆土中から焼けたクルミと思われる炭化物が出土した。ＬＴ52グリッドの焼土集中地点にサブトレンチを設定し土層を観察したが、竪穴状の掘り込みは確認できなかった。

【第８週】７月31日～８月４日

調査区内を通る市道（旧市道）を調査の終わったＡ区内に付け替える工事が始まる（新市道）。Ｂ区では、表土除去作業・遺構検出作業・遺構精査を並行する。遺物は、Ａ区同様散発的に出土しているが、縄文土器は限られた範囲内からまとまって出土する傾向がみられるようになってきた。

【第９週】８月７日～８月11日

気温が30度を超える日が続き、熱中症の予防を第一に調査を進める。Ｂ区基本土層観察ベルトの実測作業を開始する。２基並んで検出されたＳＫ21とＳＫ22は、湧水量の多さとその形状から井戸跡と判断した。

【第10週】８月22日～８月24日

旧市道跡にグリッド杭を打設し、調査を開始する。土坑や柱穴様ピットを検出し、精査を進める。

【第11週】８月28日～９月１日

旧市道跡を中心に、遺構検出作業・遺構精査を進める。多数検出されている柱穴様ピットの位置関係を吟味し、掘立柱建物跡になるかの見極め作業を開始する。

【第12週】９月４日～９月８日

Ｂ区の遺構検出作業・遺構精査を中心に進める。柱穴様ピットの位置関係を吟味したところ、２棟の掘立柱建物跡を検出。旧市道跡の調査を終える。

【第13週】９月11日～９月15日

Ｂ区の遺構検出作業・遺構精査を進める。ＭＨ47で検出した井戸跡の精査を進めたところ、底から曲物が出土した。また、Ｂ区西側では、縄文時代の遺構と思われる陥し穴を２基検出した。

【第14週】９月19日～９月22日

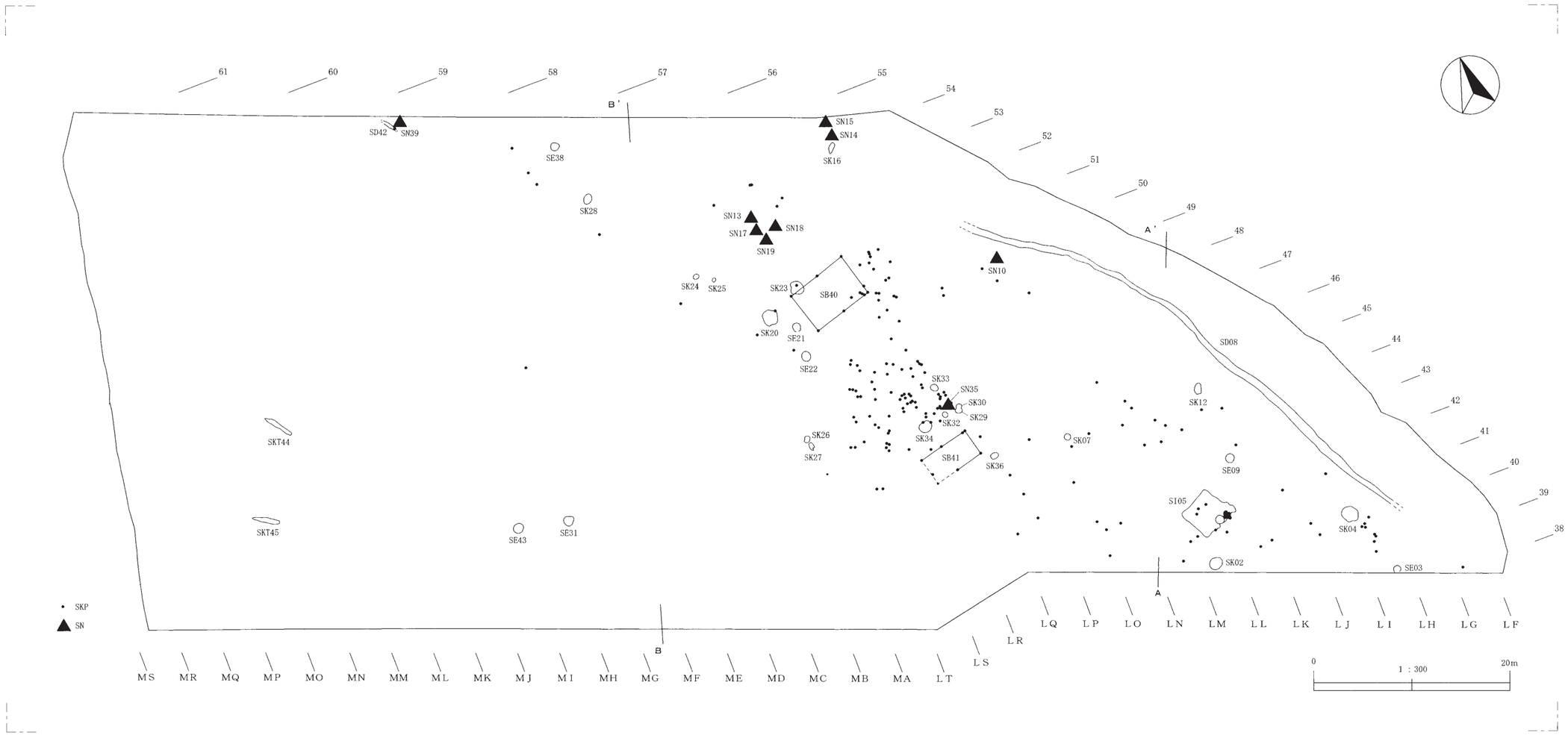
24日の遺跡見学会に向けての準備作業を進める。大仙市立北神小学校の４年生が来跡。

【第15週】９月24日～９月29日

24日に遺跡見学会を実施。来跡者数は117名であった。26日には、空中写真撮影を行った。調査の終了が近づき、撤収のための準備を始める。

【第16週】10月２日

撤収作業を行い、調査を終了した。


61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
B'
A'
A
B
SD42
SN39
SE38
SK28
SN15
SN14
SK16
SN13
SN17
SN18
SN19
SK24
SK25
SK23
SB40
SK20
SE21
SE22
SN10
SD08
SK33
SN35
SK30
SK29
SK32
SK34
SK26
SK27
SB41
SK36
SK07
SK12
SE09
SKT44
SKT45
SE43
SE31
SI05
SK04
SK02
SE03
SKP
SN
MS
MR
MQ
MP
MO
MN
MM
ML
MK
MJ
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
LI
LH
LG
LF
0
1 : 300
20m

第６図　遺構配置図

第４章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　検出遺構

縄文時代の遺構として陥し穴２基を検出した。

（１）陥し穴

ＳＫＴ44（第７図、図版１）

ＭＭ51・52グリッドの第Ⅳ層面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＴ45陥し穴がある。

堆積土は３層に分層した。３つの層とも暗い色調で、レンズ状に堆積していることから自然流入土であり、本遺構は自然堆積により埋没したと考える。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部の長径3.1m、開口部の短径0.44mで、底面の長径3.4m、底面の短径0.20mである。検出面から底面までの深さは0.52mである。長径は開口部より底面の方が長く、北西端及び南東端はオーバーハングして開口部に向かっている。底面はほぼ平坦で、底面施設は確認できなかった。所属時期を明らかにする出土遺物はなかったが、周辺の第Ⅳ層上面で縄文後期の土器破片が出土していることから、本遺構もその時期に属するものと考える。

ＳＫＴ45（第７図、図版１）

ＭＮ49・50、ＭＯ50グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫＴ44陥し穴がある。

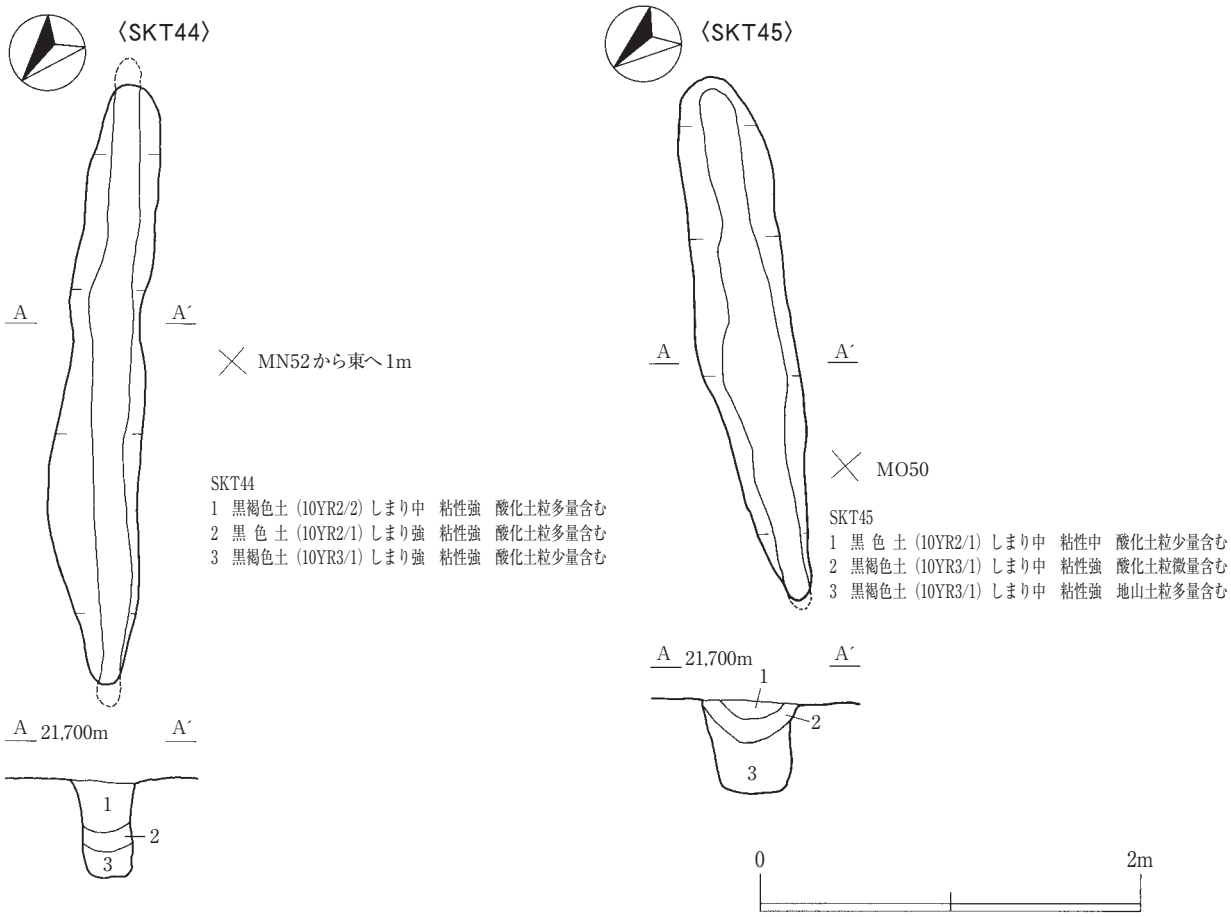
堆積土は３層に分層した。３つの層とも暗い色調で、レンズ状に堆積していることから自然流入土であり、本遺構は自然堆積により埋没したと考える。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部の長径2.8m、開口部の短径0.50mで、底面の長径2.84m、底面の短径0.20mである。検出面からの深さ0.50mである。長径は開口部より底面の方が若干長く、北西端はややオーバーハング気味に、南東端は直立気味に立ち上がって開口部に向かっている。底面はほぼ平坦で、底面施設は確認できなかった。所属時期を明らかにする出土遺物はなかったが、周辺の第Ⅳ層上面で縄文後期の土器が出土していることから、本遺構もその時期に属するものと考える。

２　遺構外出土遺物（第８図～第18図、図版1）

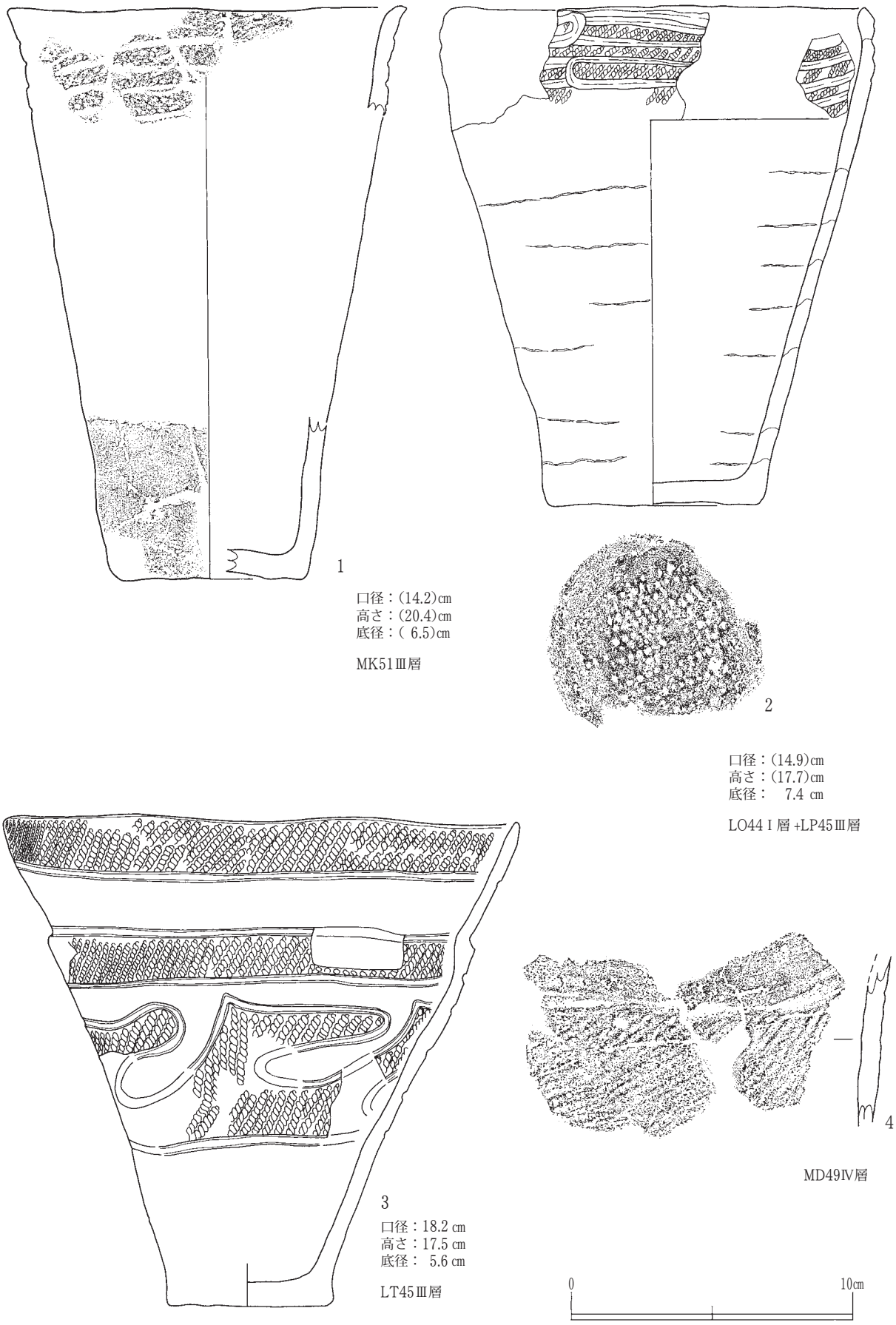
遺構外からは、縄文時代後期と晩期の土器片及び石器が中コンテナ１箱分出土した。

復元あるいは図上復元できた土器と破片は第８図～第16図に33点掲載した。後期の土器には深鉢形が多いが、第10図7と第12図11は壺形を呈する。土器の底部外面には網代痕が見られるものが多いが、第13図14は笹葉痕、15は木葉痕、また、第15図22は編物容器底部の痕跡と思われる。晩期の土器は浅鉢形土器の口縁部破片４点である。

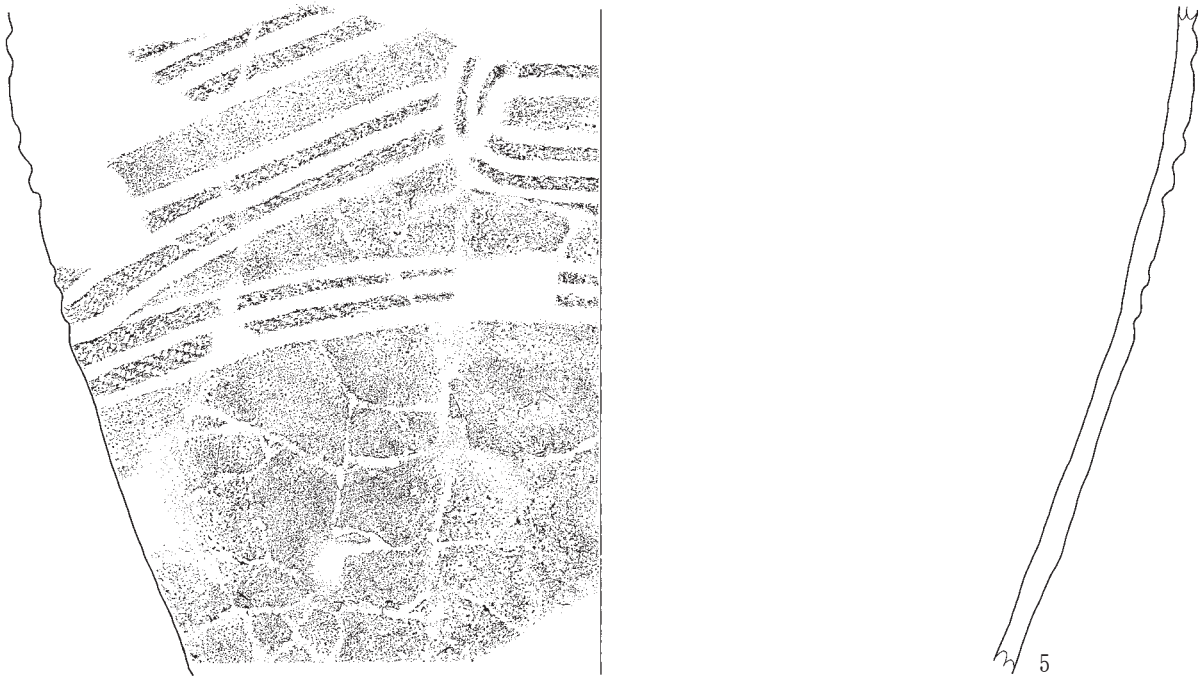
石器は第17図と第18図に８点掲載した。器種と数量は石匙が２点、磨製石斧２点、くぼみ石１点、擦り石３点（内１点はくぼみ石に転用されている）、石皿１点である。



第７図　SKT44・SKT45 陥し穴実測図



第８図　遺構外出土縄文土器実測図（１）



第９図　遺構外出土縄文土器実測図（２）

第 10 図　遺構外出土縄文土器実測図（３）

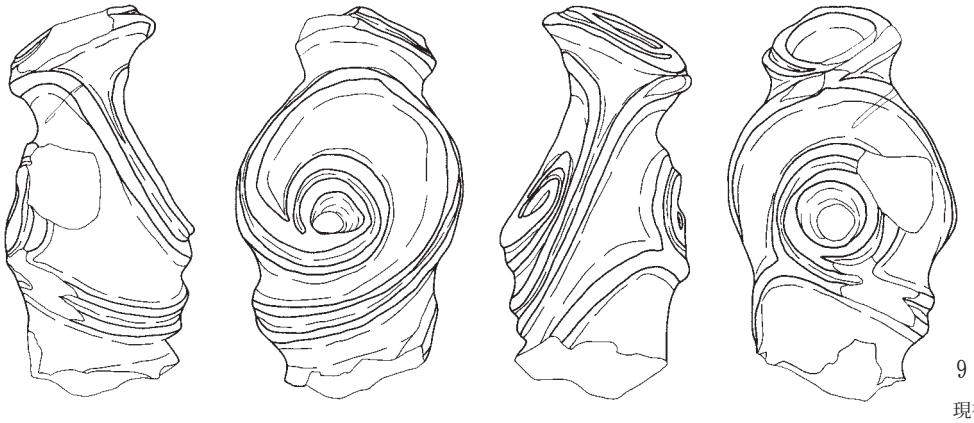
口径：(30.0)cm
高さ：(40.7)cm
底径：　11.0 cm

LO48Ⅳ層

8

0　　10cm

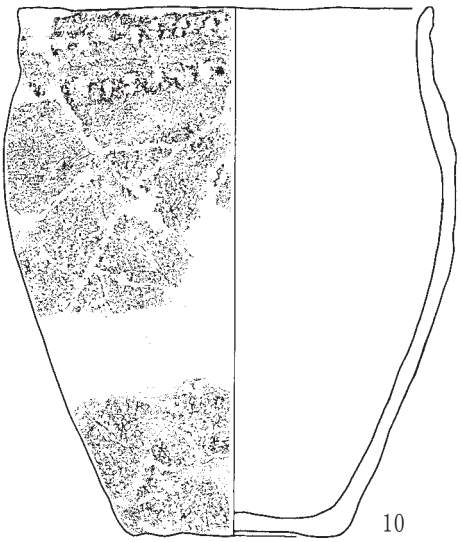
第 11 図　遺構外出土縄文土器実測図（４）



9

現在高：(10.3)㎝
横　幅：　6.0 ㎝
厚　さ：　5.0 ㎝

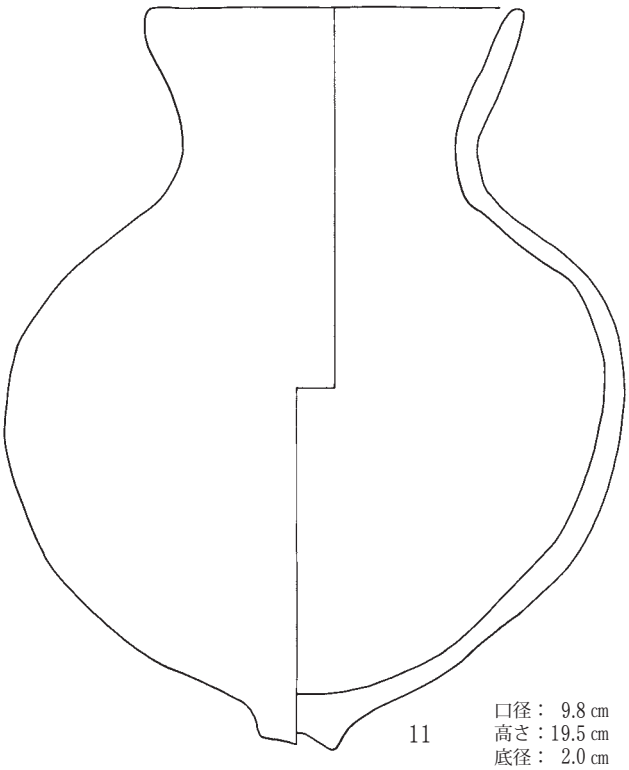
LO41Ⅳ層



10

口径：(10.9)㎝
高さ：　14.0 ㎝
底径：　　5.6 ㎝

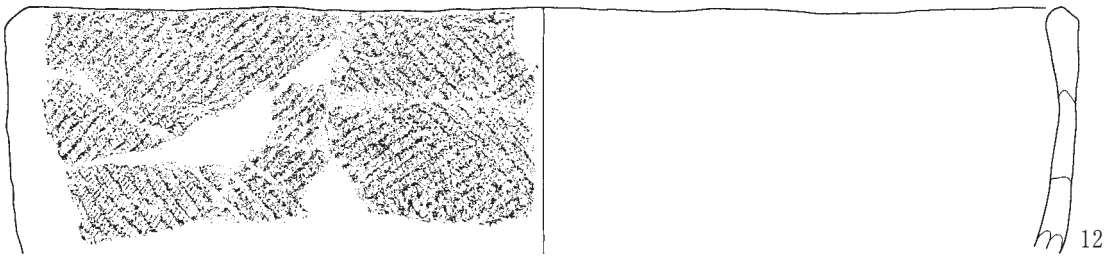
ML51Ⅳ層



11

口径：　9.8 ㎝
高さ：19.5 ㎝
底径：　2.0 ㎝

MM53Ⅲ層



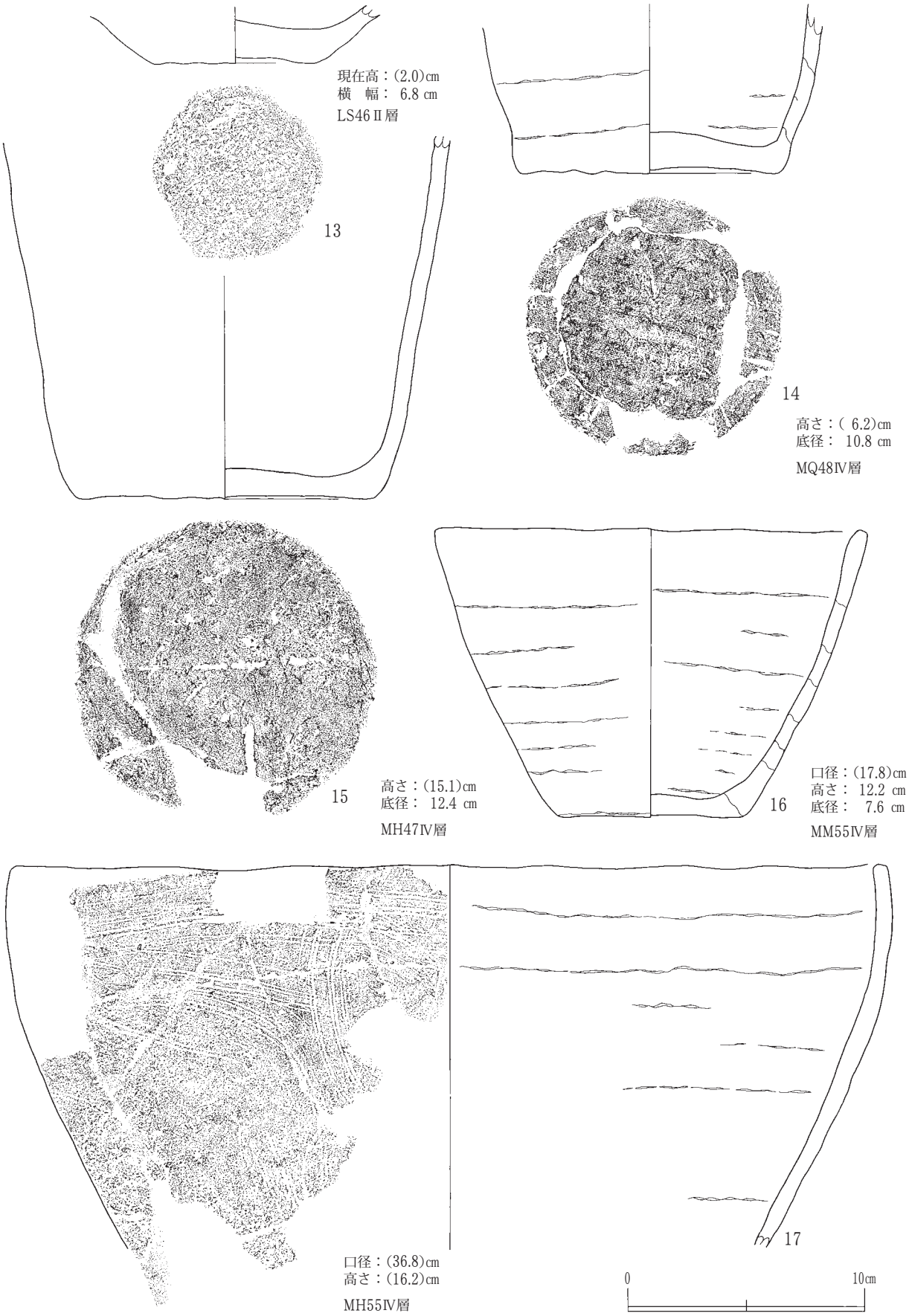
12

口径：(28.3)㎝
高さ：(　6.5)㎝

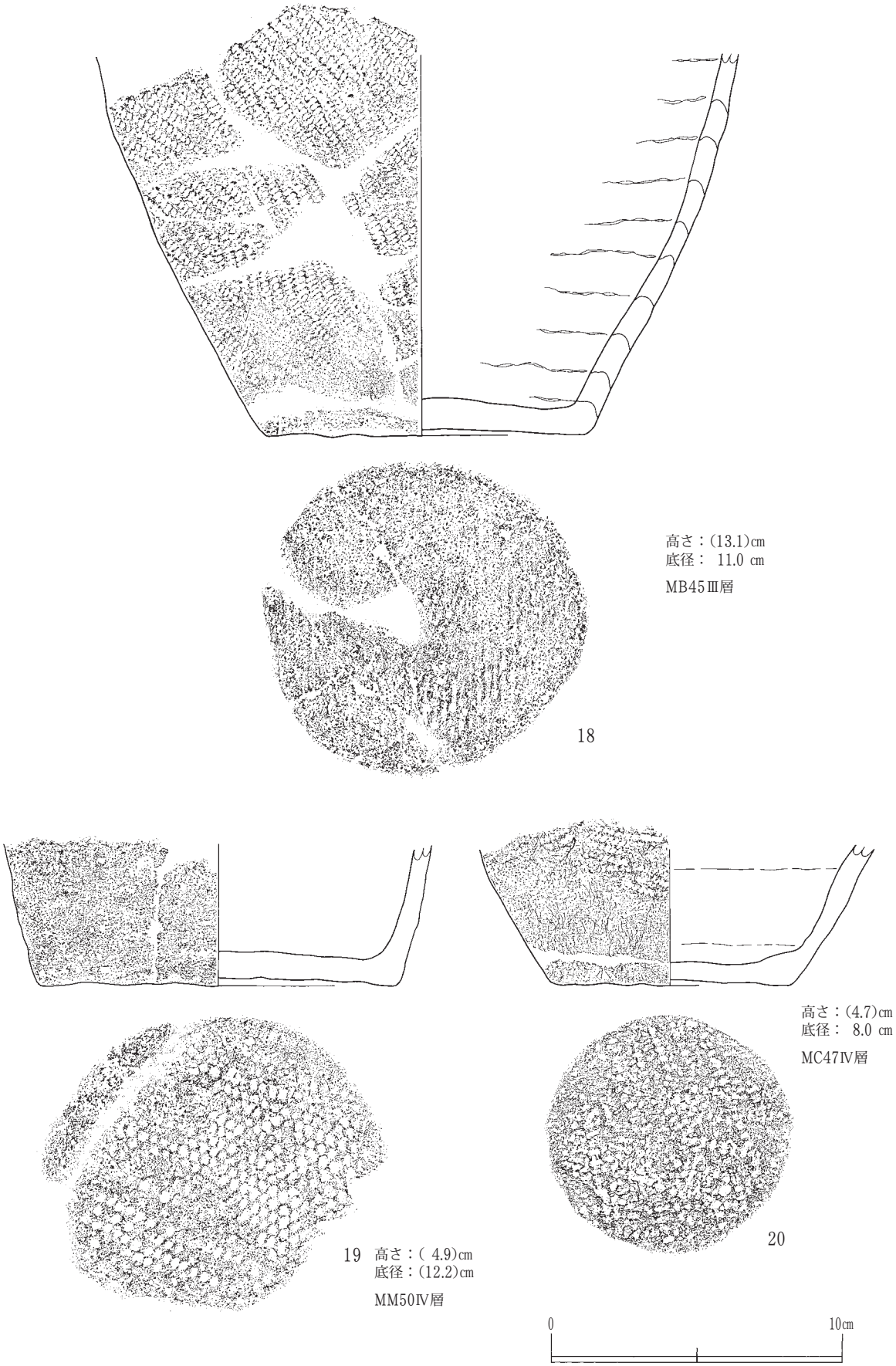
MP52Ⅳ層

0　　10㎝

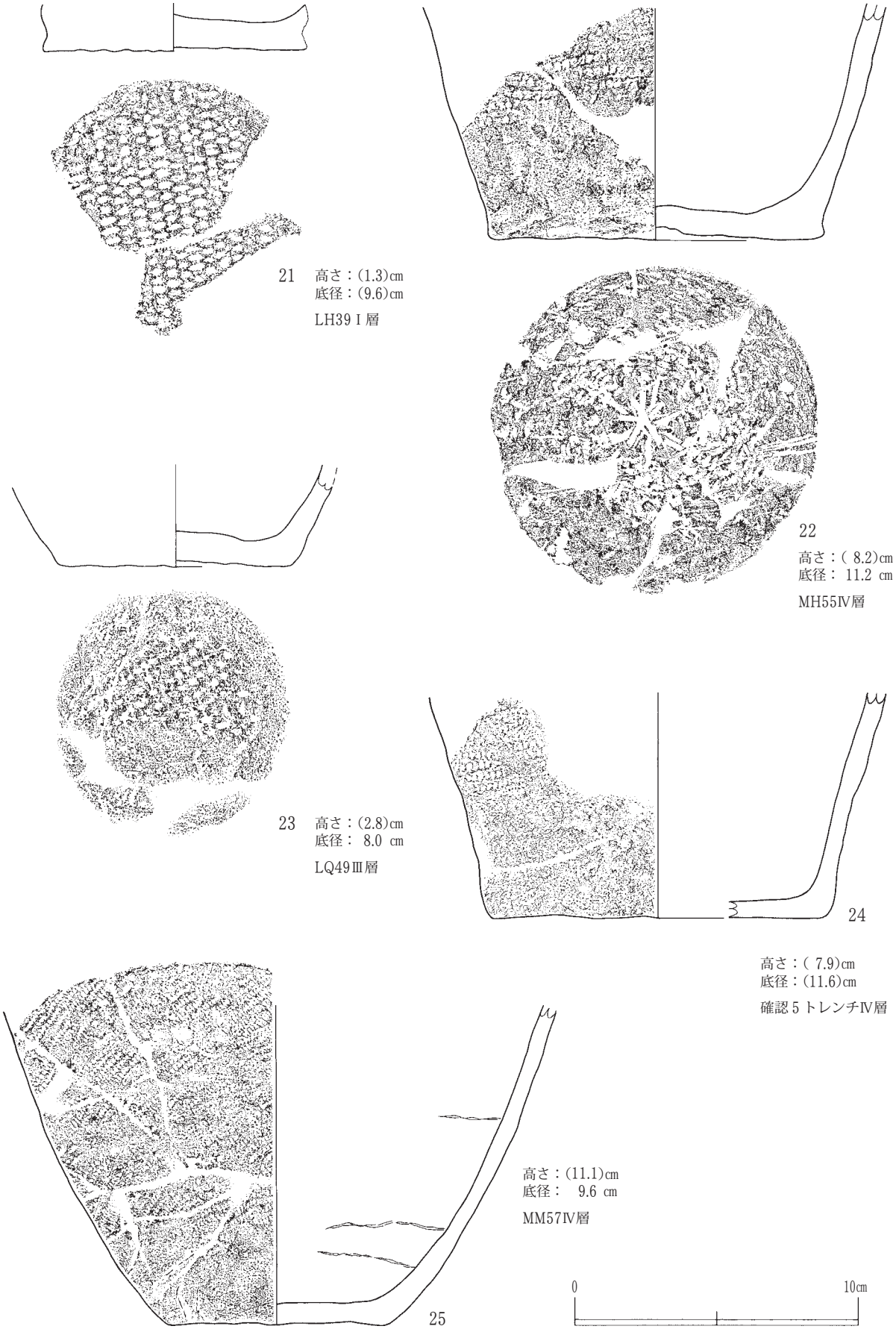
第 12 図　遺構外出土縄文土器実測図（５）



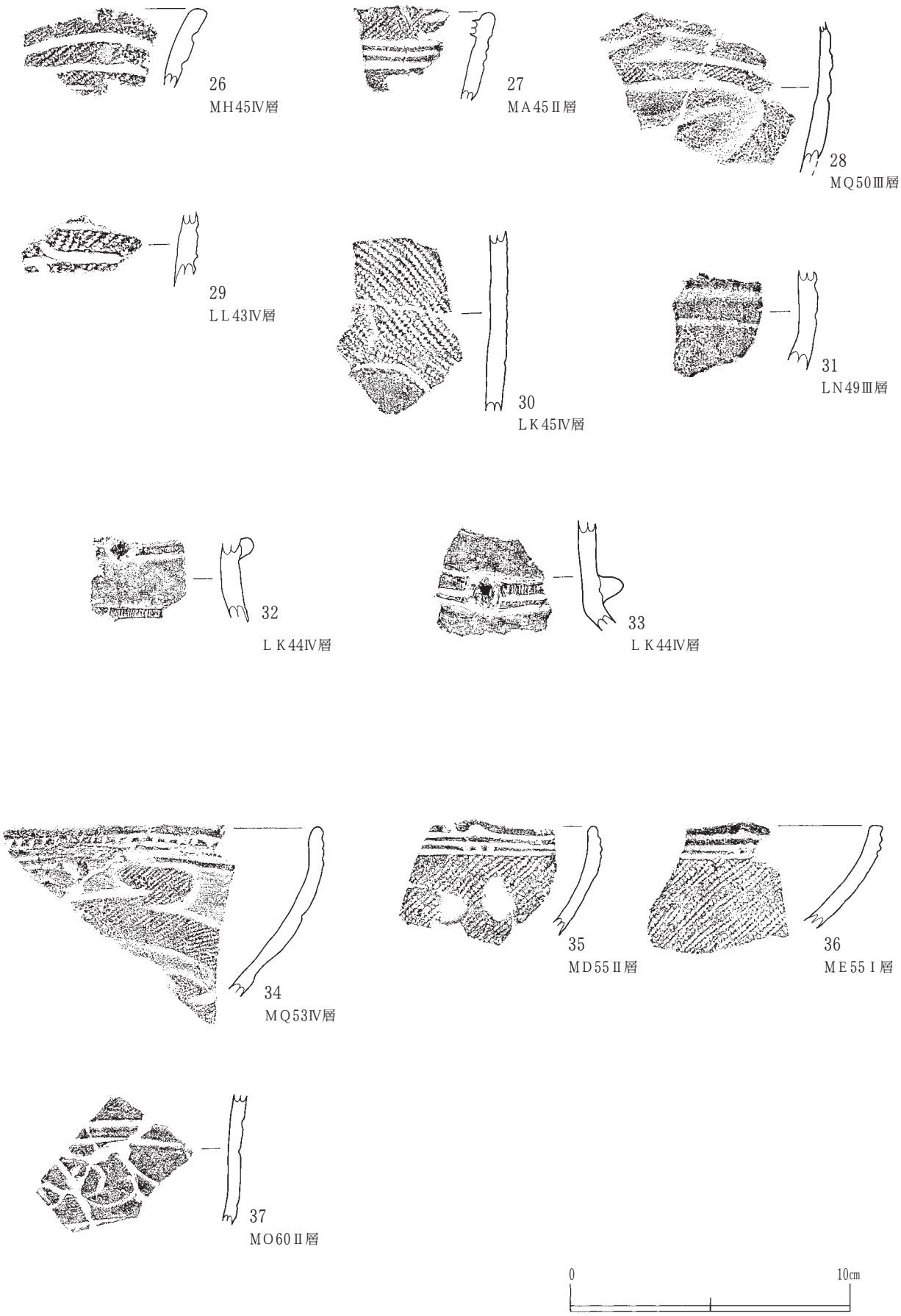
第 13 図　遺構外出土縄文土器実測図（６）



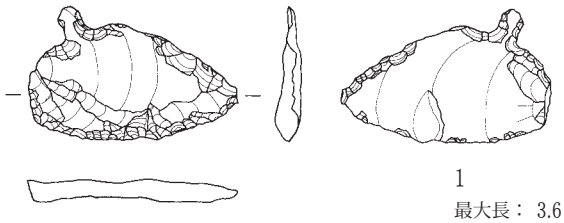
第 14 図　遺構外出土縄文土器実測図（７）



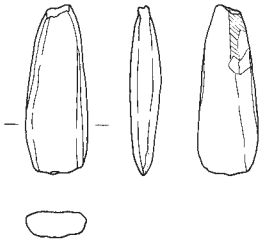
第 15 図　遺構外出土縄文土器実測図（８）



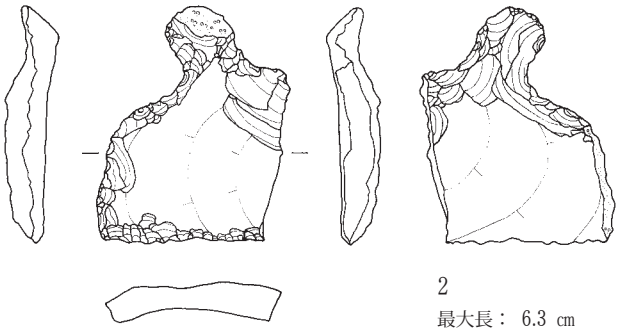
第 16 図　遺構外出土縄文土器実測図（９）



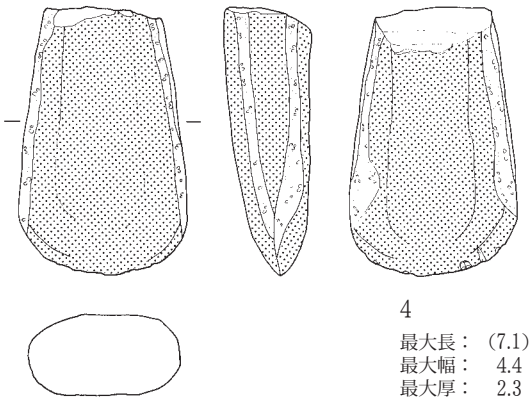
1
最大長： 3.6 ㎝
最大幅： 5.5 ㎝
最大厚： 0.7 ㎝
重　量：10.7g
MB45Ⅲ層



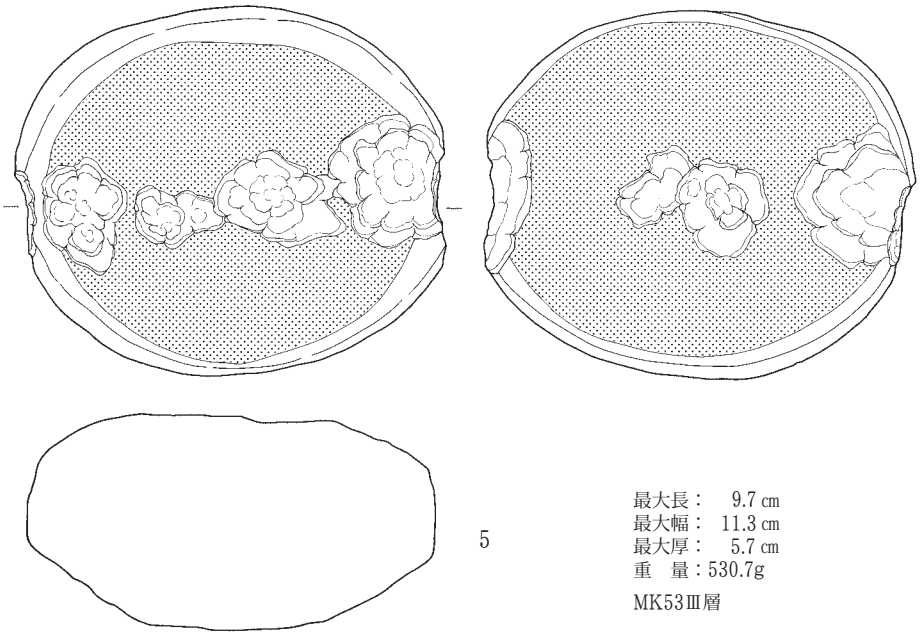
3
最大長：(4.5)㎝
最大幅： 1.6 ㎝
最大厚： 0.8 ㎝
重　量：(9.0)g
MH50Ⅲ層



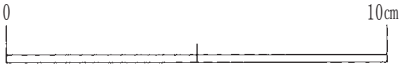
2
最大長： 6.3 ㎝
最大幅：(5.1)㎝
最大厚： 1.4 ㎝
重　量：(28.8)g
LG39Ⅳ層



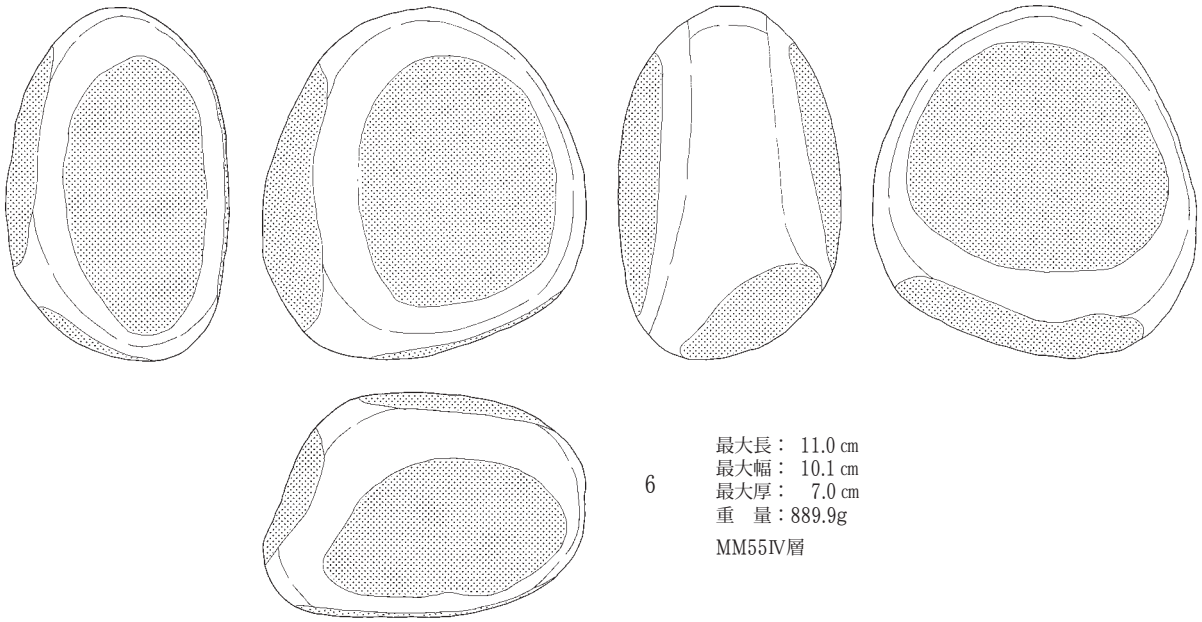
4
最大長： (7.1)㎝
最大幅： 4.4 ㎝
最大厚： 2.3 ㎝
重　量：(106.9)g
MP56Ⅳ層



5
最大長： 9.7 ㎝
最大幅： 11.3 ㎝
最大厚： 5.7 ㎝
重　量：530.7g
MK53Ⅲ層

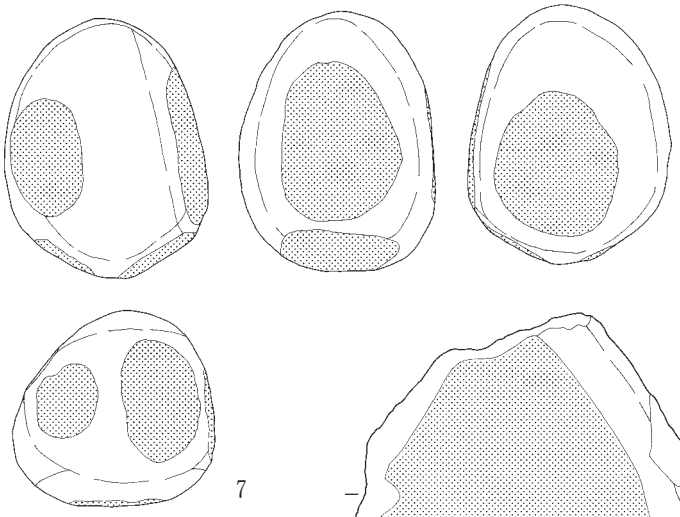


第 17 図　遺構外出土石器実測図（１）



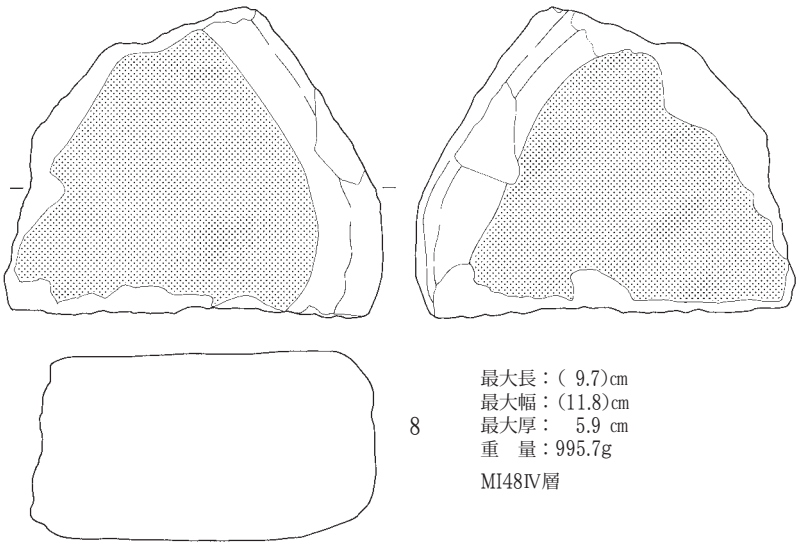
6

最大長：　11.0 ㎝
最大幅：　10.1 ㎝
最大厚：　　7.0 ㎝
重　量：889.9g
MM55Ⅳ層



7

最大長：　8.2 ㎝
最大幅：　6.3 ㎝
最大厚：　6.1 ㎝
重　量：382.1g
A 区表面採集



8

最大長：(9.7)cm
最大幅：(11.8)cm
最大厚：　5.9 cm
重　量：995.7g
MI48Ⅳ層

0　　10cm

スクリーントーン部分は磨面を表す

第 18 図　遺構外出土石器実測図（２）

第２節　平安時代の遺構と遺物

１　検出遺構

平安時代の遺構として、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡２棟、井戸跡７基、土坑19基、溝跡２条、焼土遺構９基、柱穴様ピット183 基を検出した。

（１）竪穴住居跡

ＳＩ05（第19図～第23図、図版２）

ＬＬ41・ＬＭ41・42グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で四角形の黒色土の広がりと焼土の広がりを確認した。ＳＫＰ021・024・036・037・198柱穴様ピットと重複し、それらは本住居より新しい。周辺にはＳＥ09井戸跡・ＳＫ02土坑がある。

住居内堆積土は４層に分層した。１層は黒色基調の土である。２層はにぶい黄褐色基調で地山粒を多量に含んでいる。３層は壁溝内堆積土で、地山粒を多量に含んだ黒褐色基調の土である。４層は貼り床の土であり、暗褐色基調で地山を多量に含んでいる。

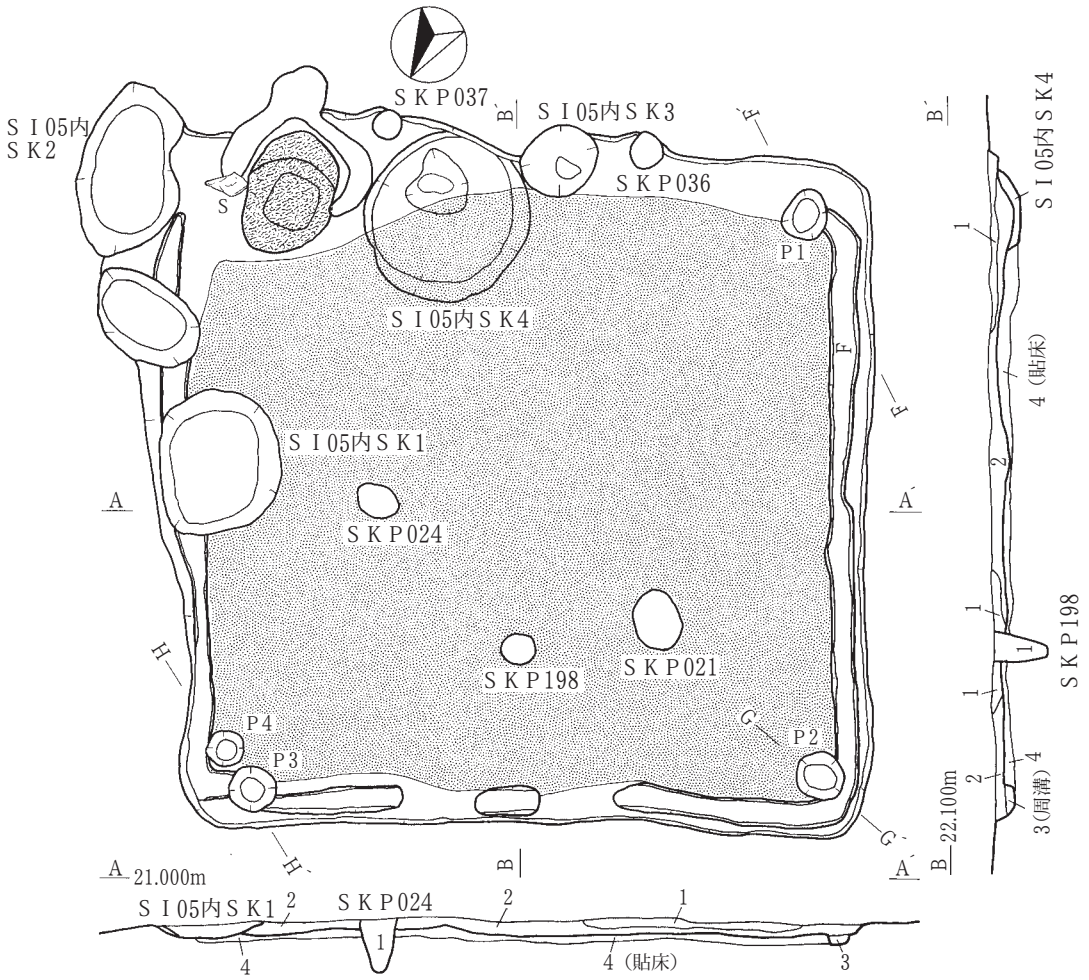
平面形はほぼ正方形であり、北東壁3.65m、北西壁3.6m、南東壁4.1m、南西壁3.55mである。壁の高さは検出面から0.10～0.12mで垂直に立ち上がる。床は掘形底面のほぼ全体に、黒色土と地山土の混合土を敷き詰め貼り床とし、平坦に整えている。

壁溝は確認できる範囲内で、カマドの位置する南東壁以外で壁に沿うようにコの字状に回っている。幅は0.09～0.12m、床面からの深さは0.04～0.06mである。

本住居に伴う小土坑を床面で４基（住居内ＳＫ１～ＳＫ４）確認した。住居内ＳＫ１は北東壁の中間に位置し、長径0.75m、短径0.66mの楕円形である。検出面からの深さは約12mで壁は急傾斜に立ち上がり、底面は平坦である。住居内ＳＫ２はカマド東脇に位置し、長径0.92m、短径0.45mの楕円形である。検出面からの深さは0.30mで壁は急傾斜に立ち上がり、底面はやや凸凹している。住居内ＳＫ３はカマド西脇に位置し、長径0.41m、短径0.35mの楕円形である。検出面からの深さは0.25mで壁は急傾斜に立ち上がり底面は平坦である。住居内ＳＫ４はカマド西脇に位置し、直径0.83ｍの円形である。検出面からの深さは0.21mで壁は急傾斜に立ち上がり底面は凸凹している。住居内ＳＫ１～３の堆積土中に、カマドの燃焼土や炭化物と思われる含有物が混入していた。また、３基とも住居の壁または壁溝と重複しており、土坑の方が新しい。さらに、住居内ＳＫ２は、本来東隅にあったと思われる柱穴の位置にあるため、柱穴を抜き取った後で穿たれたと考えられる。ＳＫ４は貼り床に使用した土が多量に含まれていたため、貼り床を掘り込み、再度同じ土で埋め戻した可能性がある。

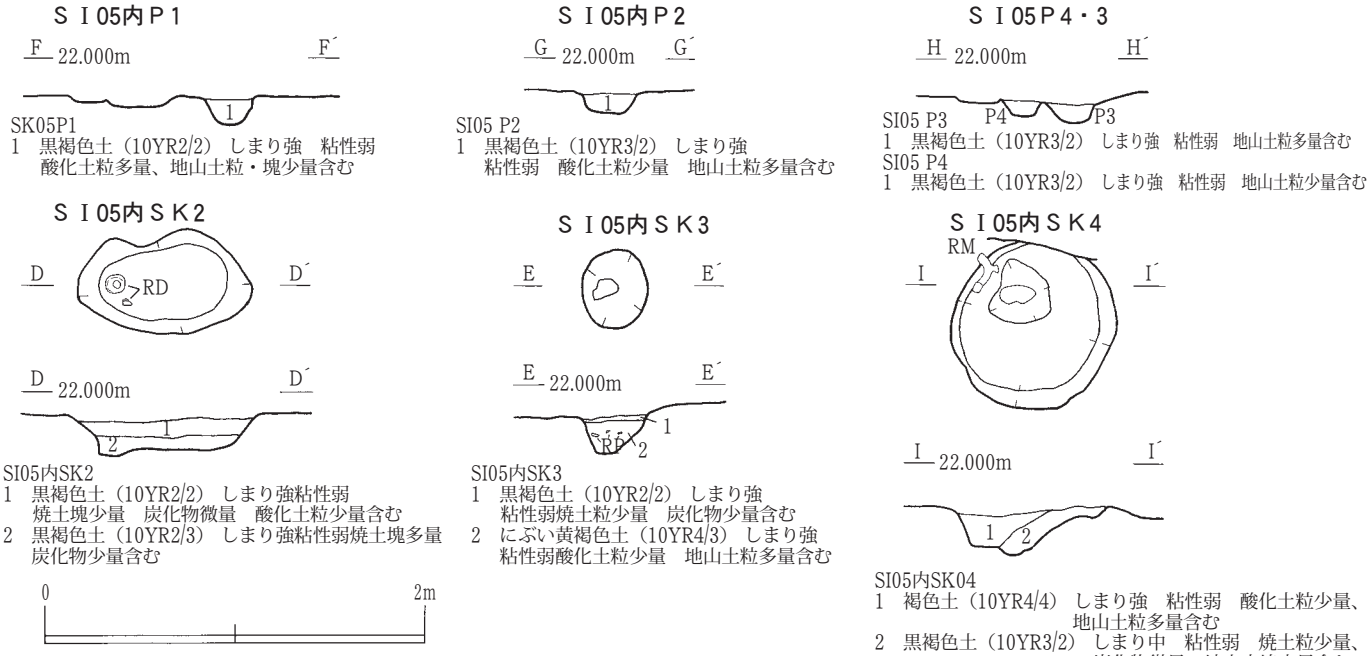
柱穴は、床面で４基確認した。東隅では、住居内ＳＫ２があるため確認できなかった。直径は0.20～0.27mで、床面からの深さは0.08～0.15㎝である。いずれの柱穴からも柱の痕跡は確認できなかった。Ｐ３とＰ４は隣接しており、どちらが本住居の柱穴となるのか不明である。

カマドは南東壁の東隅からやや南西よりの位置で、黒褐色土と焼土の広がりで確認した。壊れた状態で検出され、カマドを破壊する際に使用したと思われる礫が、天井部分に突き刺さるような状態で見つかった。煙道およびカマド袖部と燃焼部が確認され、その規模は長さ0.97m、幅0.80mである。袖部は黄褐色の粘土で構築されており、カマド本体も同じ粘土を用いて構築されたと考えられるが、天井部分は被熱し崩落していた。煙道は長さ0.25mで堆積土は５層に分層した。１・２層は煙道から

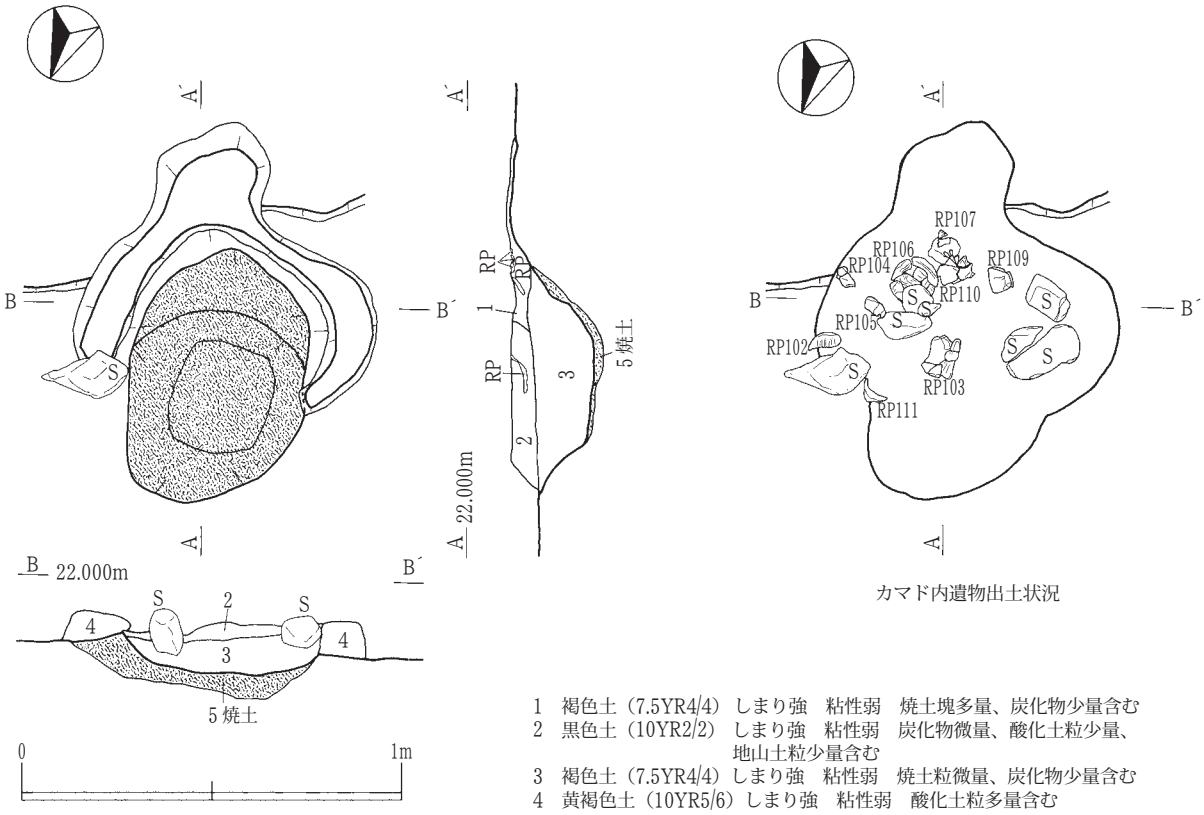


ＳＩ05
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性中　酸化土粒少量、地山土粒少量含む
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強　粘性弱　酸化土粒多量、地山土粒多量含む
3　黒褐色土（10YR3/2）しまり強　粘性弱　酸化土粒多量　地山土粒・塊多量含む
4　暗褐色土（10YR3/3）しまり強　粘性弱　酸化土粒少量　地山土粒多量含む

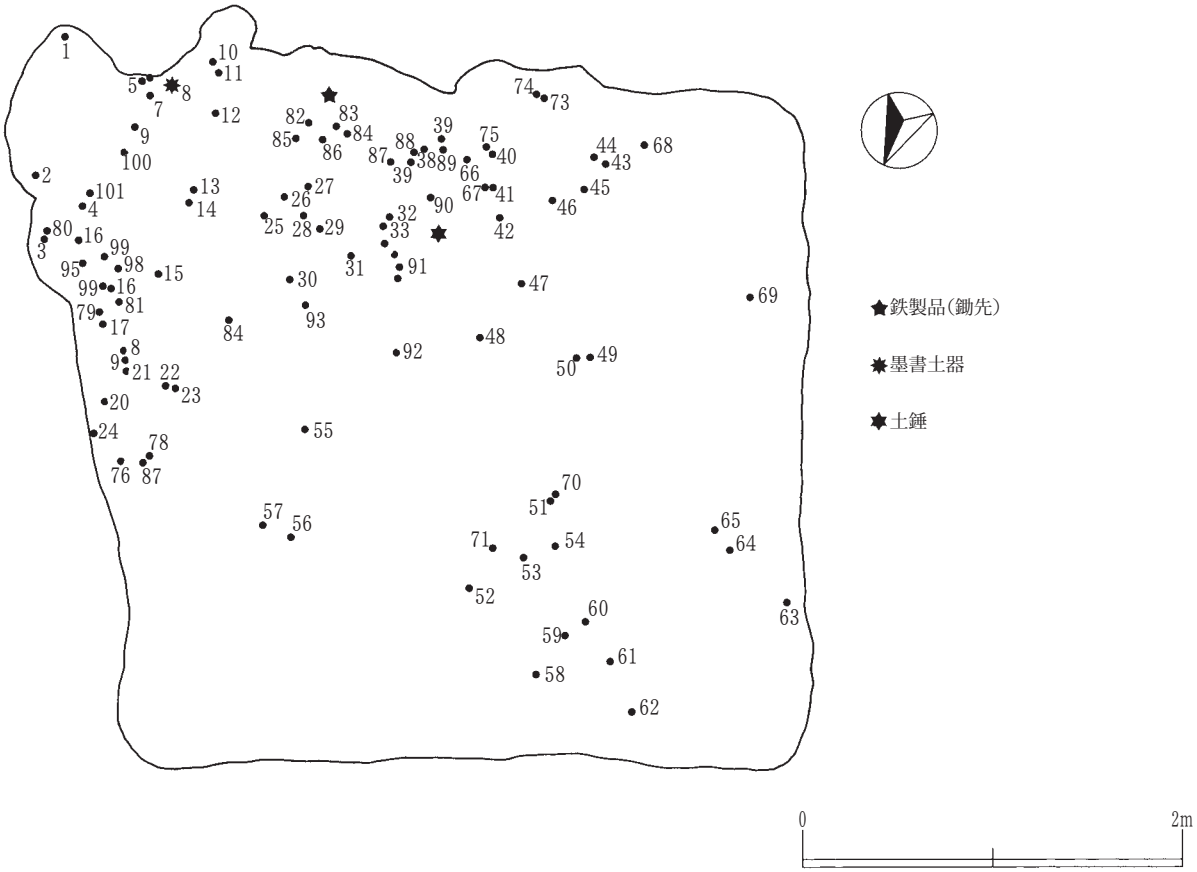
ＳＫＰ024
1　黒褐色土（10YR3/2）しまり強　粘性弱　焼土粒・塊少量、炭化物少量　酸化土粒少量　地山土塊少量含む



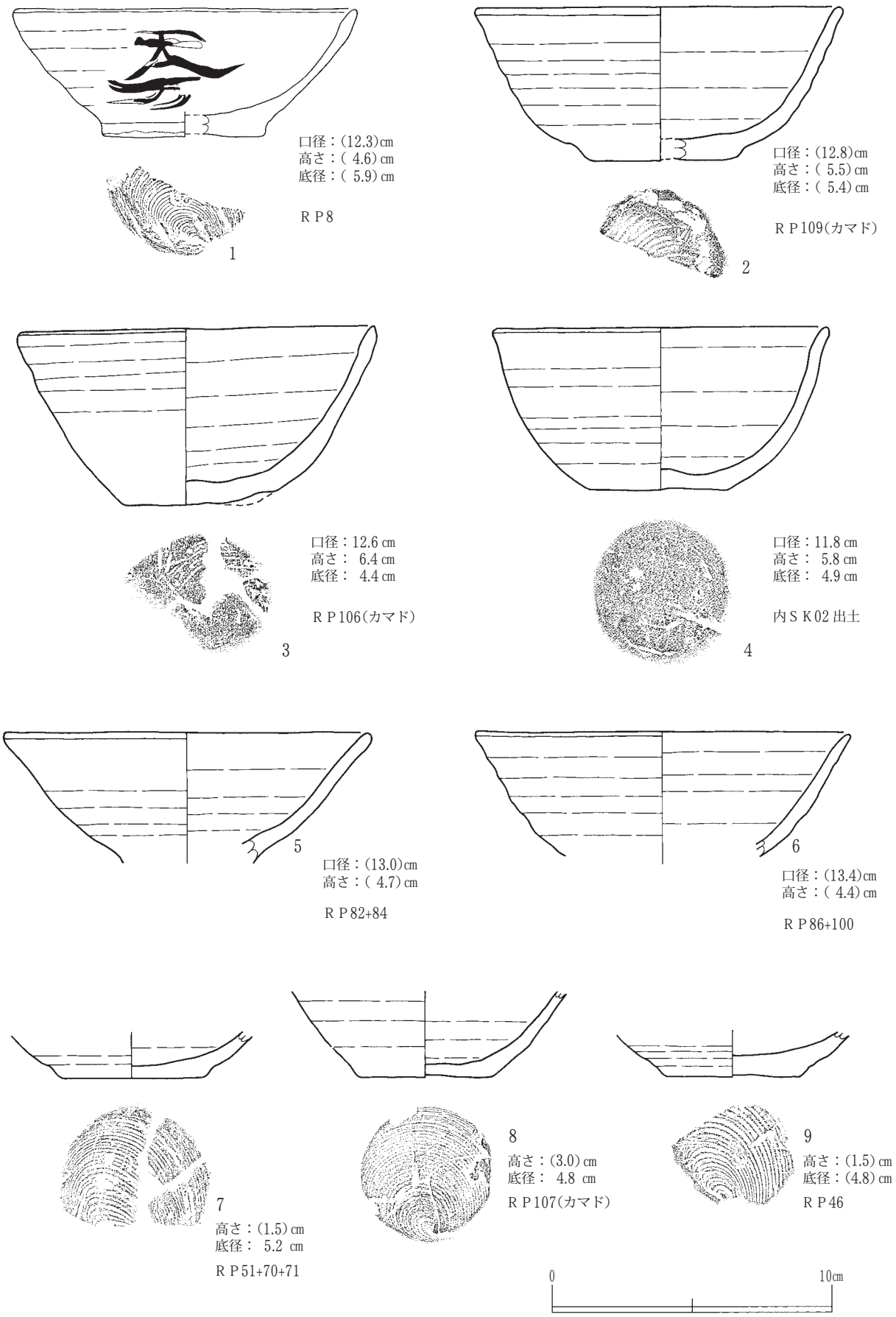
第 19 図　ＳＩ 05 竪穴住居跡実測図



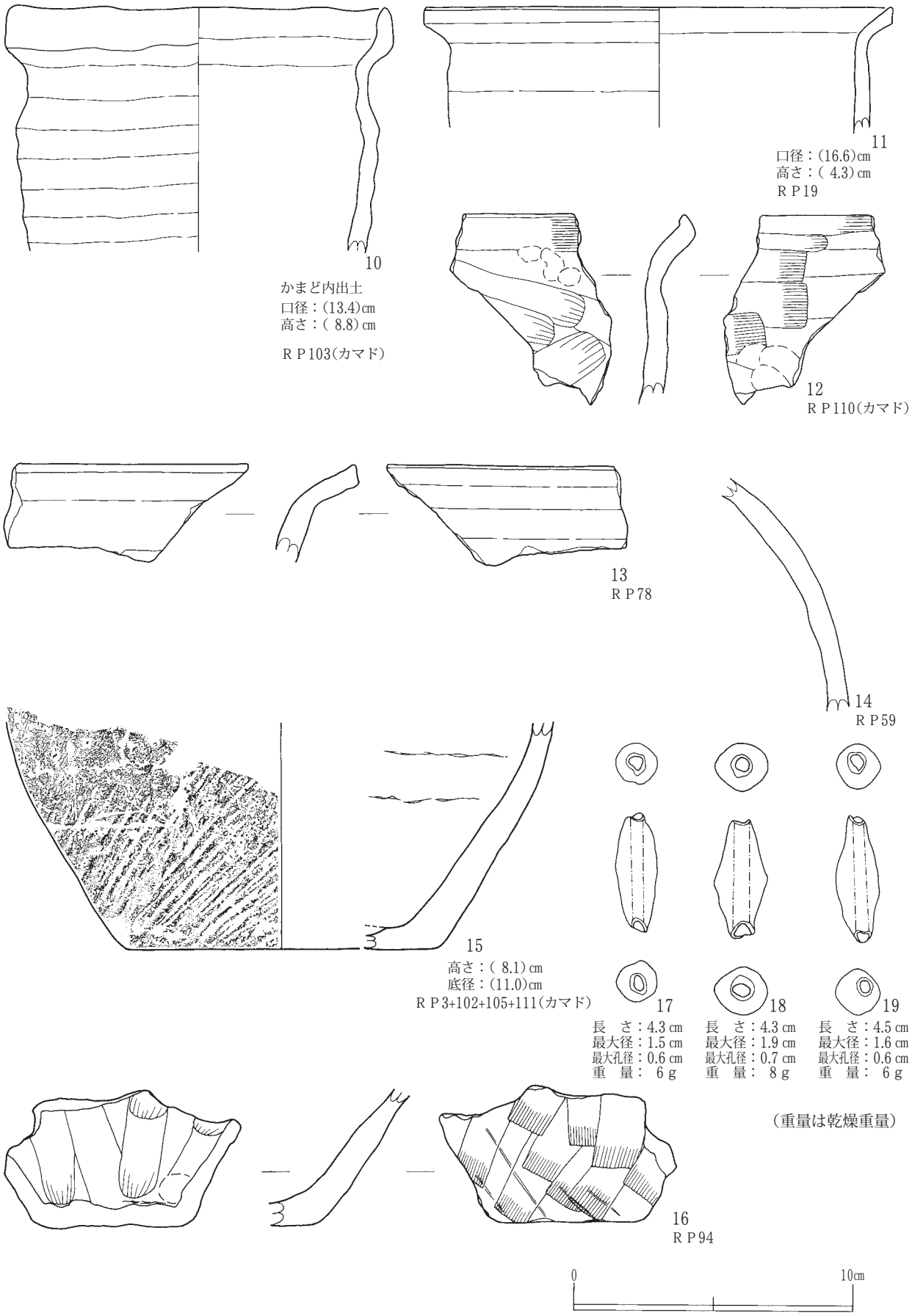
第 20 図　ＳＩ 05 竪穴住居跡カマド実測図



第 21 図　ＳＩ 05 竪穴住居跡遺物出土分布図



第 22 図　ＳＩ 05 竪穴住居跡出土遺物実測図（１）



第 23 図　ＳＩ 05 竪穴住居跡出土遺物実測図（２）

の流入土で、３層は崩落した構築土である。４層は袖部の粘土である。５層は燃焼部焼土で、地山が赤変している。

遺物は、土師器杯形の破片１点、土師器杯形の破片95点、土師器甕形の破片64点、土師器壺形の破片１点、須恵器壺形の破片１点、土錘３点、鉄製鋤先１点が出土した。土師器杯形破片には内面黒色処理したものも９点見られる。土師器破片は住居内堆積土の第１・２層から住居内に散らばるような状況で出土した。カマドの検出面に近い第２層下面では、土師器坏体部外面に「大」と「万」を組合わせた吉祥文字が記された墨書土器が出土した。住居内ＳＫ１～３でも埋土中から土師器片が少量出土している。ＳＫ２では底面から完形の土師器坏が伏せた状態で出土した。また、ＳＫ４の埋土中から鋤先が先端部を下にした状態で出土した。

出土した遺物のうち、土師器15点（第22図１～９、第23図10～13、15・16）と須恵器１点（第23図14）、土錘３点（第23図17～19）を図化した。鉄製鋤先１点は、銹化が進んでおり採り上げ時に剥落破砕したため図化できなかった。口縁部の形状がわかる６点の土師器杯形（１～６）には、体部の立ち上がりと傾き、口縁の造りにそれぞれ差異が見られる。15は土師器甕形の底部破片であるが、外面に平行叩き目痕が見られ、焼成良好で堅緻な造りである。16も土師器甕形の底部破片で、内外面にヘラナデが見られる。土錘３点（17～19）は長さが4.3～4.5㎝の管状を呈し、貫通孔の径が0.4～0.6㎝、重量６～８gである。

本遺構の所属時期は平安時代である。なお、住居内ＳＫ２の１層から出土した炭化物の放射性炭素14Ｃ年代測定の結果は1,100±30ＢＰ（ＡＤ．898～987）であった。

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ40（第24図、図版２）

ＬＲ50・51、ＬＳ49・50、ＬＴ50グリッドに位置し、第Ⅱ層で柱穴６基を確認した。周辺にはＳＥ21・22井戸跡、ＳＫ29土坑がある。

東西棟で桁行２間×梁行１間の総柱建物である。桁行総長は北側柱列で6.5m、柱間は西から3.5m、3.0mであった。南側柱列は6.7m、柱間は西側から3.6m、3.1mである。梁行総長は東側で4.6m、西側で4.5mである。柱穴は直径0.25～0.40mで、開口部の平面形は円形または楕円形である。検出面からの深さは0.12～0.30mで、壁は急傾斜に立ち上がる。底面は平坦である。

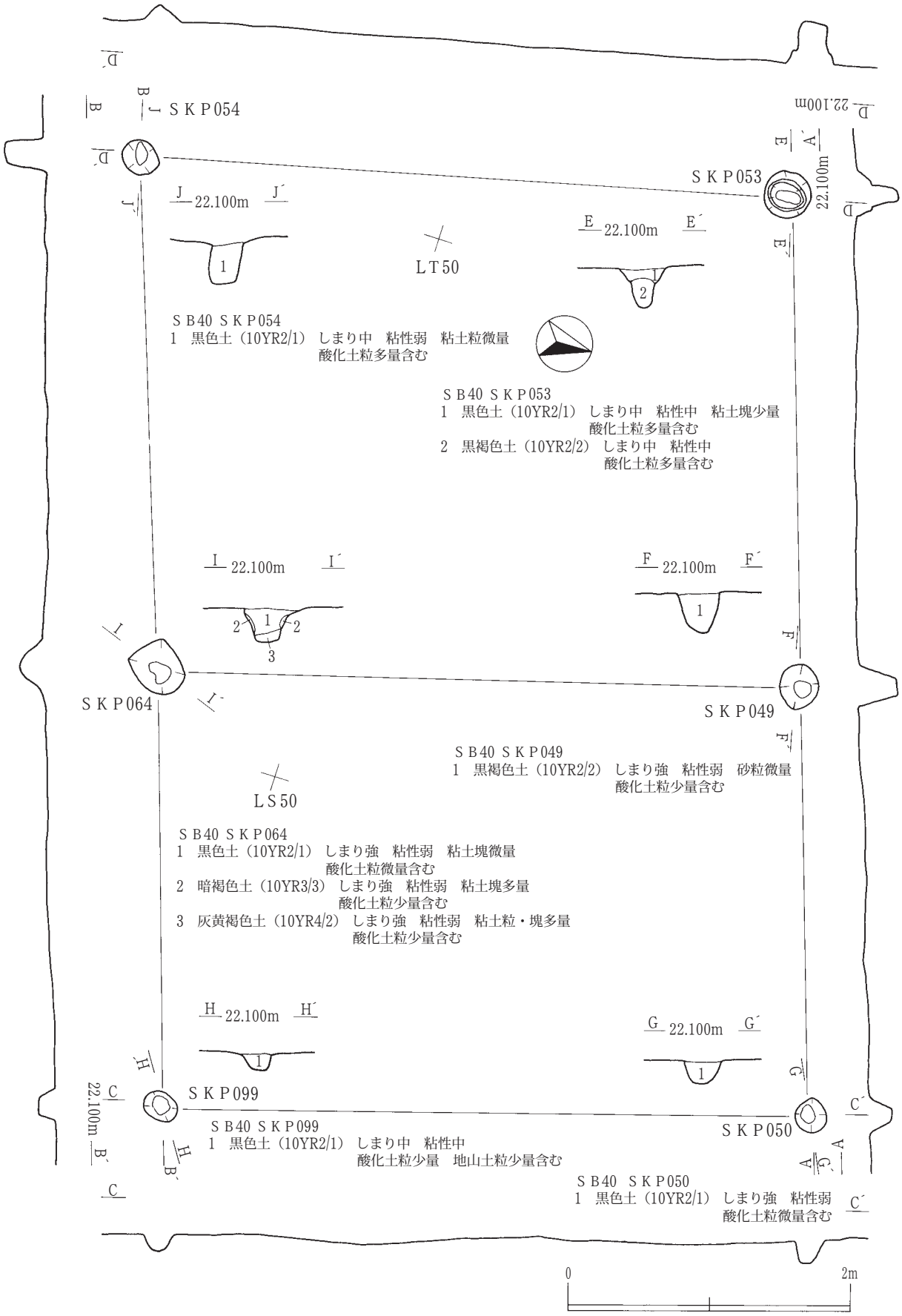
柱穴は最大３層に分層した。黒褐色土、黒色土、灰黄褐色土であり、全ての柱穴で柱の痕跡は確認できなかった。遺物は柱穴内から土師器杯形の破片４点が出土した。

本遺構の所属時期は、出土土器から平安時代である。

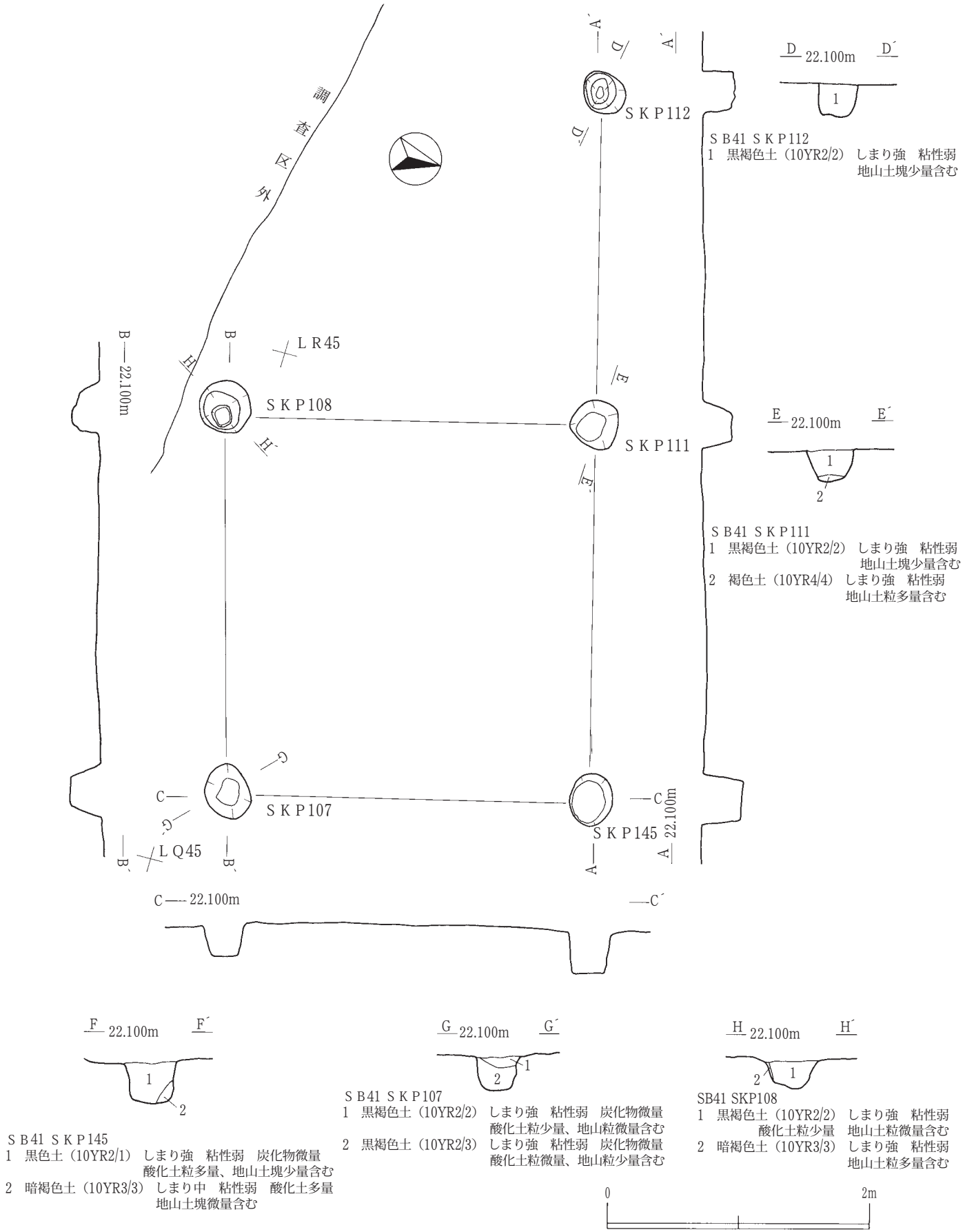
ＳＢ41（第25図、図版２）

ＬＱ44・45・ＬＲ45グリッドに位置し、第Ⅳ層で柱穴５基を確認した。本来は南西側にもう１基の柱穴があったと思われるが、調査区内を流れる農業用の堰に攪乱されていたため検出できなかった。周辺にはＳＮ35焼土遺構とＳＫ29・30・32～34・36土坑がある。

東西棟で桁行２間×梁行１間の総柱建物である。桁行総長は北側柱列で5.4m、柱間は西から2.6m、2.8mである。梁行総長は東側で2.8mである。柱穴は長径0.35～0.40mの楕円形である。検出面からの深さは0.20～0.30mで壁は急傾斜に立ち上がり、底面は平坦である。ＳＫＰ108・112は底面が四角



第 24 図　ＳＢ 40 掘立柱建物跡実測図



第25図　ＳＢ41掘立柱建物跡実測図

形だったため、角材を使用していた可能性がある。柱穴は１層または２層に分層した。黒褐色基調または黒色基調の土で、全ての柱穴で柱痕跡は確認できなかった。

遺物は柱穴内から土師器杯形の破片１点が出土した。本遺構の所属時期は、出土土器から平安時代である。

（３）井戸跡

ＳＥ03（第26図、第27図６、図版２）

ＬＨ38グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で排水用水路に削られた状態で黒色土の断面を確認した。重複する遺構はない。周辺には、ＳＫ04土坑、ＳＤ08溝跡がある。

堆積土は３層に分層した。１～３層とも黒色基調で、炭化物を微量に含む土である。レンズ状に堆積していることから、本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。平面形は半分以上が排水用水路に削られて不明であるが、開口部の平面形は直径0.80mの円形と考えられる。検出面から底面までの深さは0.45mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、直径0.75mの円形底面はほぼ平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴も確認できなかった。現状でも湧水が認められた。遺物は１層から土師器杯形の破片５点と須恵器杯形の破片１点、及び中世陶器の鍋形破片１点が出土した。鍋形破片は後世の攪乱混入と判断し、本遺構の所属時期は平安時代と考える。なお、本遺構内から出土した炭化物の放射性炭素14Ｃ年代測定の結果は1,220 ± 30 ＢＰ（ＡＤ．774～869）であった。

ＳＥ09（第26図、第27図６）

ＬＫ42グリッドに位置し、第Ⅳ層で円形の黒褐色土の広がりを確認した。南西にはＳ105竪穴住居跡が隣接する。

堆積土は３層に分層した。黒褐色または黒色基調の土がレンズ状に堆積していることから、本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。平面形は円形を呈し、開口部の直径は0.90m、検出面から底面までの深さは0.81mである。底面の直径は0.68mである。周壁は外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲には柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。遺物は２層から土師器杯形の破片３点、土師器甕形の破片12点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

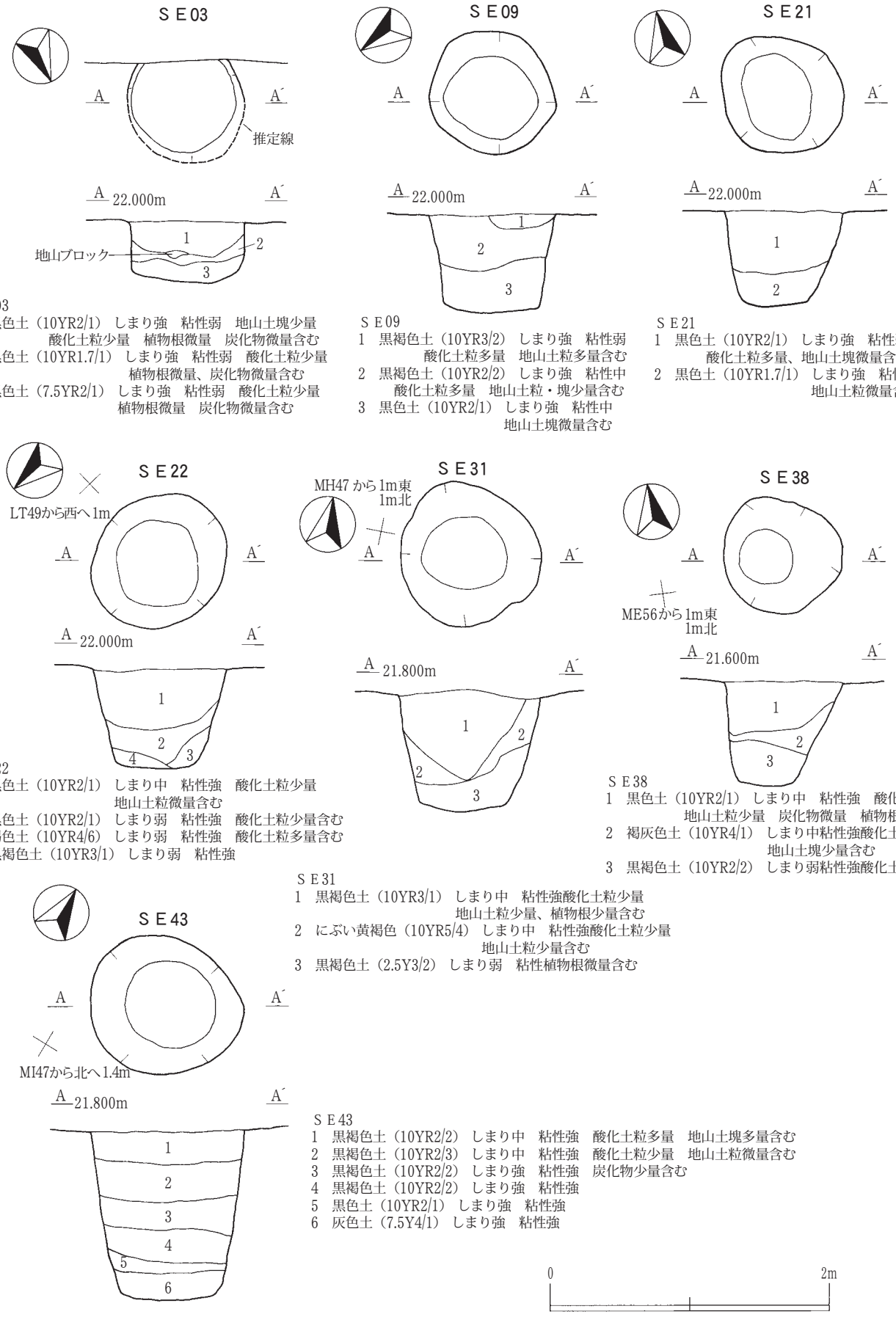
ＳＥ21（第26図、図版３）

ＬＴ49グリッドに位置し、第Ⅱ層で円形の黒色土の広がりを確認した。周辺にはＳＢ40掘立柱建物跡、ＳＥ22井戸跡、ＳＫ20・23 土坑がある。

堆積土は２層に分層した。黒色基調の土がレンズ状に堆積していることから、本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。開口部の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部の長径が0.94m、短径が0.87mで、検出面から底面までの深さは0.70mである。底面の直径は0.42mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。遺物は１層から土師器杯形の破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＥ22（第26図、図版３）

ＬＴ48・49グリッドの第Ⅱ層で円形の黒色土の広がりを確認した。重複する遺構はなく、周辺には



ＳＥ03
1　黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性弱　地山土塊少量
　　酸化土粒少量　植物根微量　炭化物微量含む
2　黒色土（10YR1.7/1）しまり強　粘性弱　酸化土粒少量
　　植物根微量、炭化物微量含む
3　黒色土（7.5YR2/1）しまり強　粘性弱　酸化土粒少量
　　植物根微量　炭化物微量含む

ＳＥ09
1　黒褐色土（10YR3/2）しまり強　粘性弱
　　酸化土粒多量　地山土粒多量含む
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性中
　　酸化土粒多量　地山土粒・塊少量含む
3　黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性中
　　地山土塊微量含む

ＳＥ21
1　黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性弱
　　酸化土粒多量、地山土塊微量含む
2　黒色土（10YR1.7/1）しまり強　粘性中
　　地山土粒微量含む

ＳＥ22
1　黒色土（10YR2/1）しまり中　粘性強　酸化土粒少量
　　地山土粒微量含む
2　黒色土（10YR2/1）しまり弱　粘性強　酸化土粒少量含む
3　褐色土（10YR4/6）しまり弱　粘性強　酸化土粒多量含む
4　黒褐色土（10YR3/1）しまり弱　粘性強

ＳＥ31
1　黒褐色土（10YR3/1）しまり中　粘性強酸化土粒少量
　　地山土粒少量、植物根少量含む
2　にぶい黄褐色（10YR5/4）しまり中　粘性強酸化土粒少量
　　地山土粒少量含む
3　黒褐色土（2.5Y3/2）しまり弱　粘性植物根微量含む

ＳＥ38
1　黒色土（10YR2/1）しまり中　粘性強　酸化土粒少量
　　地山土粒少量　炭化物微量　植物根微量含む
2　褐灰色土（10YR4/1）しまり中粘性強酸化土粒多量
　　地山土塊少量含む
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり弱粘性強酸化土粒少量含む

ＳＥ43
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり中　粘性強　酸化土粒多量　地山土塊多量含む
2　黒褐色土（10YR2/3）しまり中　粘性強　酸化土粒少量　地山土粒微量含む
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性強　炭化物少量含む
4　黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性強
5　黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性強
6　灰色土（7.5Y4/1）しまり強　粘性強

第 26 図　ＳＥ 03・09・21・22・31・38・43 井戸跡実測図

ＳＢ40掘立柱建物跡、ＳＥ21井戸跡、ＳＫ20土坑がある。

堆積土は４層に分層した。1・2層は黒色基調の自然流入土、3・4層は褐色基調の壁面崩落土で、本遺構は自然堆積により埋没したと考える。平面形は円形を呈し、規模は開口部の直径が1m、底面の直径が0.65mで、検出面から底面までの深さは0.75ｍである。周壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。

所属時期を明らかにする出土遺物はなかったが、本遺構に近接するＳＥ21に形状が酷似することから平安時代に属するものと考える。

ＳＥ31（第26図、図版３）

ＭＧ47グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で地山土粒を少量含む黒色土の広がりで確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＥ43井戸跡がある。

堆積土は３層に分層した。１層は黒褐色土、２層はにぶい黄褐色土で、いずれも地山土粒を少量含む。３層は黒褐色土である。レンズ状に堆積していたことから、本遺構は自然堆積により埋没したものと考える。平面形は円形で、規模は開口部の長径が1m、底面の直径0.60m、検出面から底面までの深さは0.85mである。周壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。所属時期を明らかにする出土遺物はなかったが、平安時代に属するものと考える。

ＳＥ38（第26図、図版３）

ＭＤ56グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で地山土粒を少量含む黒色土の広がりで確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ28土坑がある。

堆積土は３層に分層した。１層は黒色土、２層は褐灰色土で、いずれも地山土粒を少量含む。３層は黒褐色土である。レンズ状に堆積していることから、本遺構は自然堆積により埋没したものと考えられる。平面形は不整な円形で、規模は開口部の直径が0.80m、底面の直径が0.38m、検出面から底面までの深さは0.75mである。周壁は西側でほぼ垂直に、東側で大きく外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。

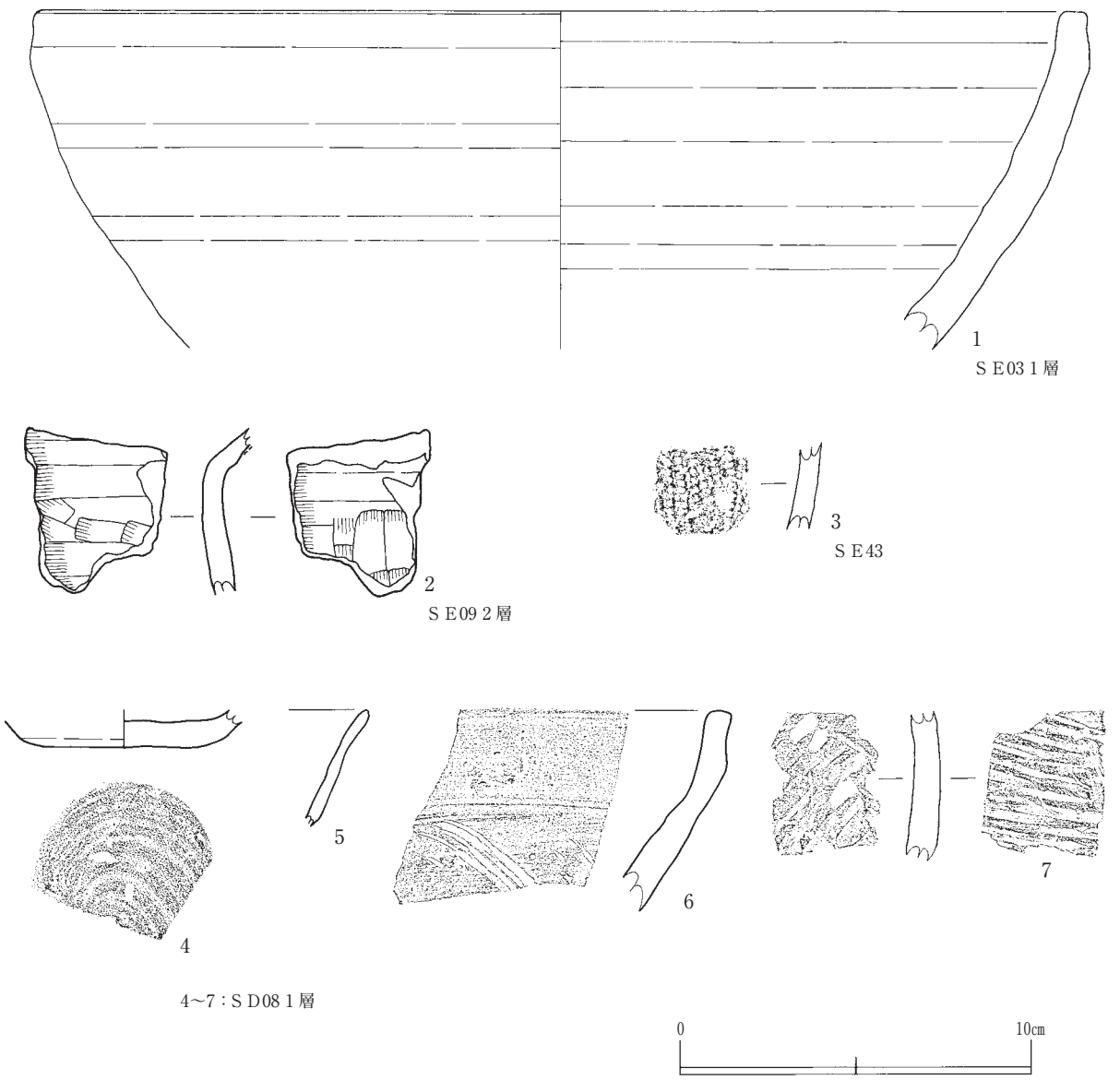
遺物は１層から土師器杯形の破片８点、土師器甕形の破片17点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＥ43（第26図、第27図７、図版３）

ＭＨ47グリッドの第Ⅲ層で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＥ31井戸跡がある。

堆積土は６層に分層した。１～５層は暗い黒褐色基調の土で、6層は湧水のために底面が分からず、掘りすぎた可能性が高いが、灰色基調の粘土である。６つの層がほぼ水平に堆積していることから、本遺構は人為的に埋め戻されたと考える。平面形は円形で、規模は開口部の直径が1m、底面の直径が0.60m、検出面から底面までの深さは1.2mである。周壁は全周垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。井戸枠等は検出されず、周囲に柱穴もなかった。現状でも湧水が認められた。遺物は、縄文土器の破片１点と、曲物１点が出土した。曲物は、直径20㎝の底板と幅7㎝の側面材及び継ぎ目材から成る。材質は底板と側面材、継ぎ目材ともスギである。

所属時期を明らかにする出土遺物はなかったが、平安時代に属するものと考えた。



第27図　ＳＥ03・09・43井戸跡及びＳＤ08溝跡出土遺物実測図

（４）土坑

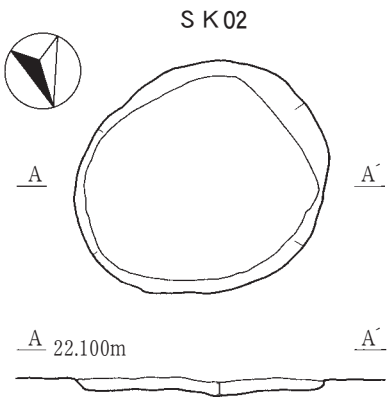
ＳＫ02（第28図・第29図１～４）

ＬＬ40グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で円形の黒褐色土の広がりを確認した。周辺にはＳＩ05竪穴住居跡とＳＥ09井戸跡がある。

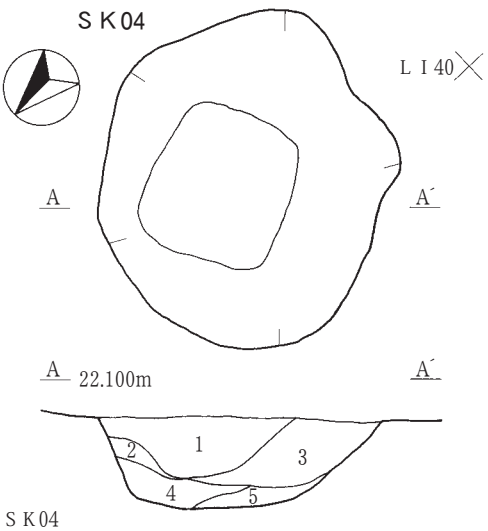
堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒と地山土粒を少量含む。平面形は楕円形で、規模は長径が1.35m、短径が1.15mで、検出面から底面までの深さは0.10ｍである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は堆積土中から土師器杯形の破片８点、土師器甕形の破片25点、須恵器甕形の破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ04（第28図、第30図１～５）

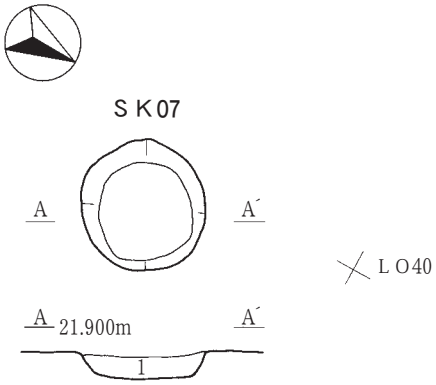
ＬＨ40・ＬＩ40グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＤ08溝跡がある。堆積土は５層に分層した。５つの層とも暗い色調で、レンズ状に堆積していることから自然流入土と思われ、本遺構は自然堆積により埋没したと考える。平面形は不整な楕円形で、規模は長径 1.8



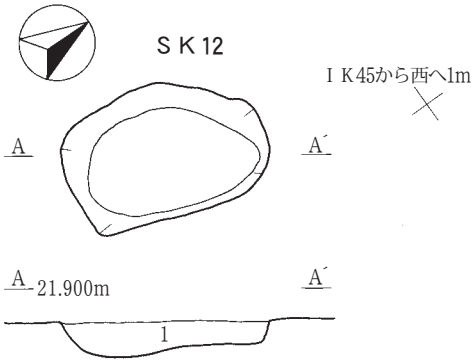
ＳＫ02
1 黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性弱酸化土粒少量、
地山土粒少量含む



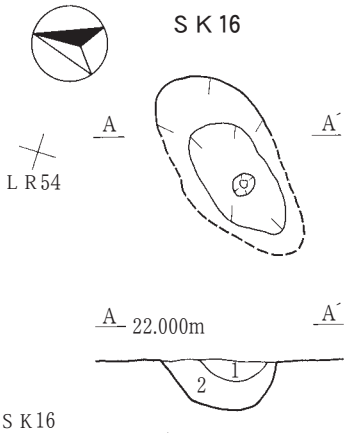
ＳＫ04
1 暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性強　地山土粒少量、
炭化物微量含む
2 暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性強　地山土粒多量、
炭化物微量含む
3 黒褐色土（10YR2/2）しまり中　粘性強　酸化土粒少量含む
4 黒褐色土（10YR2/3）しまり中　粘性強　酸化土粒多量、
地山土粒多量含む
5 黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性強



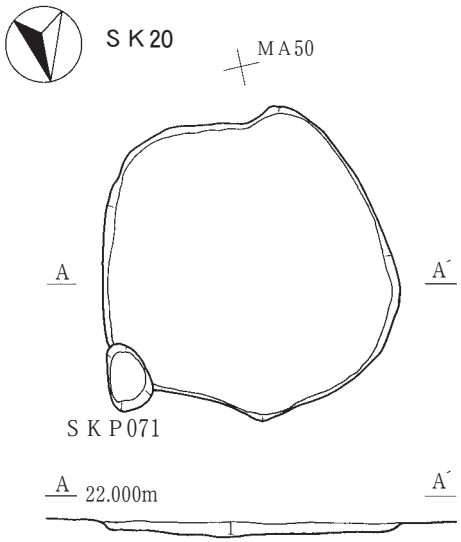
ＳＫ07
1 黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性弱　地山土粒少量含む



ＳＫ12
1 黒色土（10YR2/1）しまり中　粘性強　酸化土粒少量
地山土粒少量含む



ＳＫ16
1 黒褐色土（10YR2/2）しまり強　粘性中　酸化土粒少量含む
2 黒褐色土（2.5Y3/2）しまり強　粘性弱　酸化土粒少量、地山土粒多量含む

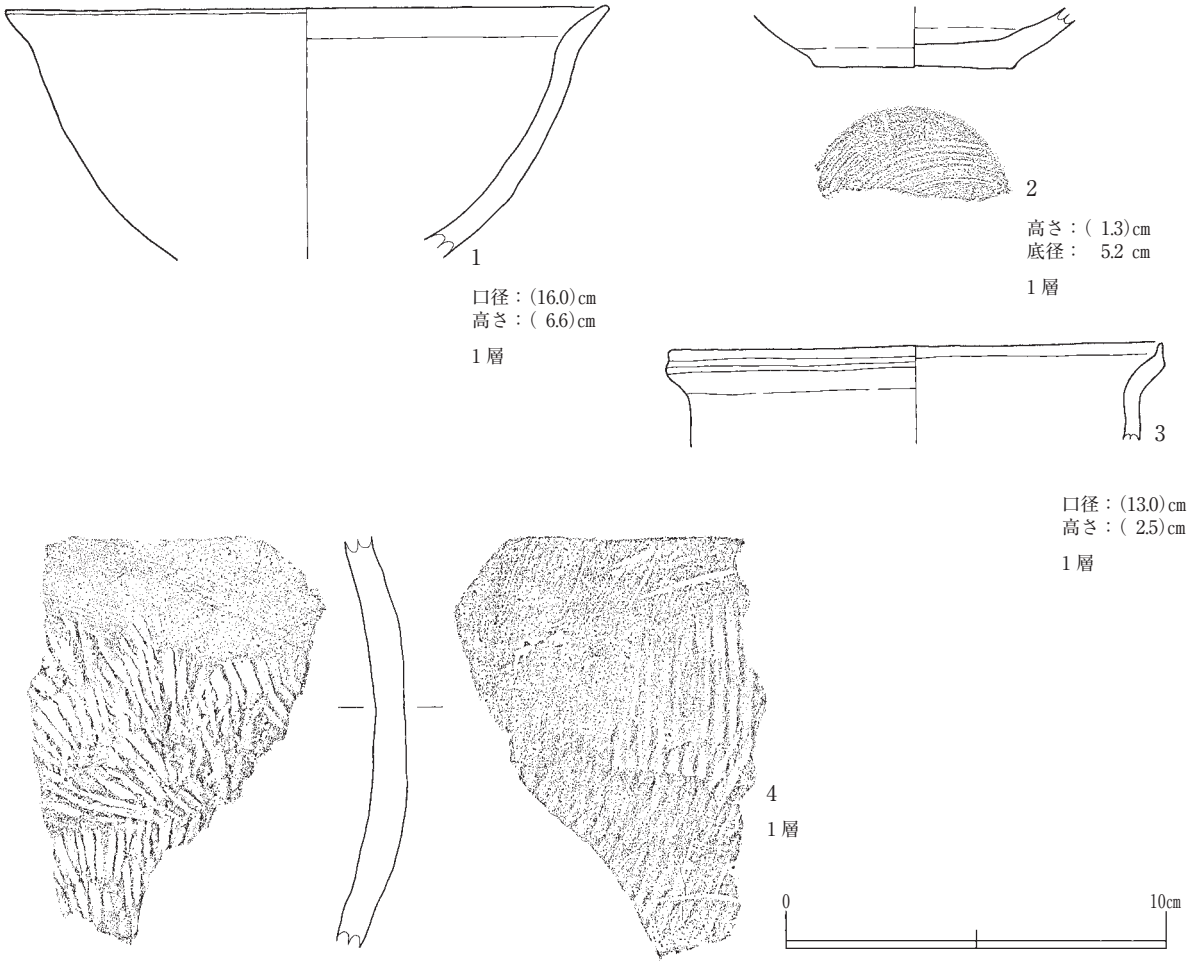


ＳＫ20
1黒色土（10YR2/1）しまり強　粘性中　粘土塊微量、
酸化土粒多量含む

第 28 図　ＳＫ 02・04・07・12・16・20 土坑実測図

m、短径 1.5m、検出面からの深さは 0.48m である。北側の周壁はやや急角度に、その他の周壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。遺物は２層から土師器杯形の破片１点、土師器甕形の破片５点、須恵器杯形の破片１点及び小礫１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

なお、１層から出土した炭化物の放射性炭素 ^{14}C 年代測定の結果は1,230 ± 30 ＢＰ（AD.695 ～ 861）であった。



第 29 図　ＳＫ 02 土坑出土遺物実測図

ＳＫ07（第28図、第30図６、図版３）

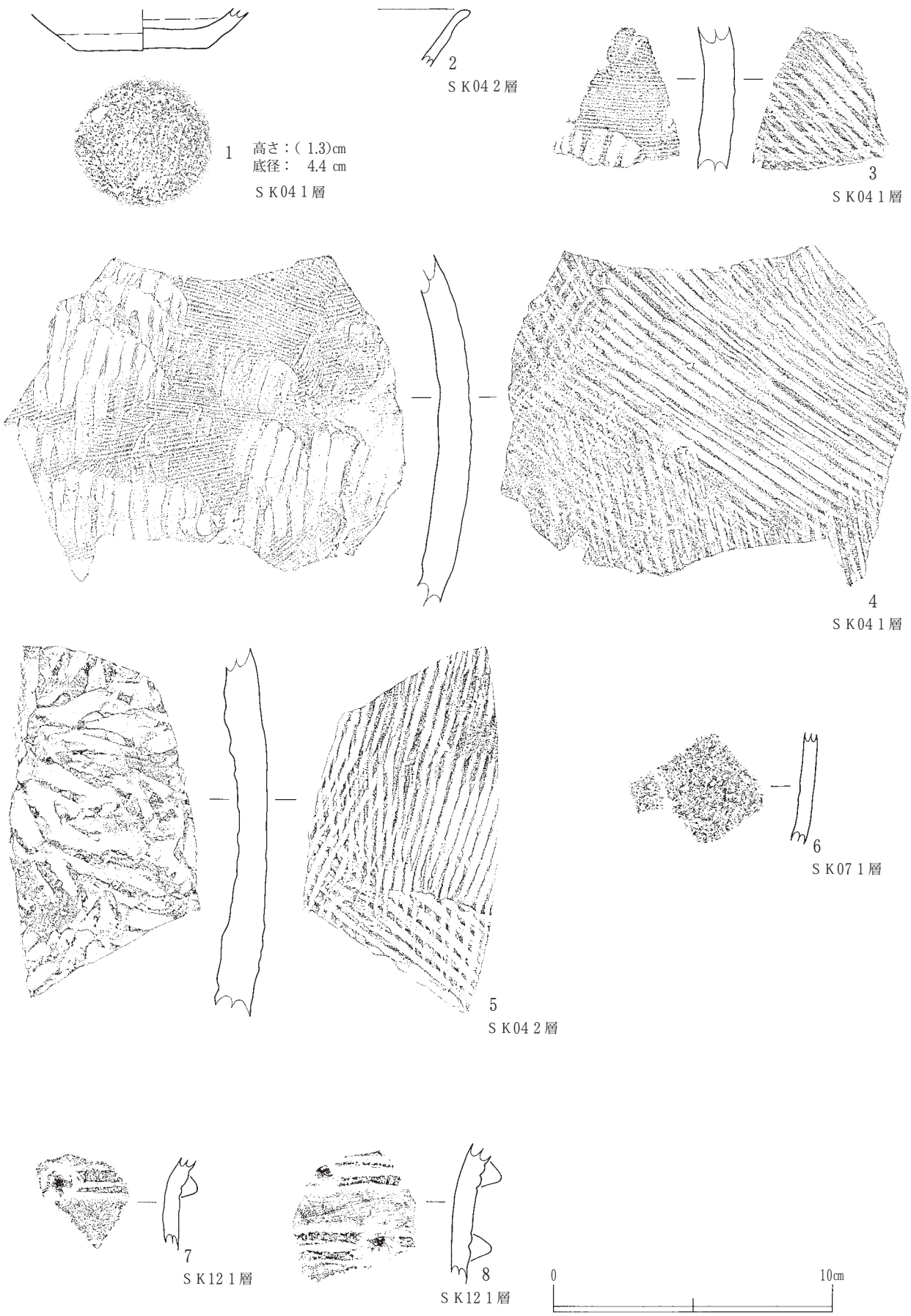
ＬＮ44グリッドに位置し、第Ⅳ層で円形の黒色土の広がりを確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ36土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、地山土粒を少量含む。平面形は円形で、規模は直径が 0.66m、検出面から底面までの深さは 0.17m である。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は堆積土中から縄文土器の破片が１点出土したが、周囲からの流入と判断し、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ12（第28図、第30図７・８、図版３）

ＬＫ44グリッドの第Ⅳ層上面で確認した。周辺にはＳＥ09井戸跡、ＳＤ08 溝跡がある。

堆積土は黒色土の単一層で、酸化土粒や地山土粒を含む。平面形は不整な楕円形で、規模は長径が 1.1m、短径が 0.72m、検出面から底面までの深さは 0.20 m である。周壁は東側がほぼ垂直に、その



第 30 図　ＳＫ 04・07・12 土坑出土遺物実測図

他の周壁はやや急角度に立ち上がっていた。底面はほぼ平坦である。遺物は、縄文時代後期に属する深鉢形土器の胴上部破片２点が出土したが周囲からの流入と判断し、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ16（第28図、第32図１～３）

ＬＱ53グリッドの第Ⅱ層中位で確認した。排水用の水路掘削時に遺構の上部３分の２ほどが削られている。周辺にはＳＮ13～15・17～19焼土遺構がある。

堆積土は２層に分層した。１・２層とも酸化土粒を含む黒褐色土で、２層には地山土粒が多量に混入していた。レンズ状に堆積していることから、本遺構は自然堆積により埋没したと考える。残存部の形状から推定すると、平面形は不整な楕円形で、規模は長径が1.1ｍ、短径が0.52ｍ、検出面から底面までの深さは0.26ｍと推定される。周壁は東側がほぼ垂直に、その他の周壁はやや急角度に立ち上がるものと思われ、底面はほぼ平坦であった。また、底面のほぼ中央に直径0.12ｍ、深さ0.07ｍのピット状の掘り込みを検出した。遺物は１層から土師器坏形の破片12点、土師器甕形の破片12点、須恵器壺形の破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ20（第28図）

ＬＴ50・ＭＡ50グリッドに位置し、第Ⅱ層で円形の黒色土の広がりを確認した。ＳＫＰ071柱穴様ピットと重複するが本遺構の方が古い。周辺にはＳＢ40掘立柱建物跡、ＳＥ21・22井戸跡、ＳＫ23土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、粘土塊を微量含んでいる。平面形は円形で、規模は直径が1.4ｍ、検出面から底面までの深さは0.06ｍである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ23（第31図）

ＬＳ50・ＬＴ50グリッドに位置し、第Ⅱ層で黒色土の楕円形の広がりを確認した。ＳＫＰ057柱穴様ピットと重複するが本遺構の方が古い。周辺にはＳＢ40掘立柱建物跡、ＳＥ21・22井戸跡、ＳＫ20土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、粘土塊を微量、酸化土粒を多量含む。平面形は不整な楕円形で、規模は長径が1.36ｍ、短径が1.04ｍ、検出面から底面までの深さは0.51ｍである。周壁は急角度で立ち上がっていた。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ24（第31図）

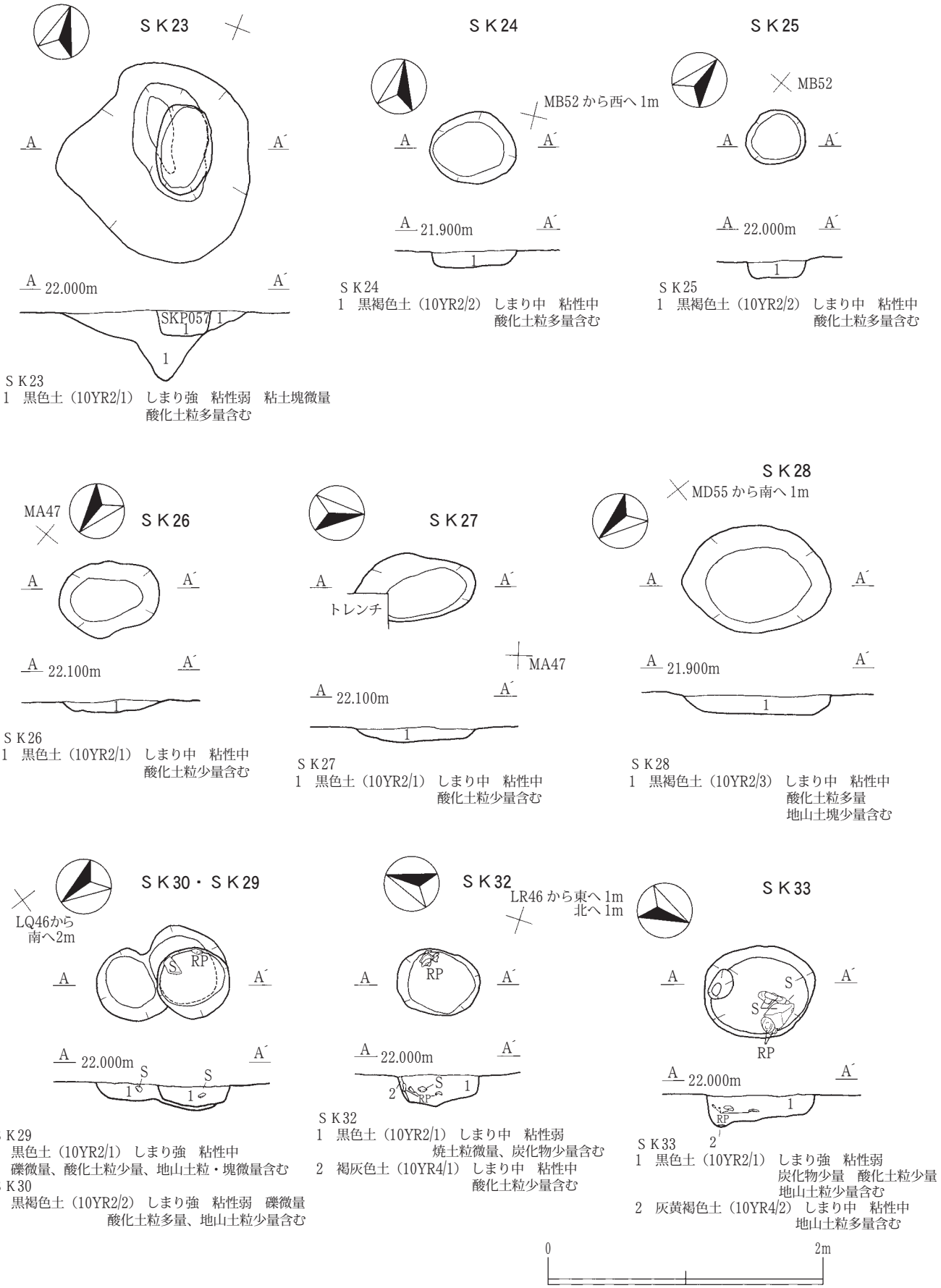
ＭＢ51グリッドに位置し、第Ⅱ層上面で確認した。周辺にはＳＫ25土坑がある。

堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒を多量に含む。平面形は楕円形で、規模は長径が0.64ｍ、短径が0.52ｍ、検出面から底面までの深さは0.12ｍである。西側の周壁は急角度に、その他の周壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ25（第31図）

ＭＡ51グリッドの第Ⅱ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ24土坑がある。

堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒を多量に含む。平面形は円形で、規模は直径が0.42ｍ、検出面から底面までの深さは0.12ｍである。周壁は全周ほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。



第 31 図　ＳＫ 23 ～ 30・32・33 土坑実測図

遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ26（第31図）

ＭＡ46・47グリッドの第Ⅱ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ27土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、酸化土粒を少量含む。平面形は不整な楕円形で、規模は長径が0.72m、短径が0.54m、検出面から底面までの深さは0.10mである。周壁は全周緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ27（第31図）

ＭＡ46グリッドの第Ⅱ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＫ26土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、酸化土粒を少量含む。南西側の４分の１が確認調査時のトレンチにより削平されていた。平面形は楕円形で、規模は長径が0.88m、短径が0.50m、検出面から底面までの深さは0.10mと推定される。東側の周壁は急角度に、その他の周壁は緩やかに立ち上がると推定した。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ28（第31図）

ＭＤ54グリッドの第Ⅱ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＥ38井戸跡がある。

堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒を多量、地山土塊を少量含む。平面形は楕円形で、規模は長径１m、短径0.78m、検出面から底面までの深さは0.14mである。周壁は全周やや急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＫ29（第31図、第32図４、図版４）

ＬＱ46グリッドに位置し、第Ⅳ層でだるま型の黒色土の広がりを確認した。ＳＫ30土坑と重複するが、本遺構の方が新しい。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＮ35焼土遺構、ＳＫ32～34土坑がある。

堆積土は黒色土の単一層で、礫を微量含んでいる。平面形は円形で、規模は直径が0.53m、検出面から底面までの深さは0.14mである。周壁は急傾斜に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は１層から土師器杯形の底部破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ30（第31図、第32図５・６、図版４）

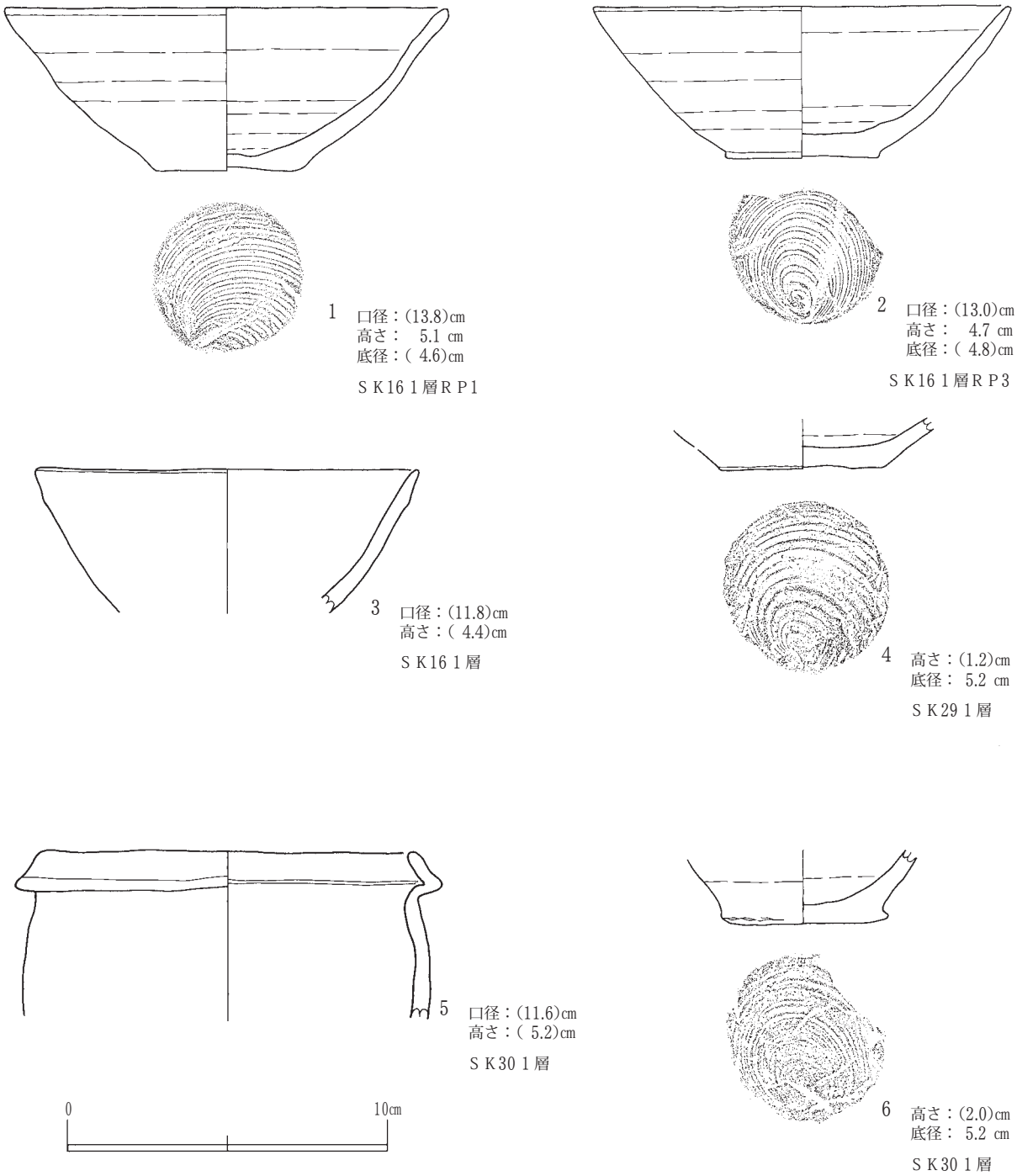
ＬＱ46グリッドに位置し、第Ⅳ層でだるま型の黒色土の広がりを確認した。ＳＫ29土坑と重複するが、本遺構の方が古い。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＮ35焼土遺構、ＳＫ32～34土坑がある。

堆積土は黒褐色土の単一層で、礫を微量含んでいる。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は0.94m、短径は0.42m、検出面から底面までの深さは0.15mである。周壁は急傾斜に立ち上がり、底面には凸凹がある。遺物は堆積土中から土師器杯形の破片５点と土師器甕形の破片18点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ32（第31図、第33図１～５、図版４）

ＬＱ46グリッドに位置し、第Ⅳ層で楕円形の黒色土の広がりを確認した。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＮ35焼土遺構、ＳＫ29・30・33・34土坑がある。

堆積土は２層に分層した。１層は黒色土で、焼土粒を微量、炭化物粒を少量、礫を微量に含む。２層は灰褐色土で、酸化土粒を少量含む。平面形は楕円形で、規模は長径が0.60m、短径が0.47m、検出面から底面までの深さは0.23mである。周壁は急角度で立ち上がり、底面にはやや凸凹が見られる。遺物は１層から土師器杯形の破片13点、土師器甕形の破片８点、土師器壺形の破片１点が出土した。



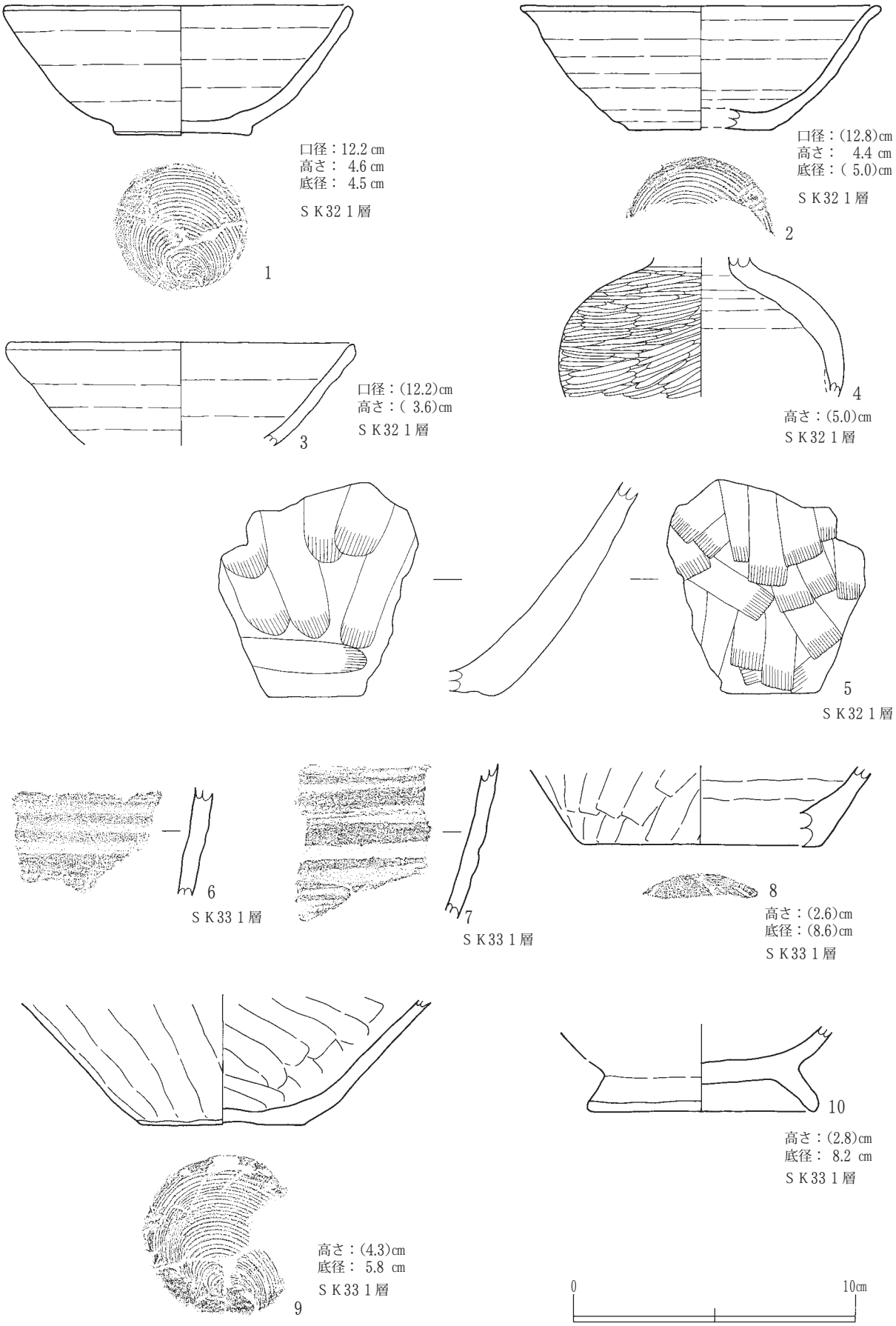
第 32 図　ＳＫ 16・29・30 土坑出土遺物実測図

土師器壺形は須恵器壺形の模倣である。本遺構の所属時期は平安時代である。なお、1 層から出土した炭化物の放射性炭素^{14}Ｃ年代測定の結果は 1,080 ± 30 ＢＰ（ＡＤ 889 ～ 1,011)であった。

ＳＫ33（第31図、第33図 6 ～10、図版 4）

ＬＱ47グリッドに位置し、第Ⅳ層で楕円形の黒色土の広がりを確認した。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＮ35焼土遺構、ＳＫ29・30・32・34土坑がある。

堆積土は 2 層に分層した。1 層は黒色土で炭化物粒を少量を含んでいる。2 層は灰黄褐色土で、地山土粒を多量に含む。平面形は楕円形で、規模は長径が 0.80m、短径が 0.66m、検出面から底面までの深さは 0.19m である。周壁は急角度で立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。遺物は 1 層から土師



第 33 図　ＳＫ 32・33 土坑出土遺物実測図

器杯形の破片21点（内黒３点含む）、土師器高台付き杯形の破片１点、土師器甕形の破片14点が出土した。底面では大きさ10～20㎝の礫の下位に土師器甕形の破片が確認され、礫の上位では土師器高台付き杯形の破片が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ34（第34図、図版４）

ＬＲ46グリッドに位置し、第Ⅳ層で楕円形の黒褐色土の広がりを確認した。ＳＫＰ124・125柱穴様ピットと重複するが本遺構の方が古い。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＮ35焼土遺構、ＳＫ29・30・32・33土坑がある。

堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒を少量、地山土塊を多量に含む。平面形は楕円形で、規模は長径が1.42m、短径が1.27m、検出面から底面までの深さは0.12mである。周壁は急角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は１層から土師器甕形の破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＫ36（第34図、図版４）

ＬＰ44グリッドに位置し、第Ⅳ層で楕円形の黒色土の広がりを確認した。東側は付け替えられた新農道の盛り土で確認できなかった。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡がある。

堆積土は２層に分層した。１層は黒色土で、２層は黒褐色土である。平面形は楕円形で、規模は長径が0.75m、短径が0.55m、検出面から底面までの深さは0.28mである。周壁は急角度で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかったが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

（５）溝跡

ＳＤ08（第34図、第34図１～４、図版４）

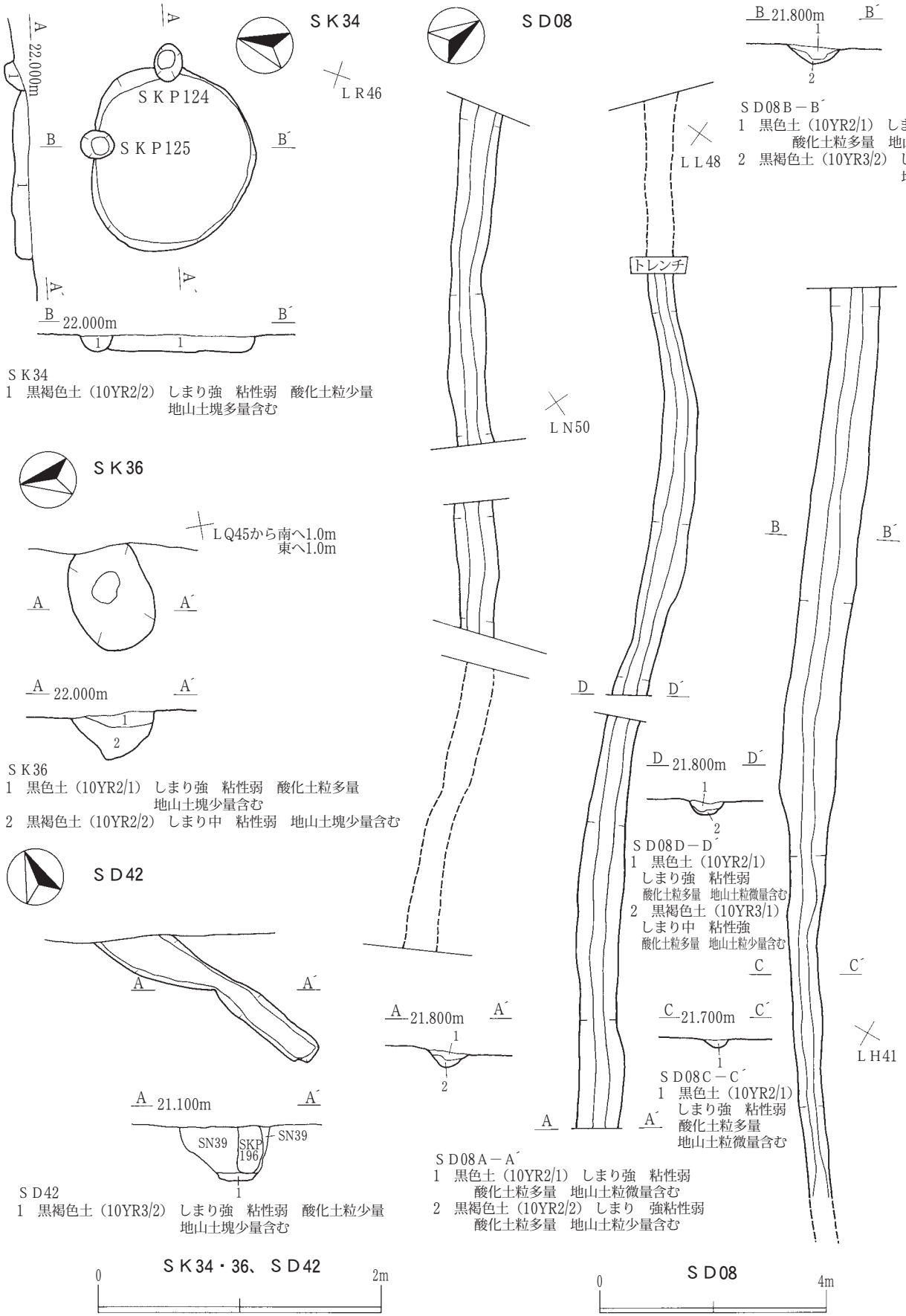
ＬＧ40～ＬＯ50グリッドの第Ⅱ層上面で確認した。重複する遺構はなく、周辺にはＳＩ05竪穴住居跡、ＳＥ03・09井戸跡、ＳＫ07・12土坑、ＳＮ10焼土遺構がある。

堆積土は２層に分層した。１層は黒色土、２層は黒褐色土で、どちらもレンズ状に堆積していることから自然流入土と考えた。確認した範囲内での規模は、長さ52m、最大幅１m、最深部0.32mである。本遺構は、遺跡周辺の低地と、ＳＩ05竪穴住居跡やＳＢ41掘立柱建物跡などが立地する微高地の境界付近に位置していることから、集落または屋敷地の区画施設として機能していたものと推測した。遺物は土師器杯形の破片１点、土師器甕形の破片40点、須恵器杯形の破片１点、須恵器甕形の破片４点、中世陶器の甕形の破片１点が出土した。中世陶器の破片が出土しているが、本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

ＳＤ42（第34図、図版４）

ＭＨ58グリッドに位置し、第Ⅳ層で溝状の黒褐色土の広がりを確認した。ＳＮ39焼土遺構、ＳＫＰ196柱穴様ピットと重複するが、本遺構の方が古い。北側は調査区外に延伸するものと思われる。

堆積土は黒褐色土の単一層で、酸化土粒を少量、地山土塊を少量含む。確認した範囲内での規模は長さ1.5m、最大幅0.43m、検出面から底面までの深さは0.05mである。北側から南側にかけて緩く傾斜している。遺物は堆積土中から土師器杯形の破片２点（うち内黒１点）、土師器甕形の破片４点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。



第34図　ＳＫ34・36土坑、ＳＤ08・42溝跡実測図

（６）焼土遺構

ＳＮ10（第35図）

ＬＮ・ＬＯグリッドに位置し、第Ⅳ層で焼土の広がりを確認した。被熱範囲は不整な楕円形で、長径は1.26m、短径は0.86mである。堆積土は２層に分層した。１層は暗赤褐色土で被熱している。２層は暗褐色土基調で焼土粒が少量混入している。遺物は出土しなかった。

ＳＮ13（第35図、第36図１）

ＬＴ52グリッドに位置し、第Ⅱ層で黒色土と焼土の広がりを確認した。大部分が確認調査時のトレンチにより削平されている。ＳＫＰ051柱穴様ピットと重複するが本遺構のほうが古い。ＳＮ17～19焼土遺構と隣接し、周辺にはＳＮ14・15焼土遺構、ＳＫ16土坑がある。

粘土をドーム状に構築した部分と、燃焼部と思われる部分の一部が残存していた。Ａ－Ａ’ラインの残存部の規模は0.99mで、燃焼部の平面形は楕円形と推定される。検出面からの深さは0.12mである。燃焼部中央から丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。本遺構の周囲では、竪穴住居跡のような掘り方やそれに伴う柱穴は確認できなかったため、屋外施設の可能性が高い。

堆積土は４層に分層した。１・２層は流入土や焼土である。特に２層は強く焼け、赤褐色になっている。３層は構築粘土である。４層は黒色土で硬く締まっている。４層の下は基本土層Ⅲ層で凹凸がある。遺物は１・２層から土師器杯形の破片16点（内黒１点含む）、土師器甕形の破片14点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。なお、１層から出土した炭化物の放射性炭素14Ｃ年代測定の結果は1,070±30ＢＰ（ＡＤ904～1,017）であった。

ＳＮ14（第35図、第36図２・３）

ＬＱ53グリッドの第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。重複する遺構はなく、ＳＮ15焼土遺構、ＳＫ16土坑と近接し、周辺にはＳＮ13・17・18・19焼土遺構がある。

被熱範囲は不整な台形状で、最大長1.2mの範囲である。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。焼土中から炭化した木枝が多数と、土師器杯形の破片12点、土師器甕形の破片14点が出土した。

本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＮ15（第35図、第36図４～６）

ＬＱ53グリッドの第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。重複する遺構はなく、ＳＮ14焼土遺構、ＳＫ16土坑と近接し、周辺にはＳＮ13・17～19焼土遺構がある。

被熱範囲は不整な半円状で、最大長1mの範囲である。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。焼土中から炭化した木枝が多数と、土師器杯形の破片３点、土師器甕形の破片９点が出土した。

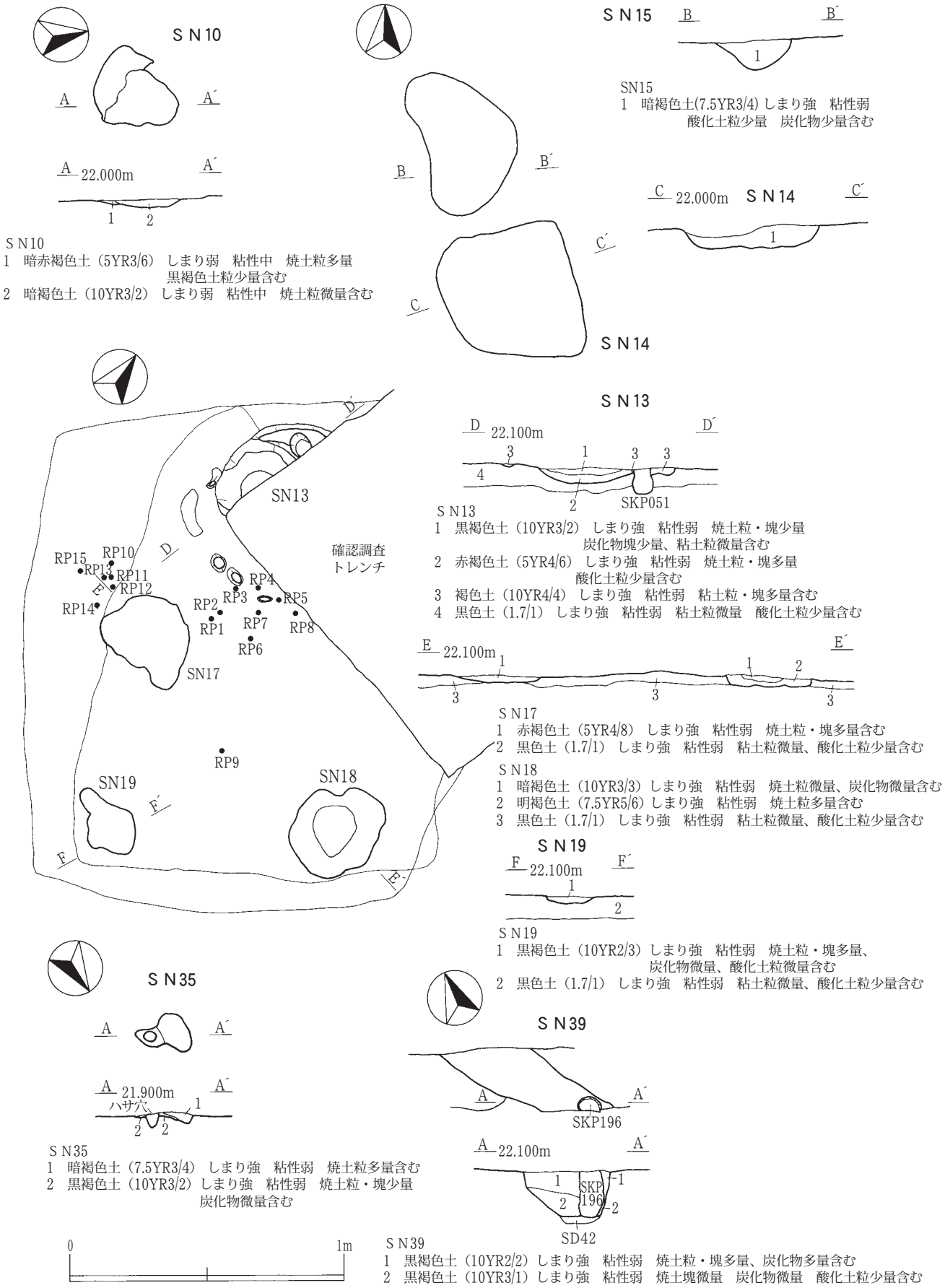
本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＮ17（第35図）

ＬＴ52グリッドに位置し、第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。ＳＮ13・18・19焼土遺構が隣接している。

被熱範囲は不整な楕円形で、長径が0.70m、短径が0.43mである。検出面から底面までの深さは0.06ｍで、浅いⅢのような掘り込みである。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。

堆積土は２層に分層した。１層は強く焼けており、赤褐色土である。２層は黒色基調で、硬く締まった土である。遺物は１層から土師器甕形の破片１点が出土した。



第 35 図　ＳＮ 10・13 ～ 15、17 ～ 19、35・39 焼土遺構実測図

本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＮ18（第35図）

ＬＳ・ＬＴ52グリッドに位置し、第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。ＳＮ13・17・19焼土遺構が隣接し、周辺にはＳＮ14・15焼土遺構、ＳＫ16土坑がある。

被熱範囲は不整な楕円形で、長径が0.72m、短径が0.38mである。検出面から底面までの深さは0.08mで、浅い皿のような掘り込みである。周囲に本遺構に伴う柱穴等のプランは確認できなかった。

堆積土は３層に分層した。１・２層は強く焼けており、暗褐色土または明褐色土になっている。3層は黒色土で硬く締まっている。遺物は２層から土師器杯形の破片１点が出土した。

本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＮ19（第35図、第36図７）

ＬＴ52グリッドに位置し、第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。ＳＮ13・17・18焼土遺構が隣接し、周辺にはＳＮ14・15焼土遺構、ＳＫ16土坑がある。

被熱範囲は不整な楕円形で、長径が0.55m、短径が0.17mである。検出面から底面までの深さは0.06mで、浅い皿のような堀込みである。周囲に本遺構に伴う柱穴等のプランは確認できなかった。

堆積土は２層に分層した。１層は黒褐色基調で焼土粒を多量に含んだ土である。２層は黒色基調で硬く締まった土である。遺物は１層から土師器杯形の破片２点が出土した。

本遺構の所属時期は平安時代である。

ＳＮ35（第35図）

ＬＱ46グリッドに位置し、第Ⅳ層で焼土の広がりを確認した。東側が現代の穴で切られている。周辺にはＳＢ41掘立柱建物跡、ＳＫ29・30・32～34土坑がある。

被熱範囲は不整な楕円形で、長径が0.41m、短径が0.15mである。周辺に柱穴はあるが本遺構に伴う柱穴とは確認できなかった。

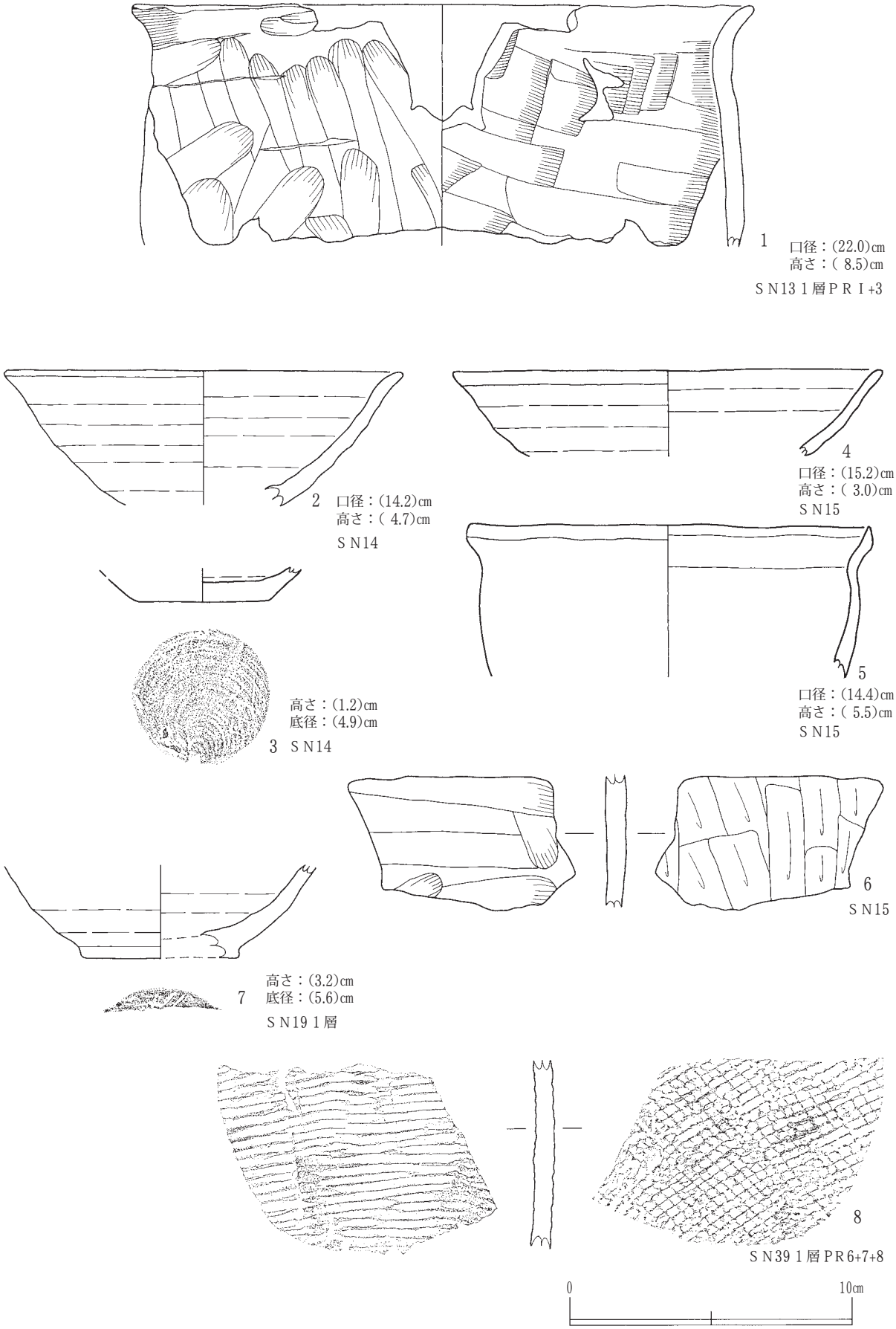
堆積土は２層に分層した。１層は暗褐色土で被熱している。２層は黒褐色土で焼土粒が少量混入している。遺物は１層から土師器杯形の破片１点が出土した。

周辺にＳＢ41、ＳＫ29・30・32～34があるため、本遺構で火を使用し、周辺で何らかの作業をしていたものと考えて、遺物の出土はないが本遺構の所属時期を平安時代と推定した。

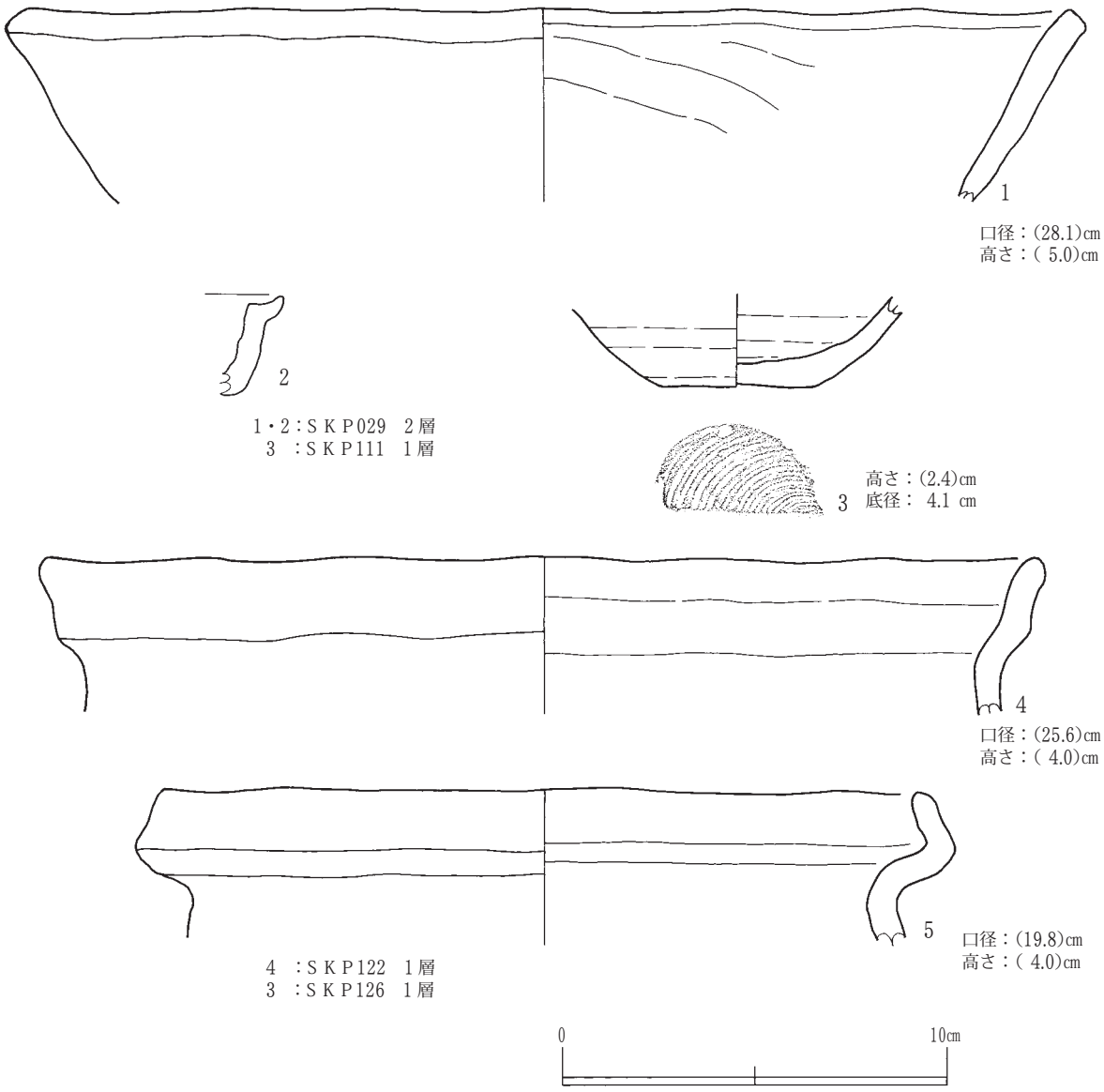
ＳＮ39（第35図、第36図８）

ＭＨ58グリッドに位置し、第Ⅱ層で焼土の広がりを確認した。ＳＤ42溝状遺構、ＳＫＰ196柱穴様ピットと重複するが、本遺構の方がＳＤ42より古く、ＳＫＰ196より新しい。北側は調査区外であり、南側は掘りすぎたため、全体の形状は不明確であるが、残存部から推定すると長径は0.60m、短径は0.35mの楕円形と考えられる。検出面から底面までの深さは0.34mで、深い溝のような掘り込みである。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。

堆積土は２層に分層した。１層は黒色土で全面が弱く被熱している。２層も黒色土で焼土粒が少量混入している。遺物は１層から土師器杯形の破片５点、土師器鍋形の破片１点、須恵器甕形の胴部破片１点が出土した。本遺構の所属時期は平安時代である。



第 36 図　ＳＮ 13 ～ 15、19・39 焼土遺構出土遺物実測図



第 37 図　ＳＫＰ 029・111・122・126 柱穴様ピット出土遺物実測図

（７）柱穴様ピット

柱穴様ピットは、調査区のほぼ南東部から北西部にかけて検出した。個々の柱穴様ピットについては第２・３表にまとめた。ＳＫＰ029柱穴様ピットからは土師器鍋形の破片（第 37 図 1）と甕形の破片（第 37 図 2）が、ＳＫＰ111 柱穴様ピットからは土師器杯形の底部破片１点（第 37図3）が、ＳＫＰ 122 柱穴様ピットとＳＫＰ 126 柱穴様ピットからは土師器甕形の破片(第 37 図４・５)が出土した。

２　遺構外出土遺物（第38図～第40図）

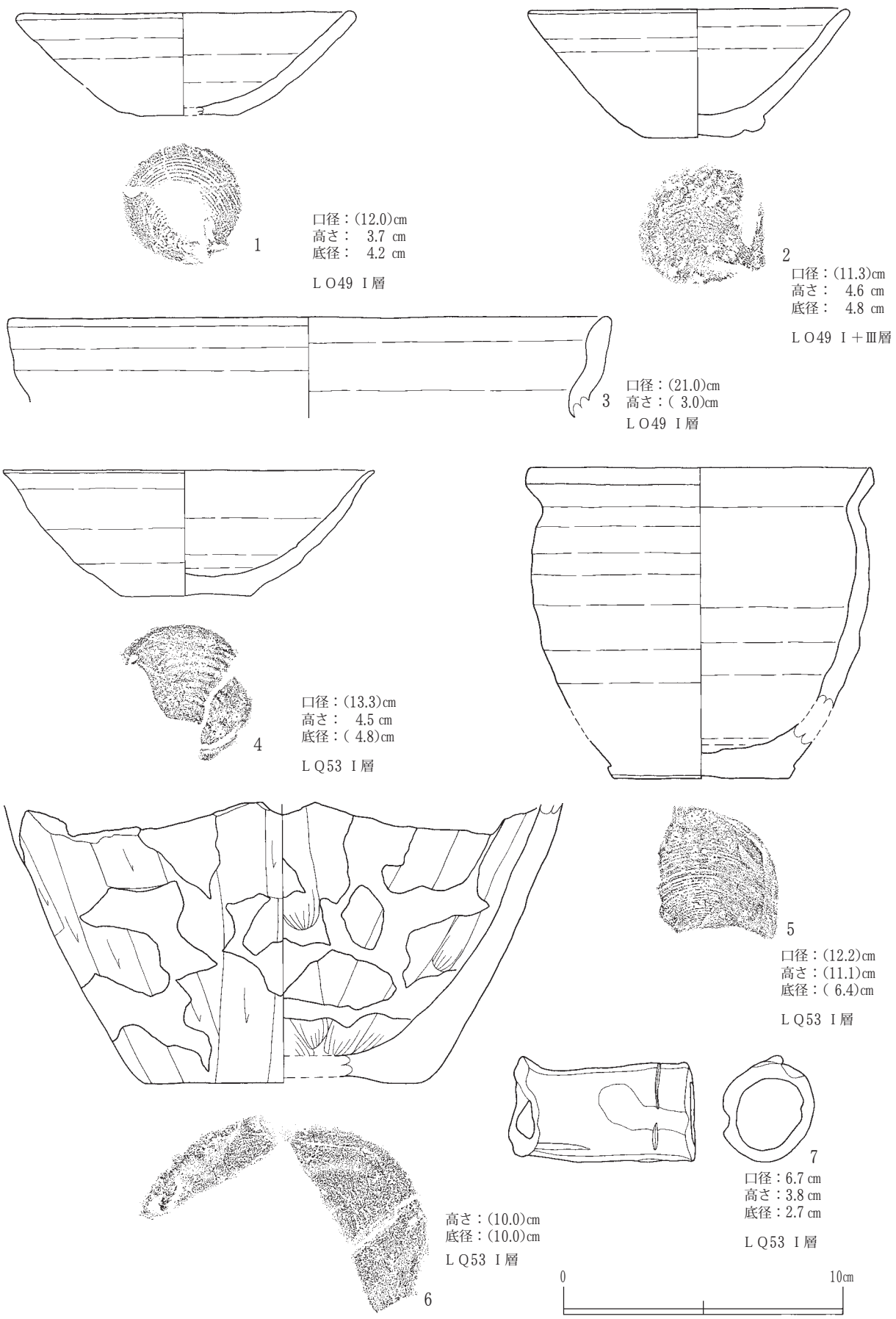
遺構外からは、土師器杯形の破片（第38図１・２・４・８）、土師器甕形の破片（第38図３・５・６・９～11）、土師器把手付き甕形の把手破片（第38図７）、土錘（第39図12～15)、砥石片（第39図16)、須恵器小型壺形の体部破片（第 40 図 17)、須恵器大型甕形の胴部破片（第40図 18 ～ 24）が出土した。土師器杯形３点は口径と底径は近似する数値を示すが、器高に 0.8 ～ 0.9cmの差と体部の立ち上が

第２表　柱穴様ピット観察表（１）

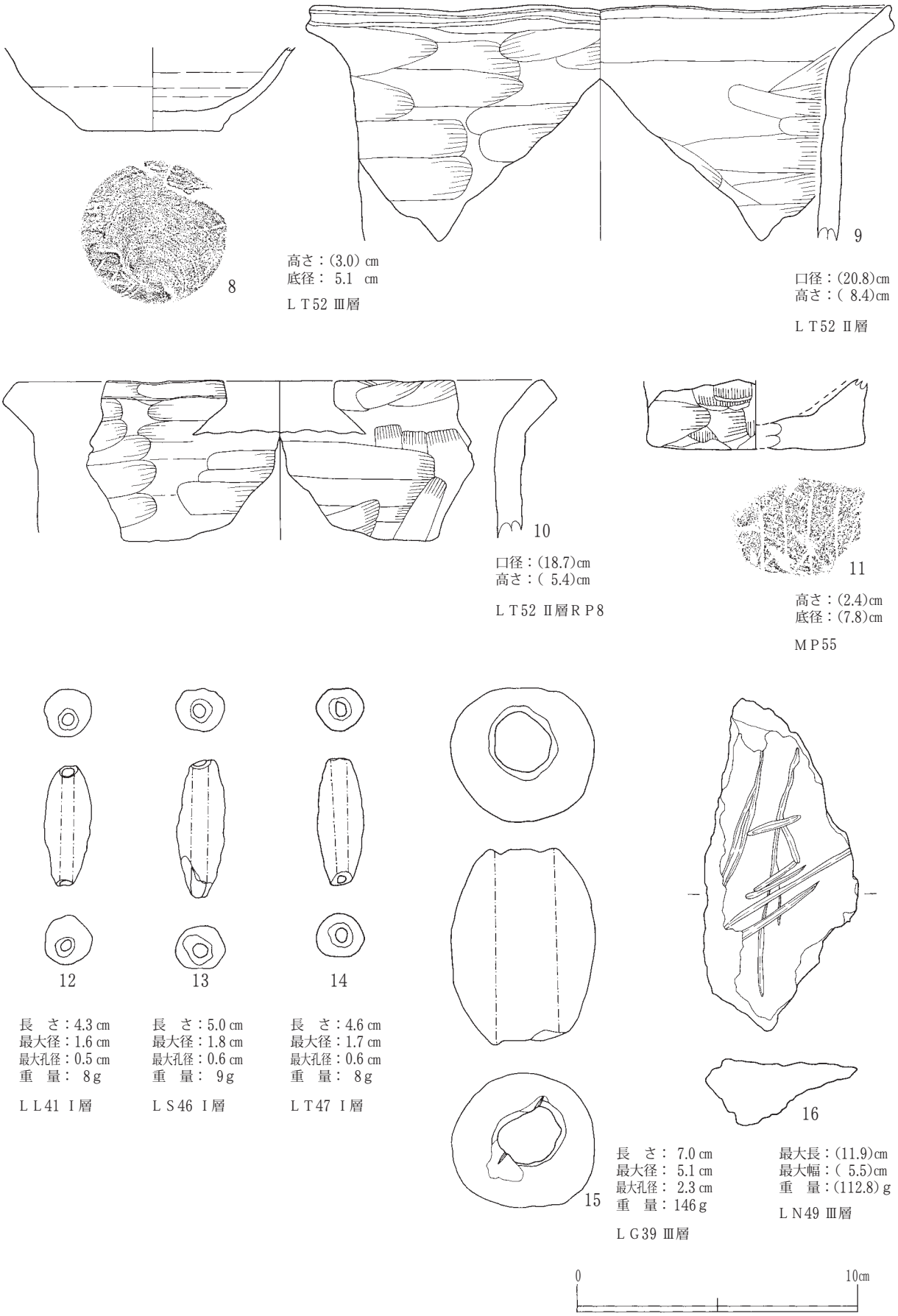
SKP番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	大きさ 深さ（cm）	底面の標高（m）	SKP番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	大きさ 深さ（cm）	底面の標高（m）
001	LF38	楕円形	46	36	32	21.52	051	LT52	（楕円形）	(27)	25	19	21.68
002	LH39	円形	17	16	20	21.60	052	LT49	楕円形	39	33	21	21.63
003	LH39	（不整な楕円形）	35	21	28	21.53	055	MA53	楕円形	24	21	19	21.59
004	LH39	長方形	26	19	20	21.62	057	LS50・LT50	楕円形	70	40	13	21.69
005	LH39	長方形	16	15	19	21.63	058	LR46・LS46	楕円形	23	17	23	21.69
006	LH40	楕円形	24	20	12	21.66	059	LS46	円形	30	30	19	21.62
007	LH39	楕円形	20	15	28	21.61	060	LT53	（円形）	21	(15)	13	21.60
008	LH39	不整な楕円形	33	19	21	21.52	061	LT53	楕円形	20	15	19	21.37
009	LH39	不整な楕円形	23	21	13	21.63	062	LS52	楕円形	24	19	14	21.67
011	LI40	円形	21	20	22	21.63	063	LS52	楕円形	26	21	16	21.62
013	LI40	不整な楕円形	25	15	11	21.70	065	LR49・LR50	楕円形	31	22	5	21.78
014	LI41	円形	23	22	15	21.61	066	MB51	楕円形	23	20	15	21.60
015	LJ41	楕円形	32	26	8	21.60	067	LS45	楕円形	25	19	6	21.75
016	LJ40・LK40	不整な楕円形	50	42	15	21.70	068	LS45	楕円形	24	15	14	21.68
017	LK40	不整な楕円形	45	38	16	21.61	069	MA49	楕円形	21	19	10	21.72
018	LM40	不整な楕円形	37	28	33	21.55	070	MD53	楕円形	22	17	13	21.56
019	LL41	楕円形	19	14	32	21.55	071	LT50	楕円形	34	23	12	21.70
020	LL41	円形	20	20	21	21.66	072	MG51	楕円形	26	24	17	21.59
021	LL41	楕円形	33	25	23	21.61	073	MB52	（楕円形）	65	(37)	43	21.34
022	LM44	円形	32	29	14	21.63	074	LS48	楕円形	19	17	28	21.52
023	LM43	円形	42	41	35	21.50	075	LS48	楕円形	25	23	21	21.59
024	LL41	不整な楕円形	30	25	23	21.53	076	LS47	楕円形	18	12	26	21.54
025	LN41・LO41	不整な楕円形	29	25	22	21.71	077	LS47	楕円形	13	11	17	21.61
026	LN42	円形	24	23	23	21.68	078	LS47	楕円形	20	18	24	21.54
027	LN42	不整な楕円形	29	24	19	21.73	079	LS47	円形	16	15	12	21.65
028	LN42・LO42	楕円形	30	25	17	21.74	080	LS47	円形	16	15	16	21.57
029	LP42・LP43	楕円形	47	42	35	21.51	081	LS47	楕円形	20	17	28	21.50
030	LP42・LQ42	円形	40	36	11	21.78	082	LS47	楕円形	17	12	22	21.50
031	LP43	楕円形	52	50	13	21.73	083	LS47	楕円形	20	15	14	21.63
032	LO43	楕円形	31	26	16	21.65	084	LS47	円形	17	17	24	21.59
033	LN44	長方形	23	19	23	21.56	085	LS46	楕円形	21	15	25	21.54
034	LL43	円形	32	29	31	21.57	086	LS48	楕円形	20	17	12	21.65
035	LL43	円形	22	19	31	21.62	087	LS46	楕円形	17	15	20	21.61
036	LL41	円形	16	16	27	21.49	088	LS46・LS47	楕円形	20	14	22	21.60
037	LK41	円形	15	15	34	21.52	089	LS46・LS47	楕円形	18	14	27	21.57
038	LK44	楕円形	56	40	36	21.35	090	LT46	円形	19	18	28	21.53
039	LM45	楕円形	51	32	20	21.55	091	LT46	楕円形	20	15	21	21.62
040	LN44	楕円形	25	21	12	21.62	092	LS48	楕円形	20	14	24	21.53
041	LM44	円形	23	22	16	21.60	093	LS46	円形	19	18	22	21.60
042	LM45	楕円形	32	27	18	21.60	094	LS46	楕円形	21	15	28	21.53
043	LL44	不整な楕円形	39	29	15	21.61	095	LS46	楕円形	16	11	17	21.73
044	LO49	楕円形	38	25	13	21.64	096	LR50	楕円形	26	21	30	21.53
045	LO49	円形	27	24	22	21.54	097	LR50	楕円形	22	14	21	21.61
046	LN48	円形	18	17	25	21.53	098	LR49	円形	23	23	28	21.54
047	LP44	不整な楕円形	73	48	33	21.49	100	LR49・LR50	円形	16	16	10	21.73
048	LL44	円形	27	25	21	21.57	102	LR50	楕円形	20	18	38	21.46

第３表　柱穴様ピット観察表（２）

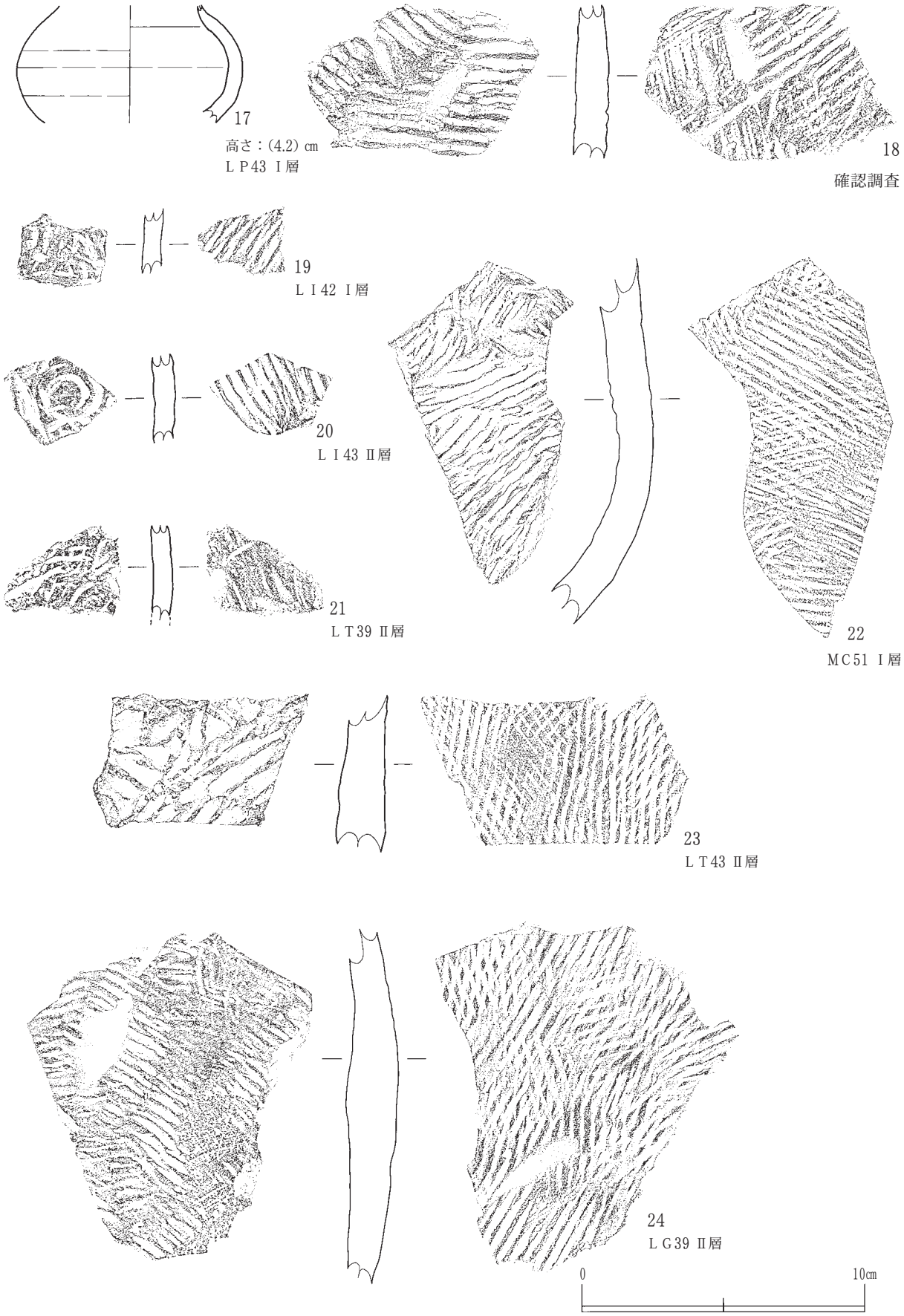
SKP番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	大きさ 深さ（cm）	底面の標高（m）	SKP番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	大きさ 深さ（cm）	底面の標高（m）
103	LR47・LR48	楕円形	17	14	19	21.56	153	LR47	楕円形	18	16	21	21.68
104	LS46	楕円形	15	12	18	21.65	154	LR47	楕円形	30	25	40	21.48
105	LS46	楕円形	16	14	13	21.07	155	LQ47	円形	29	29	47	21.41
106	LS46	長方形	22	20	12	21.7	156	LR47	楕円形	17	13	24	21.64
109	LP49	楕円形	33	26	26	21.64	157	LR48	円形	17	16	27	21.62
110	LP49	楕円形	25	23	27	21.63	158	LR48	円形	19	19	16	21.69
113	LQ51	不整な楕円形	24	13	29	21.58	159	LR47	楕円形	16	10	37	21.52
114	LQ51	楕円形	27	17	35	21.52	160	LR47	円形	15	15	27	21.64
115	LQ51	楕円形	24	17	27	21.63	161	LQ48・LQ49	円形	19	18	21	21.68
116	LQ51	円形	22	21	24	21.66	162	LR49	楕円形	26	18	18	21.71
117	LQ51	楕円形	20	15	23	21.76	163	LQ50	楕円形	18	11	30	21.58
118	LQ51	円形	24	23	34	21.58	164	LQ49	円形	13	12	11	21.88
119	LQ51・LR51	楕円形	23	21	35	21.6	165	LQ50・LR50	楕円形	20	18	23	21.67
120	LR51	（楕円形）	22	(15)	35	21.56	166	LR46	楕円形	59	49	30	21.59
121	LQ46	楕円形	24	22	20	21.63	167	LR46	楕円形	27	20	14	21.73
122	LQ46	不整な楕円形	38	23	25	21.59	168	LR47	楕円形	31	26	20	21.66
123	LQ46	楕円形	28	24	37	21.45	169	LR46	楕円形	38	34	10	21.74
124	LR46	楕円形	26	19	12	21.78	170	LR48	楕円形	20	17	26	21.59
125	LR46	楕円形	23	18	12	21.78	171	LR49	楕円形	18	13	31	21.56
126	LQ46	楕円形	25	23	26	21.63	172	LR49	楕円形	21	17	25	21.62
127	LR51	（楕円形）	25	(14)	36	21.56	173	LR49	楕円形	22	14	21	21.65
128	LQ50・LR50	楕円形	20	15	27	21.67	174	LR50	楕円形	23	17	32	21.55
129	LQ50	楕円形	22	20	29	21.65	175	LR46	円形	18	18	13	21.74
130	LQ50・LR50	楕円形	25	23	41	21.5	176	LR47	楕円形	20	17	11	21.77
131	LQ50・LR50	楕円形	29	23	18	21.75	178	LQ46	（円形）	(19)	(19)	11	21.73
132	LR49	長方形	20	18	43	21.52	179	LQ46	（円形）	(19)	(19)	16	21.68
133	LQ51	楕円形	20	19	31	21.49	180	LQ46	不整な楕円形	30	12	23	21.61
134	LQ50	楕円形	24	17	32	21.63	181	LQ46	円形	20	20	14	21.67
135	LQ50	円形	22	22	17	21.73	182	LQ47	楕円形	27	20	17	21.72
136	LQ47	（楕円形）	28	22	24	21.67	183	LR46	円形	17	17	15	21.72
137	LQ47	（楕円形）	31	19	16	21.76	184	LQ46	楕円形	26	24	23	21.57
138	LQ47	楕円形	25	18	21	21.7	185	LQ46	（楕円形）	(20)	(19)	15	21.68
139	LQ46	楕円形	22	18	22	21.64	186	LQ46	（楕円形）	33	(19)	37	21.46
140	LQ46	楕円形	38	32	12	21.75	187	LR45	楕円形	26	24	15	21.71
141	LQ47	楕円形	31	22	37	21.54	188	LR45	楕円形	25	23	25	21.62
142	LR47	楕円形	23	20	29	21.56	189	LR44・LR45	楕円形	36	27	27	21.57
143	LR47	楕円形	22	15	30	21.59	190	LR46	円形	23	23	10	21.78
144	LQ49	楕円形	19	15	38	21.53	191	ME55	長方形	19	17	40	21.27
146	LR46	楕円形	25	23	26	21.63	192	ME55	長方形	21	18	23	21.52
147	LQ45	楕円形	19	19	10	21.67	193	ME56	長方形	26	25	14	21.58
148	LP45・LQ45	長方形	28	24	6	21.8	194	LR47	楕円形	20	17	10	21.78
149	LR46	楕円形	22	16	13	21.75	195	LR47	楕円形	23	15	21	21.67
150	LQ48・LR48	楕円形	24	13	21	21.7	196	MH58	（楕円形）	17	(8)	62	21.49
151	LR46	楕円形	22	20	68	21.17	198	LL41	楕円形	19	16	28	21.57
152	LR46	楕円形	21	13	12	21.76							



第 38 図　遺構外出土遺物実測図（１）



第 39 図　遺構外出土遺物実測図（２）



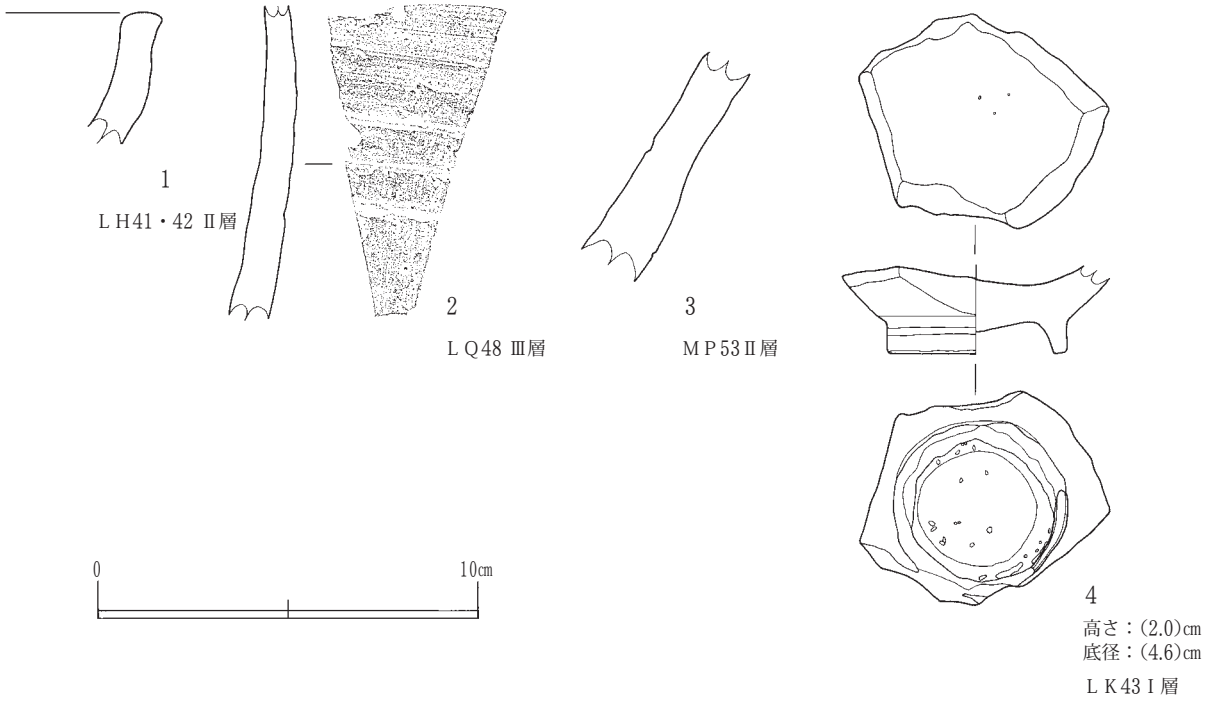
第 40 図　遺構外出土遺物実測図（３）

りの違いから、杯形と椀形に近い器形の差異となっている。

第３節　中世の出土遺物（第 41 図）

中世の遺構は検出されなかったが、須恵器系中世陶器鉢形の破片（第 41 図１～３）、青磁の高台付き器形（器種不明）の底部破片（第41図４）がの４点が出土した。

１は鉢形あるいは擂鉢の口縁部破片である。器形・調整・胎土・焼成から、13 世紀前半の桧山腰窯で生産されたものと考えられる。２は鉢形あるいは擂鉢の体部破片であるが、内面に卸し目等は見られない。３も鉢形あるいは擂鉢の体部破片であるが、内面に卸し目等は見られない。４は底部破片であり器種・器形は不明である。



第 41 図　中世の出土遺物実測図

第５章　自然科学的分析

第１節　布田谷地遺跡の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

布田谷地遺跡は、秋田県大仙市北楢岡字布田谷地に所在する。今回の発掘調査では、平安時代の集落跡が検出された。

今回の分析調査では、各遺構より出土・検出された試料を対象とし、遺構の時期や遺構の性格などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、テフラ分析・屈折率測定、種実同定を実施する。

１　試料

放射性炭素年代測定に用いる試料は、ＳＫ03、ＳＫ04１層、ＳＩ05内ＳＫ02１層、ＳＮ13１層、ＳＫ32１層より出土した炭化材５点（試料番号１～５）である。

テフラ分析・屈折率測定に用いる試料は、調査区北部で検出された焼土遺構の周辺から採取された、褐灰～灰黄褐色を呈する砂質シルト５点（試料番号１～５）である。試料番号１は、焼土遺構のＳＮ13南側そでより採取され、ＬＴ52Ⅱ層から採取されている。また、試料番号３～５は試料番号２と同層位であるが、焼土遺構のＳＮ17周辺から採取されたものである。

種実同定に用いる試料は、ＳＮ14（試料番号1,2）、ＳＮ15（試料番号3,4）、ＳＫＰ090１層（試料番号５）から検出された種実、計43個程度である。

２　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後ＨＣＩにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、ＮａＯＨにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、ＨＣＩによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をパイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。　真空ラインにてパイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３ＭＶ小型タンデム加速器をベースとした14Ｃ－ＡＭＳ専用装置（ＮＥＣ Pelletron 9 ＳＤＨ－２）を使用する。ＡＭＳ測定時に標準試料である米国国立標準局（ＮＩＳＴ）から提供されるシュウ酸（ＨＯＸ－Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はＬＩＢＢＹの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点と

した年代（ＢＰ）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68％）に相当する年代である。なお、暦年較正は、ＲＡＤＩＯＣＡＲＢＯＮ　ＣＡＬＩＢＲＡＴＩＯＮ　ＰＲＯＧＧＲＡＭ　ＣＡＬＩＢ　ＲＥＶ5.02（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（２）テフラ分析・屈折率測定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のＭＡＩＯＴを使用した温度変化法を用いる。

（３）種実同定

種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対象から種類と部位を同定する。分析後の種実は、容器に戻して返却する。

３　結果

（１）放射性炭素年代測定

測定結果（補正年代）は、試料番号１が1,220 ± 30 ＢＰ、試料番号２が1,230 ± 30 BP、試料番号３が1,100 ± 30 ＢＰ、試料番号４が1,070 ± 30 ＢＰ、試料番号５が1,080 ± 30 ＢＰであった。

暦年較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プルグラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再検討に対応するため、１年単位で表している。暦年較正については北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、２σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、試料番号１はcalAD774－869、試料番号２はcal ＡＤ695 － 861、試料番号3はcalＡＤ898－987、試料番号４はcal ＡＤ904 －1,017、試料番号５はcalＡＤ899 － 1,011dである。

（２）テフラ分析・屈折率測定

スコリアはいずれの試料にも認められない。火山ガラスは、試料番号１、２には微量、試料番号３～４には少量含まれる。軽石は、試料番号３に多量、試料番号１に中量、試料番号２、４、５には少量含まれる。火山ガラスおよび軽石の特徴はいずれの試料においても同様である。すなわち、火山ガラスは無色透明の塊状の　軽石型であり、微量の繊維束状のものも混在し、また極めて微量の無色透

明のバブル型も認められる。軽石は、最大約 1.5 ㎜であり、白色を呈し、発泡は良好またはやや良好である。軽石の粒径の淘汰度は、極めて良好（すなわち粒の大きさがよく揃っている）である。

また、試料番号 1 の火山ガラスは n1.503 － 1.508 のレンジを示し、n1.507 付近にモードがある。試料番号 2 の火山ガラスは、試料番号 1 よりも幅広いレンジにあり、n1.495－1.506のレンジを示し、n 1.501 － 1.505にモードがある。試料番号 3 の火山ガラスは、1.499 － 1.509 のレンジを示し、n1.503 付近にモードがある。試料番号 4 および 5 は、ほぼ n1.500 － 1.507 のレンジを示し、n1.503 付近にモードがある。

（３）種実同定

ＳＫＰ 090 1 層（試料番号 5）は、落葉高木のオニグルミの核に、ＳＮ 14（試料番号 1,2）、ＳＮ 15（試料番号 3,4）は落葉高木のトチノキの種子に同定された。以下に、形態的特徴等を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana*（*Maxim.*）*Kitamura*）クルミ科クルミ属

核の破片 2 個が検出された。灰褐色、長さ 2.6㎝、径 2.7㎝程度の広卵体で頂部がやや尖る。1 本の明瞭な縦の縫合線に沿って半分に割れた 2 片で、接合し 1 個体となる。両側面の縫合線上には、齧歯類（ネズミなど）による食痕と考えられる大きさ2㎝程度の歪な円形の孔が開いている。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。

・トチノキ（*Aesculus turbinata Blume*）トチノキ科トチノキ属

種子が検出された。炭化しており黒色。径 2.5㎝程度の偏球体。種皮は薄く硬く、表面にはほぼ赤道面蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、流理状の微細な網目模様があり光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。破片は不規則に割れているものが多く、大きさは 2㎝以下。種子内に残存する胚は基部に臍がある。表面はやや平滑で木質。

４　考察

（１）遺構の年代観

放射性炭素年代測定を実施した結果、ＳＫ 03出土炭化材（試料番号 1）が 8 世紀後半～ 9 世紀後半、ＳＫ04 1 層出土炭化材（試料番号 2）が 7 世紀末～ 9 世紀後半、ＳＩ 05 内ＳＫ 02 1 層出土炭化材（試料番号3）が9世紀末～10世紀後半、ＳＮ13 1層出土炭化材（試料番号4）が10世紀初頭～11世紀前半、ＳＫ32 1 層出土炭化材が 9 世紀末～11世紀前半の年代値を示した。発掘調査所見より、本遺跡で検出された遺構の主体は平安時代とされていることから、今回得られた年代はほぼ調和的といえる。

一方、ＳＮ13の南側そで、ＬＴ52 Ⅱ層に認められた軽石は、最大粒径および粒径の淘汰度、さらに色調と発泡度が同様であることから、同一のテフラに由来すると考えられる。一方、これら 5 点に含まれている火山ガラスについても、同様の色調と形態のものから構成されている。したがって、ＳＮ13の南側そで、ＬＴ 52 Ⅱ層に含まれる軽石および火山ガラスは、同一のテフラに由来する可能性が高い。ただし、火山ガラスの屈折率に試料間で差異が認められている。布田谷地遺跡の地理的位置を考慮し、上述した特徴とこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか ,1981,1984; Arai et al.,1986; 町田・新井 , 2003 など）とを比較すると、ＳＮ13の南側そで、ＬＴ52 Ⅱ層に含まれているテフラは、十和田カルデラを給源とする十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）に同定される可能性が高

い。Ｔｏ－ａは、十和田カルデラから噴出したテフラであり、その噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。これらは、放射性炭素年代測定の結果とも矛盾しない。Ｔｏ－ａは、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981）。今回の試料では、火山ガラスよりも軽石を主体とすることから、布田谷地遺跡の位置する大仙市付近は、Ｔｏ－ａが軽石質テフラとして分布する範囲に入っているといえる。

なお、今回の試料だは、試料間で火山ガラスの屈折率のレンジに差異が認められたが、5点の試料の中で最も低い値と最も高い値を取ると、n1.495 － 1.508というレンジになる。このレンジは町田・新井(2003)に示されているＴｏ－ａの火山ガラスの屈折率と一致する。火山ガラスのレンジが広いことは、町田ほか（1981）で既に述べられており、特に、Ｔｏ－ａの上部火山灰層と呼ばれる層位では、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスが主体になっているとされている。今回の試料のうち、ＬＴ52Ⅱ層には、この上部火山灰層に由来する火山ガラスが少量含まれていると考えることができる。なお、町田ほか（1981）は、上部火山灰層の分布について、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に限られるとしているが、大仙市付近にまで少量ながらも及んだのであろう。ＳＮ13の南側そでについては、上部火山灰層に由来する火山ガラスがほとんど含まれていないことが示唆される。他の試料との違いは、土層中における産状（例えば撹乱の程度など）の違いに起因する可能性がある。

（２）植物資源利用

ＳＫＰ090１層（試料番号5）から確認されたオニグルミ、ＳＮ14（試料番号１・2）、ＳＮ15（試料番号3・4）から確認されたトチノキは、川沿いなどの湿った場所を好んで生育し、現在の本遺跡周辺域の森林のも普通にみられる落葉高木である。また、堅果が食用・長期保存が可能で収穫も多いことから、古くから植物質食糧として利用されてきた有用植物である。これらの種実遺体は、当該期の本遺跡周辺の森林から持ち込まれ、植物質食糧として利用されていた可能性がある。ただし、今回試料としたオニグルミ核には、齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食痕が確認されることから、人間が食用に利用した可能性は低い。一方、トチノキは全て炭化していることから、遺構内に持ち込まれた種子が、何らかの理由により火を受け炭化残存したことが推定される。

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Yamagata,K（1986）Catalog for late quatemary marker － tephras in Japan Ⅱ—Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido— .Geographical reports of Toyo Metropolitan University No.21,223 － 250.

古澤　明「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」地質学雑誌 101,123 － 133.（1995）

早川由紀夫・小山真人「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. 火山」,43,403 － 407（1998）

石川茂雄「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会 328p（1994）

町田洋・新井房夫「新編　火山灰アトラス」東京大学出版会 336p（2003）

町田洋・新井房夫・森脇広 ,1981, 日本海を渡ってきたテフラ . 科学 ,51,562 － 569.
町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 ,1984, テフラと日本考古学―考古学研究と関連するテフラのカタログ―. 渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 . 同朋舎 ,865 － 928.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

第 2 節　布田谷地遺跡出土木製品の樹種

（株）東都文化財保存研究所

1　試料

試料は、平安時代の曲げ物の部材 3 点（底部材・側面材・継ぎ目材）である。

2　分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面)･柾目（放射断面)･板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末 , グリセリン , 蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊藤（1982)、Richter 他（2006）を参考にする。また､各樹種の木材組織の配列の特徴については林（1991）を参考にする。

3　結果

曲げ物部材は全て針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（Ｌ .*f.*）*D.Don*）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、 1 分野に 2 － 4 個。放射組織は単列、 1 －10 細胞高。

引用文献

林　昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
Richter Ｈ .G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）「針葉樹材の識別ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト」（2006）伊藤隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.「ＩＡＷＡ List of Microscopic Features for Softwood Identification］海青社 70p（2004）
島地　謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社 176p（1982）

第６章　まとめ

布田谷地遺跡では、縄文時代の陥し穴２基と後期･晩期の土器･石器、平安時代の竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡２棟、井戸跡７基、土坑19基、溝跡２条、焼土遺構９基、柱穴様ピット183基と土器･鉄製品・木製品・石製品、中世の陶磁器類などを調査した。

旧雄物川に隣接する微高地に立地する本遺跡は、縄文時代には狩猟場・キャンプサイト的な使われ方が想定される。また、平安時代には集落が営まれていたと考えられるが、その後は、中世陶磁器が出土しているものの、大きな集落などが営まれた痕跡は認められない。

布田谷地遺跡の平安時代の集落の性格を検討する上で重要なのが、竪穴住居跡の堆積土中から出土した「大万」墨書土器である。

杯形土器に「大」「万」を縦に重ね合わせた文字は、古川淳一氏のご教示によれば東北地方では８世紀後半から10 世紀前半に編年される土器に見られ、宮城県山王遺跡・壇の越遺跡・市川橋遺跡、福島県郡山五番遺跡・上吉田遺跡・大戸古窯群で出土例が報告されていると言う。

「大」「万」を重ね合わせた文字を土師器に墨書した例は、壇の越遺跡・市川橋遺跡・郡山五番遺跡に見られる。山王遺跡では赤焼土器に、市川橋遺跡と上吉田遺跡では須恵器に墨書しており、大戸古窯群では須恵器に刻書している。

秋田県内で「〇万」の墨書された土器は､高橋学氏のご教示によれば「中万」「福万」「五万」「八万」「十万」「千万」の６種が見られると言う。「中万」は払田柵跡で、「福万」・「五万」･「十万」は秋田城跡で､「五万」は美郷町厨川谷地遺跡で､「八万」は鹿角市一本杉遺跡で出土している。また、「十万」は鹿角市神田遺跡、「千万」は羽後町城神巡り遺跡でも出土している。

鹿角市の２遺跡以外は、平安時代の城柵官衙遺跡か関連遺跡の出土である。供膳形態の土器に吉祥文字を書き加えて供養具として用いたものかとも推測されるが、城柵官衙遺跡か関連遺跡から出土する例が多いことは、この文字の持つ意味を示唆しているのかも知れない。

本遺跡の平安時代の竪穴住居跡では、廃絶時にカマドの両側に土坑を掘り、完形の土師器杯形土器や鉄製鋤先を入れて埋め戻していること、カマド燃焼部上面に墨書土器、住居内全体にばらまかれたように土師器の破片が出土していることから勘案し､住居廃絶に伴う祭祀行為があった可能性もある。

また、東南東に12.5㎞離れた城柵官衙遺跡である払田柵跡や、本遺跡の南東3.7㎞に位置し、日本最北の式内社である副川神社の祀られている神宮寺嶽との関連性も指摘され、本遺跡の平安時代の集落の性格を考える上で検討する必要があろう。

ＳＫＴ 44 陥し穴完掘状況

ＳＫＴ 45 陥し穴完掘状況

遺構外出土縄文土器（第８図２）

遺構外出土縄文土器（第８図３）

遺構外出土縄文土器（第10図７）

遺構外出土縄文土器（第12図11）

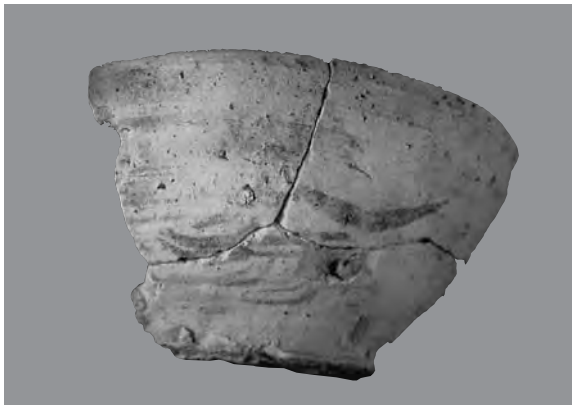
図版2

ＳＩ 05 竪穴住居跡完掘状況

ＳＩ 05 竪穴住居跡カマド遺物出土状況

ＳＩ 05 竪穴住居跡内ＳＫ４土器出土状況

ＳＩ 05 竪穴住居跡内ＳＫ５鉄製鋤先出土状況



ＳＩ 05 竪穴住居跡出土墨書土器（第22図1）

ＳＢ 40 掘立柱建物跡完掘状況

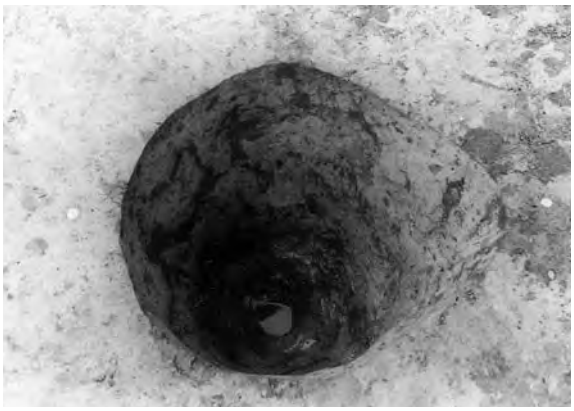
ＳＢ 41 掘立柱建物跡完掘状況

ＳＥ 03 井戸跡完掘状況

ＳＥ 21 井戸跡完掘状況

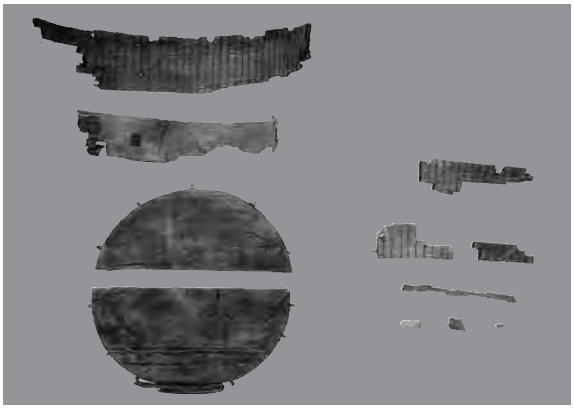
ＳＥ 22 井戸跡完掘状況

ＳＥ 31 井戸跡完掘状況



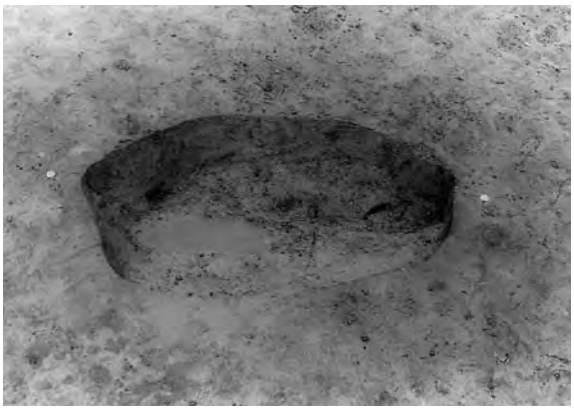
ＳＥ 38 井戸跡完掘状況

ＳＥ 43 井戸跡完掘状況



ＳＥ 43 井戸跡出土曲物

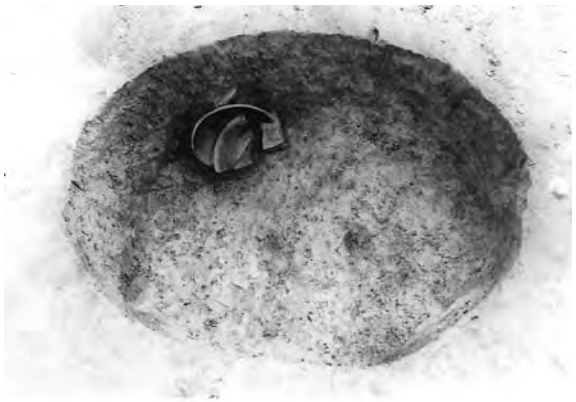
ＳＫ 07 土坑完掘状況



ＳＫ 12 土坑完掘状況

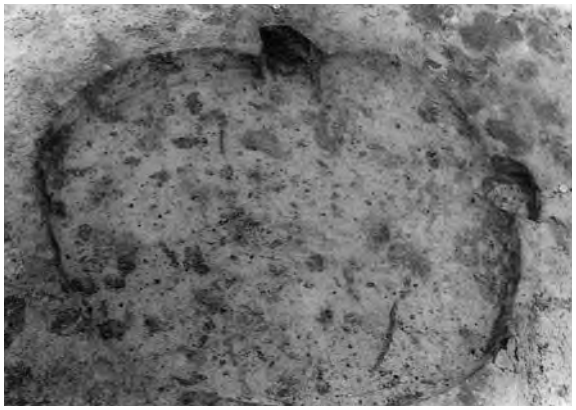
ＳＫ 29 土坑完掘状況

ＳＫ 30 土坑完掘状況

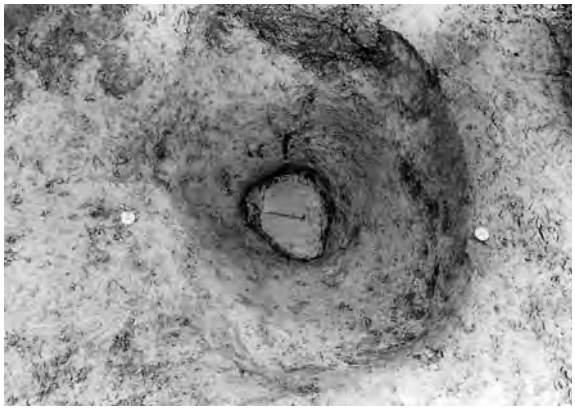


ＳＫ 32 土坑完掘状況

ＳＫ 33 土坑完掘状況



ＳＫ 34 土坑完掘状況



ＳＫ 36 土坑完掘状況

ＳＤ 08 土坑完掘状況

ＳＤ 42 土坑完掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぬのたやちいせき
書名	布田谷地遺跡
副書名	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第433集
編著者名	栗澤光男・吉川寿朗・深沢恵里子・長岐有扶子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2007年11月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ぬのたやちいせき 布田谷地遺跡	あきたけんだいせんし 秋田県大仙市 きたならおかあざぬのた 北楢岡字布田 やち　ばんち 谷地112番地 外	05205	—	39° 30′ 03″	140° 24′ 32″	20060613 ～ 20061002	5,750 ㎡	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
布田谷地遺跡	狩猟場 集落跡	縄文時代 平安時代	陥し穴　2基 竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡　9棟 井戸跡　7基 土坑　19基 焼土遺構　9基 溝跡　2条 柱穴様ピット　183基	縄文土器、石器 土師器・須恵器 曲げ物	

秋田県文化財調査報告書第433集
布 田 谷 地 遺 跡
－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

印刷・発行　平成19年11月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331 FAX(0187)69－3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580　秋田市山王三丁目1番1号
電話(018)860－5193

印　　刷　株式会社三森印刷